

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十年十二月廿日印刷納本 昭和十一年一月一日發行

淨土

正同號

第二卷 第一號



法然上人鑽仰會發行

中村 辨 康 著 (増補改訂版)

信仰讀本

定價二〇錢 (送料二錢)

四六版 八〇頁

總ルビ付き

正しい信仰への手引き！それこれ程平易明快に
取扱つた物はかつて無いと云つてもよい！

この書が近來の名著として出版界の記録を破る賣行きを
示したのは決して偶然ではない。

今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざるをかこつ人々に普
くこの書を捧げたき念願の下に、著者に乞ふて、更に平易にし、著者の思想的
擴充による補ひをもなして、こゝに増補改訂版の出版をなしたのである。雜誌
「淨土」の著者の名講義の愛讀者は、これによつて更に高い信仰の段階に進まね
ばならない。

内 容

第一章 悟りと救ひ

第二章 宗教と人間の望み

第三章 信する心持

第四章 信仰の本尊

第五章 信仰を得る迄

◇ 發行所 ◇ 法然上人鑽仰會 ◇

ぜんそく苦に

専門薬 イワミドリン

奏効顯著
副作用絶無



試薬進呈 淨土讀者に限り、發賣元へハガキで御申越次第試薬（三十錢分）無代贈呈いたします。

秋から冬にかけての苦しい喘息發作の豫防と治療に、イワミドリンを推奨します。本剤は植物性有効成分を抽出合成せる専門薬で、ヒイ／＼する程の發作も服用後五分間で和ぎ、患者を安靜せしむるのみならず、漸次病根に作用して治療の目的に導き、絶対副作用なく發作を豫防いたします。その實効を先づ試薬により御實驗下さい。自信あればこそその試薬進呈です。

薬價 五十錢、一圓、二圓、三圓、五圓
十圓（有名藥店にあり）

大木五城園本社
ツマブラスター

大木合名會社

東京市神田區鍛冶町三
番 電話 五五四〇番



◆ 淨 土 第一二卷 正月號 目次 ◆

・ 表 紙 井 上 正 春

・ 扉・目次カット 森 田 沙 夷

說 苑 年 頭 雜 話 文學博士 小野玄妙 (二)

三 來 夜 話 信 仰 の 一 念 増上寺 法主 大島徹水 (七〇)

信 仰 講 女 子 三 變 化 眞野正順 (一四)

隨 雪 の 山 の お 正 月 黒田米子 (三三)

筆 冬 ぞ 川路柳虹 (四二)

法然上人をめぐる人々――

那 智 の 櫻 の 下 蔭 中村辨康 (四六)

小 説 旅 路 の 芭 蕉 宇野浩二 (一〇)

訪 問 記 念 佛 信 仰 に 立 つ 店 本誌記者 (三六)



の趣味書初めの心持……………柳田泰雲(一〇)

隨上人はほゝえむ……………友松圓諦(四四)

想自然禮讚……………山中峯太郎(六)

信仰強談 空巢犯人の夫と信仰に入る……………佛子みね(六六)

名士に聴く 人間をつくる教育……………東京女高師 校長 下村壽一(三八)

繪の旅應舉 寺(但馬大乘寺)……………小野佐世男(一三)

信仰相談……………(六四)

大衆小説 恩讐開化仁義……………山岡莊八(五二)

阿彌陀經講義 淨土獲得の方法……………中村辨康(七三)

短歌……………與謝野晶子選(六八) 甘酒進上……………中野尅子(四四)

俳句……………或 角選(六九) 淨土華……………山崎長三郎(四六)

編輯後記……………(八三)



[部一の舎校新]

注意

豫科第三年、専門部高等師範科第二、三年、
同佛教科第三年ハ補缺募集ヲセズ

學

部

佛教學科・宗教學
科・哲學科・史學
科・英文學科・國文
學科・支那文學科
募集人員 若干名

大學豫科

一學年 募集人員 百二十名
二學年 補缺 若干名

専門部佛教科

一學年 募集人員 百名
二學年 補缺 若干名

専門部高等師範科

一學年 募集人員 六十名

特典

學部卒業者ハ文學士ト稱スルコトヲ得、更ニ中等教員又ハ
高等教員無試験檢定資格アリ。高等師範科卒業生ハ國語・
漢文・公民歴史、豫科ハ英語ノ中等教員無試験檢定アリ。

◇願書受付 四月九日迄

◇入學試験開始 四月十日

◇詳細ハ學則參照、郵券二錢封入ノ上申シ込マレタシ。

大正大學

東京市豐島區西巢鴨(省線、市電)
(至極便)

電話大塚(68)八九四番・九九六番

淨 土 新 年 號

鼠壽三百歳満る歳則色白

善導人而ト曰仲能知一年中吉凶及千里外事

録抱朴子之文

沙大并題

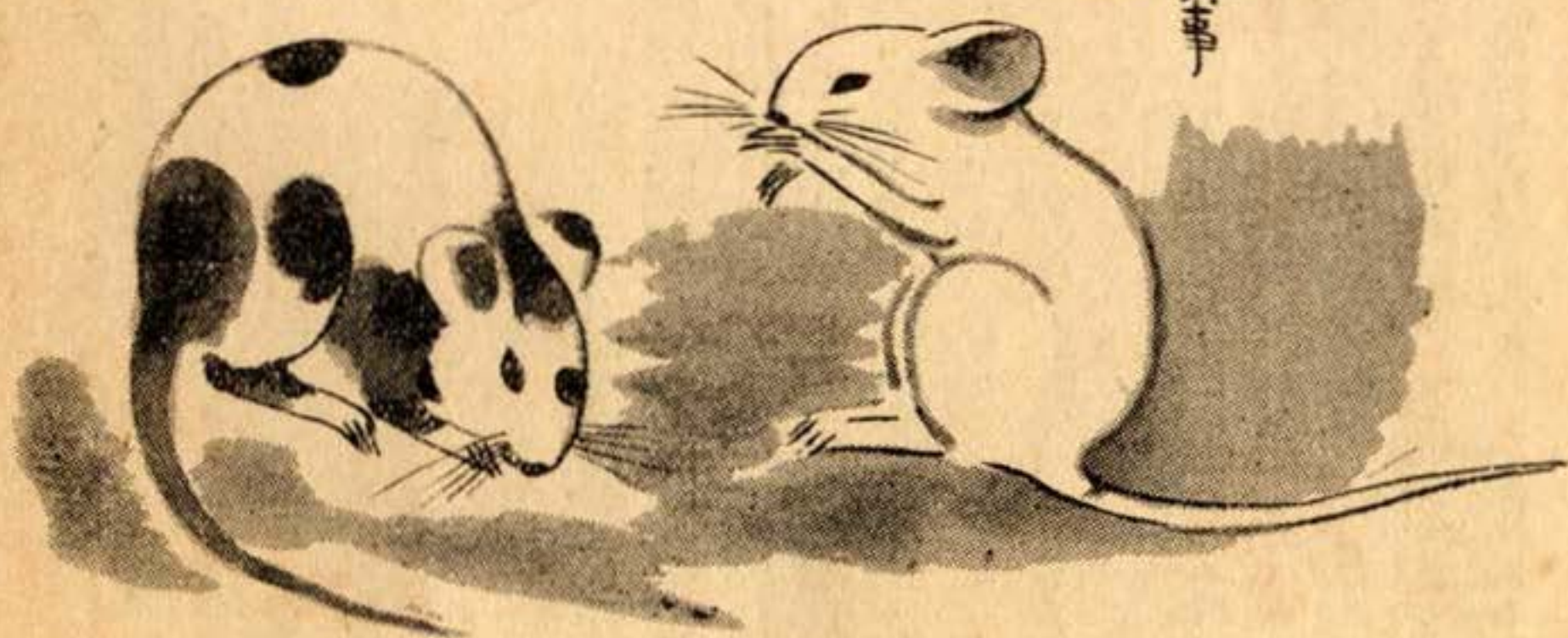
柴の戸にあけくれかゝる白雲を

いつむらさきの色にみなさむ。

雪のうちに佛の御名を唱れば

つもれるつみぞやがてきえぬる。

法然上人



年頭雜話

文學博士 小野 玄 妙

まだ私が小さかつた頃の時分のことを、今の時代と較べて見ると、世の中は見違へるやうに變つてゐる。僅か三四十年の間ではあるが、随分變つたものだ、つく／＼考へさせられることがある。——社會組織の複雑化、それに伴ふ人間生活の苦惱、かう云つたものが私達の頭上に深刻に掩ひかぶさつてゐる。これをどうして切り抜けるか、どうしたらこの苦惱から逃れることが出来るかと云ふことについて、今日さまざま生活様式が考へられてゐるやうである。此の代表的なものが二つある。その一つは、かうした世智辛い世の中になると、人を蹴倒しても自分だけは生きてゆきたい、自分さへよければ他人はどうなつても構はない、自分さへ儲ければ他人の痛さは三年でも……と云ふ、個人的な資本家氣質で押し通さうとする、そこに多人數集つてゐる社會としては當然無理が生じて来る。これに對して他の一つは、そのやうに利

益を或る一人に壟斷されては困る、それでは自分達が生きてゆけぬからこれに對抗して相互に共同戦線を張り、その肉の分け前にあづかつて生活の安全の保障を得やうとする、所謂集團的な勞働者氣質と云ふものがある。この二つが何かの場合に正面衝突すると、とんだ爭議がもちあがつて、双方の建て前を固持してなか／＼譲らないと云ふやうなことが、時として起るやうである。尤も生存競争の激しい世の中では、昔のやうに吞氣なことも云ふて居れぬし、又吞氣に構へても居られまい。かうした社會的紛争なり、又は諸種の案件は、大體その國家の法律の捌くところに委すより他に仕方はないやうにも考へられるが、併し社會の安寧秩序を法律だけで保つてゆくと云ふことは、理論としては可能であらうが、實際問題としては不可能なことに屬するやうに思ふ。國民の道德的觀念を無視した法律はありうべ

からざることである。國民の一人一人がみんな正直で善良な人であり、その社會道德が完全に行はれてゐて、何人も悪いことをせず、本當に平和な社會であるとするならば、別に法律なんといふやゝいゝしいものは必要としない。ところがその中の誰かゝ悪いことをして、その道德を破り、社會全般の秩序を紊すやうなことになる、そこに初めて法律の必要が生じてくるのである。だから法律は人々をして、強制的にでも社會國家の安寧秩序を保たしめやうとするものである。この意味から云つて、法律は道德の延長であり、道德の條文化されたものであり、道德の番人でさへもある。だから道德を度外視した法律はあり得ないことになる。

社會の組織が複雑になつて來れば來るほど、その犯罪も多くなるだらうし、随つて「こうしてはいけない」「こんなことは當然しなければならぬ」と云ふやうな、道德の細目即ち、徳目も自然と殖へてゆくことは當然である。だが併し、たとひ新道德がつけ加へられたとしても、その國民のもつ道德の本質的原意には何ら變りのあらう筈はない。

海外の新文化を移入して、新しいことを言ふのも善し、新しいことをするのもよし、また、草葺の家が堂々たる洋館になり、紋付の羽織袴が洋服に變るのもよい。だが、洋館に入り、新しい洋服を着たからと云つて、急に日本國民としての魂の置きどころ

を換へて、魂まで露西亞かぶれをしたり、亞米利加かぶれをされたのでは困る。君民その分際を保つは嚴乎たる我が國體の精華であり、父子相和する醇朴なる家族制度は我が國民の傳統的美風である。

近時、我が國民精神が著しく荒廢したと云ふが、それには又さうなるべき原因がある。こゝ六十年ばかりの急激な社會的變化は實に目覺ましいものがある。物質文化の移入のみならず、洋食洋館、洋服と云つて衣食住の三つの大きな生活様式まで變るやうな大影響を蒙つてゐるのであるから、その精神的方面にも可なり外來思想の洗禮を受け、それに浸潤されてゐることも想像するに難くはない。昔から居は氣を移すと云ふから、さもあらんと思はれるふしがないでもないが、それにしても萬國に炳たる我が國體を忘れ、親子兄妹相睦ぶ家庭を忘れるがときは、實にお話しの外であり、金髪かぶれもいゝ加減に憤んで貰ひたいものだと言ふべく思つてゐる。

思ふに今日の國民教育は完全位に達してゐる、否完全し過ぎたやうにも思はれる。過ぎたるは及ばざるが如しと云ふが、實際その通りだと思ふ。今日、非常に叫ばれてゐる國民精神の作興にしても、口上や文書だけの叫びでは既に小學一年生以來、修身に倫理に、耳にたこのよる程聞いてゐる。理窟の上での修身教育、文

書の上での精神作興が、その非常なる努力にも拘らず左程徹底しないといふのは、その先導者が身を以つて範を示さないことをも反映してゐるやうに思はれる。

私は三人の先導者をもつてゐる。しかも其三人が言葉や理窟で教へ導いて呉れたのではなく、身體でもつて教へ示して呉れたのである。その一人は私の生母である。母はいろは四十八文字しか知らなかつたが、その日常の起居動作は實に嚴格で、毎日同じ事を繰り返しながら、それが如何にも規則正しかつた。起床、三度の食事、就寝、それが一日も時間を違へず、きちんと守られてゐた。かつて「寢亂姿を見せぬのは女の身嗜しなみだ」と云はれたことを覚えてゐるが、いつも家中の誰よりも早く起き、そして一番後で床につかれた。私にしてはお恥しいことだが、私が三十五六歳になり、母が老衰で床に親しみ勝ちになるまで、私は一回も母の寢姿を見たことがなかつた。私は母を憶ふたび毎に、ありし日の行儀正しかつたことを、まぎ／＼と感ずるのである。

それから第二番目は私のお剃度の師匠、規譽大智上人である。私は十六歳で得度し、その年すぐに東京へ出て、書生生活のまゝ今日に至つてゐるので、師匠の下で教を受けた日數と云ふのは本當に短い間であつた。師匠は信州出身の山國氣質で剛直な人であり、又毀譽褒貶にも超然として居られたやうである。物事を粗末

に取り扱ふのを大變やかましく言はれ、何ごとにつけても實實を重んじ、所謂少欲知足の精神を身をもつて示されてゐたことを、今でもはつきりと覚えてゐる。尤も師はその剛直なる性格からして、その晩年は不遇に終られたがとにかく、あの謹嚴な動作と慈父のやうな示誨とは心魂特に銘ずるものがあつた。

最後に第三番目は横濱光明寺の宮下舜達僧正である。私は今から三十四五年前、僧正が目黒の長泉院に居られた頃、そのお寺で御厄介になつてゐたことがある。僧正は毎朝、夜のまだ明けないうちに朝の勤行をされ、それからきまつたやうに境内の庭掃除をされるのが日課の一つであつた。自から箒を持つて、黙々として掃除されるのを見せつけられては、自分も後につゞいて箒を採らざるを得なかつた。その頃のある朝のこと、僧正は手にした箒をうごかされながら、私に向つて「人は何時までも人に使はるべきものではない。使用人魂性をもつてゐる人は、いつまでも他人の下に使はれねばならない。それよりも、寧ろ人を使ふことを考へねば駄目だ。」と教へ訓されたことがあつた。その所謂「人を使ふことを考へよ」と云ふのは、上人が、不斷に實行して居られるところの、自らの先に立つて働くことを教へられたものであると思つてゐる。僧正が自ら箒をもたれるから、いや／＼ながら自分も引きづられて働いてゐたその當時のことを考へると、まことに

恥かしくてたまらない氣がする。實際、この時の一語は僧正の言行一致の教訓であり、私にとつてはいつまでも忘れることの出来ない大教訓である。

思へば私にも學生時代があつた。そして修身や倫理の講義も随分聴いたものだし、又その試験の答案を書いて、餘り悪くない成績をとつたこともあつた。だが併し、今となつてはそれ等の殆んど全部を忘れてしまつてゐる。たゞ、私の頭に深く刻みつけられてゐるものは、倫理の講義ならざる此の三人の人の生きた教訓である。口や言葉の先だけでなく、實に身體そのもので教へられた教訓である。それが今日までの私の全生活の血となり、肉となつてゐることを思ひあはすと、この何でもないやうな教の前に心からなる感謝を捧げずには居られない。

才と學と徳、この三つを並べた場合、何といつてもその基礎になるのは道徳である。その道徳も考へ方によつては甚だ難しいものになるが、これを實踐すると云ふ方面から考へれば極めて平凡なことである。しかも、此の平凡なことがなかなか實行出来ない。これを實行出来るやうに教へ導いてやるのは、何よりも先ず身體をもつて示すこと以外にない。佛教でも色々矢筈しいことを教へるが、その所謂八萬四千の法門も、結局詮じつめてみれば、

諸惡莫作 衆善奉行

の八字につきる。邪しき惡をさけて、正しく素直に働くといふことが、その眞髓である。これが具體的に實行されさへすれば、君に對しては忠、親に對しては孝、友に對しては信、家庭に對しては和、人生の幸福はそこから出發する。この心がけさへ充分に出来てゐさへすれば、如何に盤根錯節せる大難關と云へども、やすやすと突破し得るはずである。

この平凡なることを積極的に實踐しやうとする。その心がけは唯机の上の理論教育だけで、假令百萬言を費したとしてもその實踐は到底望み得ないことである。俗諺にいふ「論語讀みの論語知らず」で倫理は知つただけでは何にもならぬ。近時、日本精神の發揚と云ひ、國體の明徴と云ふ。それは日本精神そのものを釋明することだけでとゞまるのではなくて、それを實行の上に體現することではなくてはならぬ。云ふことだけなら三歳の童子も能くこれを言ひ、蓄音機でもラヂオでも事足りるが、さてこれを行ふことになるやうと八十歳の老翁も亦これを如何にともすることが出来ぬ。これを眞に行はしめるものは實にその人の内的自覺に俟つより外にない。この内的自覺を眞に鞭ち、眞に教育するものは、畢竟これ宗教以外の何ものでもないことを強調して、私のこの責をふさぎたい。(完)

x

x

自然禮讃

山中峯太郎

念佛とは

「念佛」

念ずる佛であり、佛を念ずるのである。念ふ佛のみこゝろをうけて、佛を念ふ。これが念佛である。

佛と自分が一つになる「念佛」。

「淨土」の教は、「念佛宗」といはれる。すなはち、佛と自分と一つにされる教であると念ふ。

念——字のとほり今の心である。

今現に、佛は私と共にありたまふ。

自然の教

「法爾の道理」といふことあり。炎は空にのぼり、水は下りさまに流る。くだものゝ中に、酸きものあり甘きものあり、これらはみな、法爾の道理なり。阿彌陀佛の本願は、名號をもつて罪惡の衆生を、みちびかんと誓ひたまひたれば、たゞ念佛だにも申せば、佛の來迎は法爾の道理にて備はるべきなり。」

すべて、自然に順ふべきである。

「淨土」の教は、自然の教であるとおもふ。

逆らふな。順ふ念佛である。

ある老師が、いつも言はれた。

「このまゝでいゝのぢやよ。」

炎は上り、水は下る。すこしの計らひもなく、そのまゝに順ふ。人間の生活の上にも、この自然のまゝに生き行くととき、おのづからの創造、おのづからの進展が、日々にひらけて行く。自然のうちに、他力が自力に溶けあひ日々に育てられる。おのづからな法爾の道理である。

「淨土」について、「無量壽經」に説かれてゐる。

「往き易くして人なし。その國、逆達せず。自然の牽く所なり。」

自然の牽くところ、すこしの逆違もない。あまりに自然なので、往き易くて往く人がない。往くに易しすぎる國が、淨土である。

「このまゝでいゝのぢやよ。」

あまりに易しすぎる。

この「淨土」のやさしさを、難しく

するのが、人間の作爲である。難しい「教義」「宗乘」など、いふものも、作爲の一つであらう。それらはみな、自然に逆らふ。

生かすところ

ひとりの少女が、お佛壇にさゝげようと、花をさがしに出た。野に美しい秋草の花を見つけて、摘みとらうとしたとき、少女は、あまりの美しさに伸ばした手もそのまゝ、摘むに忍びなかつた。ふと氣が

ついたことは、（このまゝ佛にさゝげませう。）草花のそばにたゝずんで、手をあはせた。

治 病

「その國、逆違せず。」逆らひなく、違ひなく、自然のまゝに生きたいと願ふ。今生の「願往生心」であらう。この心のまゝに生きるとき、體もおのづから健かに伸びて行く。いはゆる病念が、自然に

消されるからである。

すこしでも身に病あるとき、どこかに逆らふ心、違ふ心があるのでないかと思ふ。

逆違する心は、省みると、多くの場合において、不自然の意慾であるのを、私はいつも耻ぢる。

佛を念ふとき、自分のさかしらな意慾は解消する。病もそこに、おのづから體に消える。

病は體の逆違である。

「佛の御力は、極樂に往生するほどの大事をすら、遂げさせたまふ。ましてこの世に、いくほどならぬ命を延べ、病をたすくる力、ましまさざらんやと申すことなり。」

第一義

「念佛は申しますが、心の散るのをどうしたら宜しうございませうか。」



法然上人

木村武山畫伯筆

「それは、源空も、戒およばぬこと
でござる。」

「さて、それを、どうすれば宜しう
ございませう。」

「佛の御名を稱ふれば、往生すべし
とこそ心得て、おほらかに念佛申す
が、第一のことにござる。」

「わかりました。これを承けたまは
りにまゐりましたので。」

法然上人と、明遍僧都の一問一答
「これより前後には、いさゝかの詞
なくて、出でられにけり。」

と、しるされてゐる。

「おほらかに念佛申すが第一。」

自然の念佛に生きるが第一、法然
上人の御教は、このほかにないとお
もふ。

「智者のふるまひをせずして、たゞ
一向に念佛すべし。」

事 實

いかに生くべきか。

この問にこたへられる、法然上人
のお言葉に、

「現世のすぐべきやうは、念佛の申
されんやうに過ぐべし。」

生活様式は、念佛第一にせよ。

「念佛の妨げになりぬべくは、何な
りとも、よろづを厭ひすてゝ、これ
を止むべし。」

これを省みたいとおもふ。

「聖(獨身)で申されずば、妻をもう
けて申すべし。」

結婚も念佛のためにせよ。

「妻をもうけて申されずば、聖で申
すべし。」

念佛の妨げになる家庭生活を、幸
ひにして私はしてゐない。

「住所にて申されずば、流行して申

すべし。」

流れ歩かなくても、現在の家に
て、私は妨げがない。

「流行して申されずば、家にゐて申
すべし。」

ありがたいと思ふ。

「自力の衣食にて申されずば、他人
に助けられて申すべし。他人に助け
られて申されずば、自力の衣食にて
申すべし。」

自力で食べて住んでゐるとは、お
もへない。さりとて他人に助けられ
てゐるとも、おもはない。念佛にめ
ぐまれてゐると、かすかながら思は
ずにゐられない。

「一人して申されずば、同朋と共に
申すべし。共行して申されずば、一
人こもりゐて申すべし。」

こもりゐしなくても、私はたゞ一
人で申す時の方が多い。

「衣食住の三つは、念佛の助養なり。」

念佛第一に生きよ。

衣食住の三つは、念佛のうちからおのづから生れる。これは事實である。

生まれつきのまゝ

「本願の念佛には、獨り立ちをせさせて、助をさゝぬなり。」

念佛は、佛と自分との直接交渉である。

「助さすほどの人は、極樂の邊地に生まる。」

おそろしいことである。

「助と申すは、智慧をも助にさし、持戒をも助にさし、道心をも助にさし、慈悲をも助にさすなり。」

智慧、持戒、道心、慈悲、省みて耻づ

かしながら、私には縁がない。助に

しやうにも、手もとにないのが、事實である。まことに顔が赤くなる。

「それに、善人は善人ながら念佛し悪人は悪人ながら念佛して、たゞ生まれつきのまゝにて念佛する人を、念佛に助をさゝぬと申すなり。」

生まれつきのまゝにて——萬人の道である。

「さりながらも、惡を改めて善人になりて念佛せん人は、佛の御心になふべし。」

惡は無論あらためねばならぬ。

「かなはぬもの故に、とあらんかくあらんと思ひて、決定の心おこらぬ人は、往生不定の人なるべし。」

なにも思ふことはいらない。生まれつきのまゝにて、こゝに自然に生

きられる。

大きな自由な生活が、心に身にめぐまれて行く。

命

「十惡の法然房が念佛して往生せんと云ひゐたるなり。また愚痴の法然房が念佛して往生せんと云ふなり。」

あらゆる「助」を、とつてしまはれたお言葉であらう。

「たゞ今、彌陀の願の心は、かくのごとく悟れと云ふにはあらず。たゞ深く信心をいたして、唱ふる者を迎へんとなり。」

しかし、いくら唱へても、

「かけてもふれても、自力の念佛とは云ふべからず。」

他力とおもふさへも自力であらう。

「一念も十念も決定往生なり。」

萬人の願、死んでも命がありますやうに、と、その「命」がこゝにある。

この命をめぐまれずに、何の生活があらうか。

嘯 傲 煙 霞

しんがれ
あふく

一番 書初 の 氣持

(カットは泰雲
先生とその書)

……書がうまくなるには……

東方書道院審査員

柳 田 泰 雲

——一年の計は

此の一筆より——

大晦日が過ぎると明日

は元旦で、日の光もにこ

／＼と輝き、如何にも天

地が變つた様に思はれる

ものです。心氣一轉今年

は大飛躍をと大いに意氣

張るつもりです、書き初

め、弾き切れ、等々新し

い氣持で今年の勉學發展

を約束するわけです。新年には誰も一つ書初
めを試みて戴きたい、一年の計は此の一筆に
あり」と云ふ意氣込みで試みて下さい。どん
な字が出来るでせうか。

これから書道と云ふものゝ大體をお話しし
てみませう。昔から「心正しければ則ち筆正
し」と云ふ事が云はれてをりますが、全くそ
の通りで、書く人の心構へがしつかりとして
ゐなければ、決してよい書は書けません。

一枚の白紙を前に端座し筆に墨を含ませて
グット一筆書き出す時、太く書こうが、細く
書こうが、相手は白紙です、心の赴く處、何

處へどう筆を運ぼうと自由です、従つて心の
反影が書を通して白紙の上に現されるわけで
す。其所で字を書く心構へはどうす可きかと
云ふ事になります。用意された紙、色紙、
短冊等を前に靜に此から書く字の體、出來上
りの結果に考へ及ぶのですが、流麗な字、活
達な字、素朴な字等、目標と心とが一致して
筆を運びつゝ立派な思ひ通りの結果が得られ
ゝばよいのです。然しなか／＼此はむづかし
い事で、その時の氣分に運筆が、ひつたり一
致し虚心坦懷にスラ／＼と出來上つたのでな
いとよい結果は得られません。スポーツで
も、碁將棋でも、精神統一がなければうまく
ゆかないものですが、此の點書に於ては特に
精神の端正さが必要です。雑務に迫はれてゐ
る近代人はなか／＼心の平安さを取りもどし
にくい、然し書の場合は相手がいらないので、
で、一人筆を以て端座すれば事足りるので、
座禪の心境、念佛の境地に近い心構へをもつ
てすればよいと思ひます。

書道の修養

日本一の書道の大家と云はれる人々でも、書の完成と云ふ事は云はれない。それは人格の完成と云ふ事が云はれないと同様です。人々は各々興へられた天分と云ふものがあるもので、その天分の閃めき、性情の反映によつて生れ出た書は必ず各自各様の特色をもつてゐるわけです、其の特質天分を充分發揮す可く技術の修練を必要とするので、徒に自己の特長を棄てた他人の追隨では、書の目的は達せられません。

書の技術を練る上に於ては昔の立派な人々の書かれた、法帳、碑文、等を座右に置き常に



習練をつむと云ふ方法があるのですが、然し若し表面的な技工のみに走る時は所謂畫工の技に了るので、ペンキ屋や看板書き等と何等變る處がないことになつてしまふ、又唯古人の名筆をそのまゝ形だけまねればよいと云ふのでは、結極書の眞價と云ふものを理解することは出来ない。要は古人の名筆を充分に理解すると云ふ事にあるので、それは古人の人格、性情を理解し、自分の精神も亦其れに近づいて來た時初めて得られる事です。新井白石が一日の内に千字文を五六回も習練したと云ふ様な、技術の練磨も大いに必要ですが學問の修養により、詩文の趣味により、自己をより高い處に引揚げて行く事が最も必要なわけです。



上は正・面・下は横・カ
見タ筆の構へと姿勢

日本座敷に通されると、何處の家の床の間にも畫か書が懸けられてゐます。うまい書もあれば、まづい書もある、誰が書いたのかわからぬ場合もある。自分が尊敬してゐる人が書いたものであれば、その書を通してその人の人格を偲ぶ事が出來ます。其の場合はその人の書を見てその人を思ひ浮べたので書そのものの、觀賞は別問題なのです。大體日本の書と云ふものは、現代では名士の書、と云ふものが多數をしめてゐます、誰が書いたか知れぬが、實に立派な書だ、此れこそ家の床の間に飾る可きだと云ふ様な、書そのものの藝術を味ふと云ふ様な處までは行つてゐない。文字の國と、云はれる支那では到る處に書が懸けられてありなかく立派なものが見出されます。其は支那人が書と云ふものを藝術として愛好してゐる爲めです。日本の書は實用書

支那人の書は日本人よりうまいか

か、俗士の書が所謂書道なので藝術書まではなか／＼達しないと思つてゐます。此の點支那人の方が書に對する見方は一歩進んでゐると思ふ可きでせう。

音樂の美しきものを聞けば喜び樂しみ、或は悲しみ傷む、と云ふのは其の音律に心が觸れるからです、詩歌を誦すれば又感慨を深くするのと同じく詩文を誦するものゝ心を動かす爲めです。崇高な書に接すれば同じく云ひ知れぬ氣韻に心が動かされるのです。藝術と云ふものは人の心に對して働く靈妙の力を有するもので、書を學ぶ者も此の領域に入る可く努力す可きです。現代の日本の書道の様に學術的に書とも云へず、實用の書とも云へぬ力間的なものでは困るので、一いきの努力が必要です。書に對する一般の見方が一歩進歩すれば遙に立派な日本書道が生れるのです。

弘法は筆を撰ばず

昔から「弘法は筆を撰ばず」と云はれてをり、その意味は字の巧拙は結極筆ではない。上達して來ればどんな筆でも立派な字が書け

最上の筆、最上の紙、最上の墨を以てすればよりよいものが書けるので、彫刻や、繪畫等に於て材料、用具が重要視されるのと同じ事です、趙子昂と云ふ人の言に「紙筆意にかなはざれば能書といへども能くせず」と云ふ様

肆 所 藏 油

臨 泉 濯 趾

感 興 魚 鳥

安 茲 幽 時

る、と云ふ様に考へられてゐるが然し其れだけでは考へ方が皮相です。苟も藝術書を書こうと云ふものは、その用ふる材料には最善の注意が必要であることは言ふまでもない。

に弘法大師の例とは反對に取られます、然し弘法筆を撰ばずと云ふ意味は、叡智濶達の高僧弘法大師の人格の前にあらゆるものが生かされたと云ふ事を意味するので、筆をば撰ばずは、大師の人格の頂點、書の技術の頂上を意味したものであると思ひます。あらゆるものゝ性能を見ぬいて自分の性格の内に誕生せしめた意味でせう。大師は筆を撰ばず、筆を生したと云ふ意味です。大師の域には到底達し得られぬまでも、そうした心のゆとりは大いに必要です。然し現代の吾々には如何にして立派な藝術書を書くかと云ふ事が問題なので、筆墨を撰び、用紙を吟味する事は必要です。

但馬・應舉寺



繪の旅

應舉寺

(但馬の大乗寺)

小野佐世男

香住の宿で港の戯ちいさんが、
『コー、いまとれたばかりの烏賊じ
や、日本海の荒海にもまれた生のよ
いやつじや、ソーレーパイやらかす
べえ』

と、まだ東天の白まぬうちから
盃をかたむける。

今！ 應舉寺の山門の下に立つ。

すく／＼と伸びた大樹。

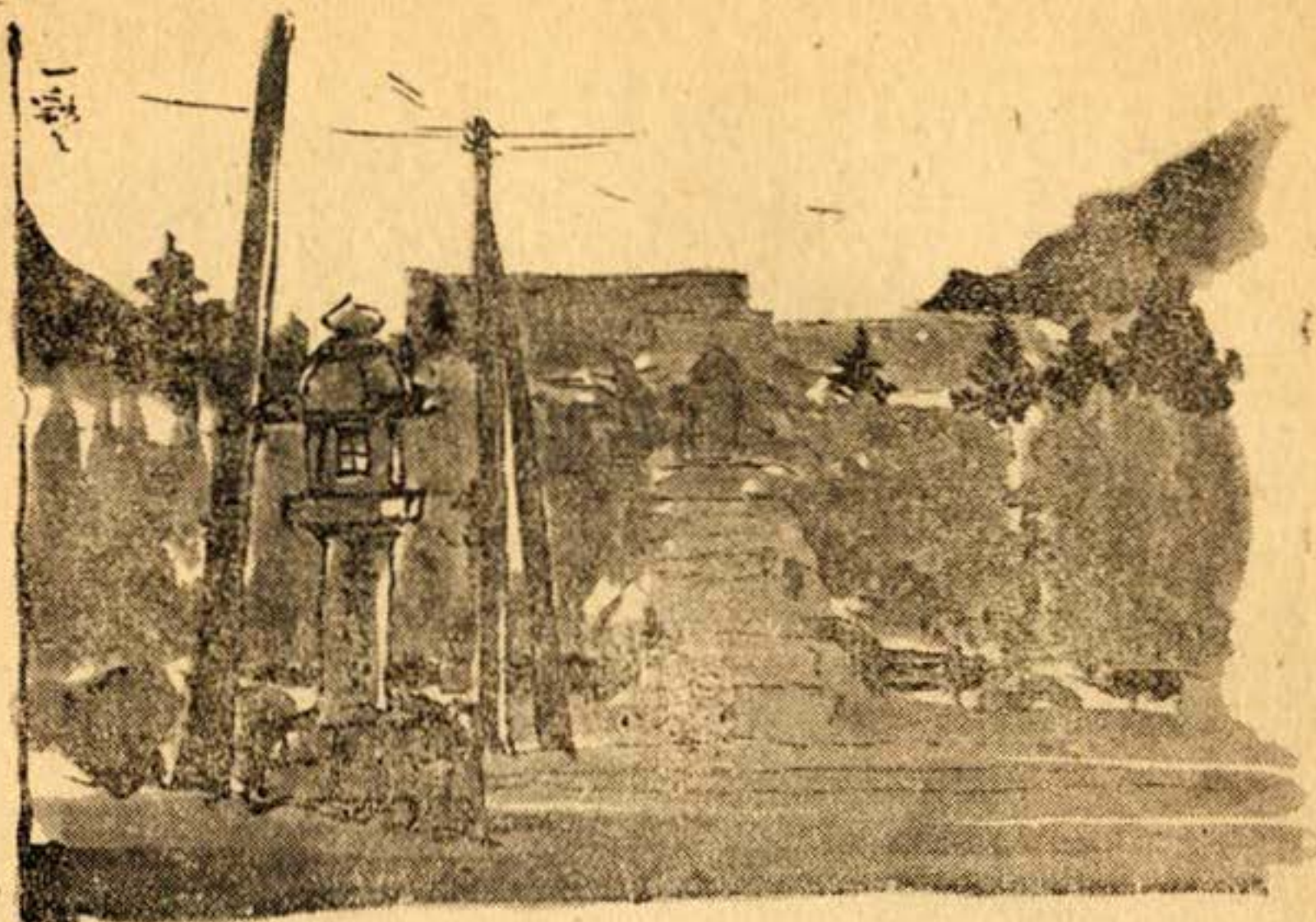
夜明けの境内は落葉の音もなし。

これより、名畫の模繪を拜見。

それなのに、いさゝか酒氣をおびて
るのです。

圓山應舉先生、御かんべんあれ。
山門はまだ石たゞみの上に遠し。

(繪並に文)



女ごころの三變化

— 靜寛院宮御事蹟 —

眞野正順

(一)

あの沸きたつやうな明治維新の動亂には日本全國はさながら暴風雨の中の野草のやうに操みだされたのでありました。その荒涼じて矢叫びの眞只中に、まだうら若い女性の御身を以て凜乎として立たせ給ひ、國民互に血で血を洗ふこの烈しい東西兩勢力の格闘の内に、その優しい玉葉の御身を投げ入れ傷ましき犠牲となり給ふことに依つて、その血闘の惨らしい最後の刹那を防ぎ止め給ふた（明治大帝の御叔母。十四代將軍家茂の室。）靜寛院宮の崇高なる、御事蹟は萬代仰ぎたてまつるべき日本女性の龜鑑であります。

私の今回の問題は、か弱き女性の御身をもち給へる靜寛院宮が、どうしてこのやうな崇高な御力を御身の上に築き上げさせられ給ふたか。その深い内面の

意味を拜察し上つりたいのであります。

もとより、宮は、至尊玉葉の御身に渡らせられ、天の成せる御稟資、計るもまた恐れ多き極みではありますが、ひるがへつて、靜かに御生涯の跡を偲び奉れば、やはり、女性の御身として、苦難の御生涯の中に、正しく「女性の道」を踏み進みゆき給ふた故にこそ、このやうな崇高な御事蹟が、そこに、おのずから現はれて來てゐる事が拜察されるのであります。それ故にこそ、宮はたゞに、手の届かぬ雲上高く輝ける月ではなく、また一般女性の以て模範とし、仰ぎ瞻ふべき萬世の龜鑑であらせられる。

それならば、如何なる道によつて、宮は、かやうに萬世輝く婦德と輝かし出されるに至つたのでありましやうか。やはり、女性は女性として、女性の最も大切なものを強く御身の上に發揮して行くことに依て、このやうに成られたのが拜察されるのであります。

それならば、女性の最も大切なものとは何であるか。それは申す迄もなく「愛」であります。「愛」こそ女性の比すべきものなき寶。女性の女性たる本質であります。宮の全生涯を貫いて走るものは實にその御胸にたぎるところの純朗きわみなき「愛」であつたのであります。

この「愛」こそ、宮を導いて、九重の禁中より出しまいらせて風寒き遠き東の江戸千代田城に入らしめ、また一轉しては、硝煙轟く江戸城總攻撃の只中に、寧ろとして、その最後の暴力を拒けこゝに皇室の大義と國民の融合とを打立たせたまふ人柱となり給ひ、やがて御心勞の御いたつき治へず三十二年の短き御生涯を畢らせ給ふたのであります。

ここに靜かに諸姉と共にその御跡を回顧し上りたいと思ふのであります。

(一)

宮が十五歳の御頃。すでに世は幕末の妖氣を含み、四海騷然たる時でありました。御兄孝明天皇は、晝夜御苦慮の末、宮を遠く江戸城の主十四代將軍家茂に御降嫁あらせたい御内意に傾かされました。ですが、宮は「お嫌や」でありました。

なぜならば、朝威衰微の季と云へ、徳川三百年、未だかつて皇族が遠く東の臣下に御降嫁になつた例はない。のみならず、既に宮は振分髪頃のはいより有栖川宮と御許婚の御間柄でありまして胸深く結ばれた幼き夢をいま直ちに打碎くことは、うら若い女性の胸に堪え難く切ないことであるからであります。然もそれのみではない。世はすでに幕末變革の微に満ち、國のあちこちには

「打倒徳川」の聲は切りに擧げられ、いづれかは、國を擧げての大騒亂にうつるべき、云はゞ、急雨いたらんとして、風すでに樓に滿つる状態にあつたのです。そのたゞ中に、外ならぬその關東に、まだうら若い十五歳の女性の身を以てひとり東下する心淋しさは、宮ならねども、誰れか戦のかずにいられるものがあるでありましやうか。

宮は、どこまでも「お嫌や」でありました。

然し、御兄孝明天皇としては、か弱き御遺腹の御妹宮を強いて關東に送り給はねばならぬ人知れぬ御苦衷があつたのです。それは、この時、安永ベルリの黒船をはじめとして、其後貪婪飽くなき列強の黒手は、駭々として境海を犯し、この時にして、國民力を一にして外夷を撃たずんば、この神國危き、きわめて危急な時期に際會してゐたからです。國の力を一にするには、どうしても朝幕全く一體となつて外に當らねばならぬ。然しながら、三百年冷たく東西相離れた歴史は今急にこれを一に結ぶことは困難です。この爲には、どうしても、久しい舊慣を打破して、皇族を將軍の許に嫁せしめて、東西全く一體とならねばならぬ。

然し、これに適する御女性に皇族の中に宮をおいて他にない。然しながら、宮は天皇の異母妹に渡らせられる。こゝに狭さまれる御義理は、いく度か天皇の宸襟を惱ませられた。「お嫌や」の

御言葉と共に、再びこれを強ひ給ふことは天皇のなし能はぬところでありました。悽惻、遂に一度は、皇女壽萬宮を以て、これに代へんかと思召されたのでありますが、あはれ皇女幼くして、わずかに御二歳に渡らせられるのみでありました。

(三)

この御兄上の御苦惱を目にしつゝ、素より御孝愛深い宮の御胸は、寸斷されるやうでありました。恐らく、夜る寢ず悽惻の日數を重ねられた事でありましやう。遂に宮は、その御愛ほしい兄上の御爲に、その御一身を獻げ、全く犠牲とならせ給ふ御決心を定められました。

「愛」は愛する者のために、惜しみなく己れを與へてゆくことをその極致とします。宮の御胸に沸きたつ「愛」の心は、遂に宮を導いて雄々しくも、其身を擲つ御決心にまで飛躍せしめたのでありました。その懐かしき御兄上の御心勞のため、更には、愛する邦國の前途の暗雲を解かんがために、この身を死なせて、ひとり東路へと下りゆく。

されば、女一代、晴れて華やかなるべき御婚儀の旅も、宮のためには、風冷たき憂愁の旅でなければなりませんでした。その折のお歌に、

この度は得こそかへらね 行く水の

清きこゝろは汲みて 知りてよ

惜まじな 君と民との爲ならば

身は武蔵野の露と消えても

(四)

このやりに、御兄上の愛のために、その身を死なせて、關東へと御降嫁になつた宮は——然し——其後江戸城に於ける新生活を如何に御迎へになつたであらうか。常凡の女性ならば、恐らく、政策結婚の犠牲として、むしろ心閉ぢた冷たい「生ける屍」として新夫・茂に對したかも知れません。そうあつても、決して無理ではなかつたのです。

然し、宮は全く然うではなかつた。驚くべき事には、御興、江戸城に入ると共に、宮は實に情愛深き貞淑な妻として將軍に對し心優しい妹として、姑、天璋院に向ひはじめられたのでありました。「愛」は愛のために身を捧げる。然し、たゞ一度愛のために身を捧げても、それで其人の愛が涸れてしまつたなら、それは眞の愛ではない。「愛」は絶えず己に向つてくるものを温かく包まねばならぬ。温かく包むことに依つて一切を生かしてゆくものでなければならぬ。兄上と邦國の爲に身を捧げ給ふた宮も、もし其後、

冷たい屍のやうな妻となつてゐられたら、それはたとひ「愛」から出發しやうとも「愛」でなくて「義理」に過ぎない。頑な「義理」は己を苦しめるのみならず、また他人をも惱ませる。もし御結婚後の宮が、いつまでも冷たい妻であつたならば、それは、徒らに新夫を苦しめる事によつて、結局、はじめの眼目たる朝暮融合の大事を遂げられず、切角の御兄上の御志に背くのみならず、強いて是を望み給ふた御兄上をして、悔と憂とに惱ましめるのみであります。

一たび同胞として兄上の爲に死なせ給ふた宮は、こゝに一轉して、妻としての愛の道に雄々しくも進み出でられた。

「海舟餘波」に、こんな挿話を傳へております。

「……宮が入らした初は、皆な閉息して窺つてゐた。すると或時濱御殿へ天璋院と將軍と和宮が居らしたが、踏石の上に何う云ふものか、天璋院と和宮の草履を上げて、將軍のだけ下に置であつた。天璋院は先に降りられたが、和宮は之を見て、ボンと飛んで下りて、自分のを除けて將軍のを上げて御辭儀なすつたそれで、皆なヒタと靜まつた。……」

過去の尊い皇女としての一切をかなぐり捨てて、ひたすら貞淑なる徳川氏の妻として、その完全に努められたのでありました。

然し、かやうな御心勞も、傷ましくも再び碎かれる季が來ました。その後、東西の軋轢日に激しく、倒幕の聲愈々烈しく、宮の切なる御心づくしも、次第に空しくなり行くのみならず、慶應二年七月二十日、將軍家茂は再度征長の途上、大阪に於て、突如として不歸の客となりました。駕鸞の夢短くも僅かに五年。宮の御歳いまだ二十一歳でありました。

その日、宮は緑なす黒髪を自ら薙ちたまひ、日頃信仰せらるゝ「南無阿彌陀佛」の名號を認めて之に添え、遠く大阪に送つて柩の中に納めしめられました。

七月、良人家茂を喪ふと共に、その十二月に到つて、御兄、孝明天皇は俄然として崩御せられました。宮は一時にその杖と柱とを喪はれた。それのみではない。この後、澎湃たる維新の巨潮すでに止めんとして止め難く、倒幕の議すでに決して、越えて一年ならざるに、さしも三百年の歴史を誇る幕府は瓦解し、錦旗風を孕んで肅々、官軍は潮の如く江戸城めがけて攻め下つて來ました。

宮としては、天地まつたく崩れ落ち、四邊暗湛たる暗に立つ御境遇であります。然も——運命の惡戯——宮は、こゝに異常なる立場の上に立たせられる事となつた。

すなはち、宮の居たまふ江戸城を亡ぼさんと迫りきたる暴力は

外ならず、宮の慕しき御生家の武士であり、また、朝威をさへぎる憎むべき朝敵とは、外ならず、宮がその墳墓の家と心定められた徳川である。退いて婚家を守らんか、それは即ち、御兄に弓ひくものである。走つて朝廷につかんか、それは即ち不貞の妻である。進むも不可、退くも不可。宮の進退は、こゝに全く窮り給ふたのであります。

この言語に絶したる苦難の只中に、燦然たる宮の最後——第三の飛躍が現はれて來る。

沸きたつ興奮と動搖の千代田城中、宮は先づ、内に徳川家に對しては、嚴乎としてこのたび事件の責任者慶喜の不行届を責め給ひ、きびしく謹慎を命ずると共に、他面朝廷に對しては、優しき中に烈々奪ふべからざる重大なる御決意を込めて嘆願の書を上られた。

「重大なる御決意」とは何であるか。その御文を拜しやう。

「……此度の一件は更も角も慶喜是迄重々不行届の事故、慶喜一身は如何様にも仰付けられ、何卒家名立行様幾重にも願上候。後世に當家朝敵の汚名を残し候事、私方に取りては實に残念に存申候。何卒私への御憐愍と思召され、汚名を雪家名相立様、私身にかへ願上候。是非官軍差向られ御取つぶし相成候はゞ、私事も當家滅亡を見つゝ永らへ居候も残念に

候まゝ、急度覺悟致候所存に候。私一身は惜しみ申さず候へども、朝敵と共に身命を捨て候ことは、朝廷へ恐入り候事と誠に心痛致居候……」

文中の最後、死を決しての御文字は容易ならぬ重大な事を含んでゐる。

なぜであるか。宮は素より自ら好んで御降嫁になつたのではない。たゞ朝廷の御爲にこそ、御身を捧げて徳川の人となり給ふたのである。然るに、いま徳川を離すと共に宮の死を見ることがあつたならば、朝威はその「義」に於て曇るところが出来たと云はねばならぬ。これのみでない。宮は明治大帝の御叔母に渡らせられる。外ならず邦國の爲に身を捧げられた御叔母の命を失はせ参らす事は、今上の御仁徳を害ふことに外ならぬ。こゝに「急度覺悟」あそばされた宮の御一身は、風にえ堪ぬ女性なりと云へ、今や押迫る官軍にとつては、觸れんとして觸れ得ぬ巨なる鐵壁となつて、其前面に立塞がつたのであります。

この死を決しての御嘆願によつて、危急はその最後の刹那において解消せられました。やがてあの有名な勝・西郷の會見が行はれ、慶喜宥免の御沙汰と共に徳川の家名は保存せられ、皇威はこゝに宿怨の影を止めずして全國に光被し、大江戸は兵火の慘より免れて、萬民悉く皇徳を壽ぐ朝は來たのであります。

げに、宮の純朗きわみなき「愛」の心は、最後こゝに飛躍して崇高、神に近きばかり、燦然として輝いたのであります。

(六)

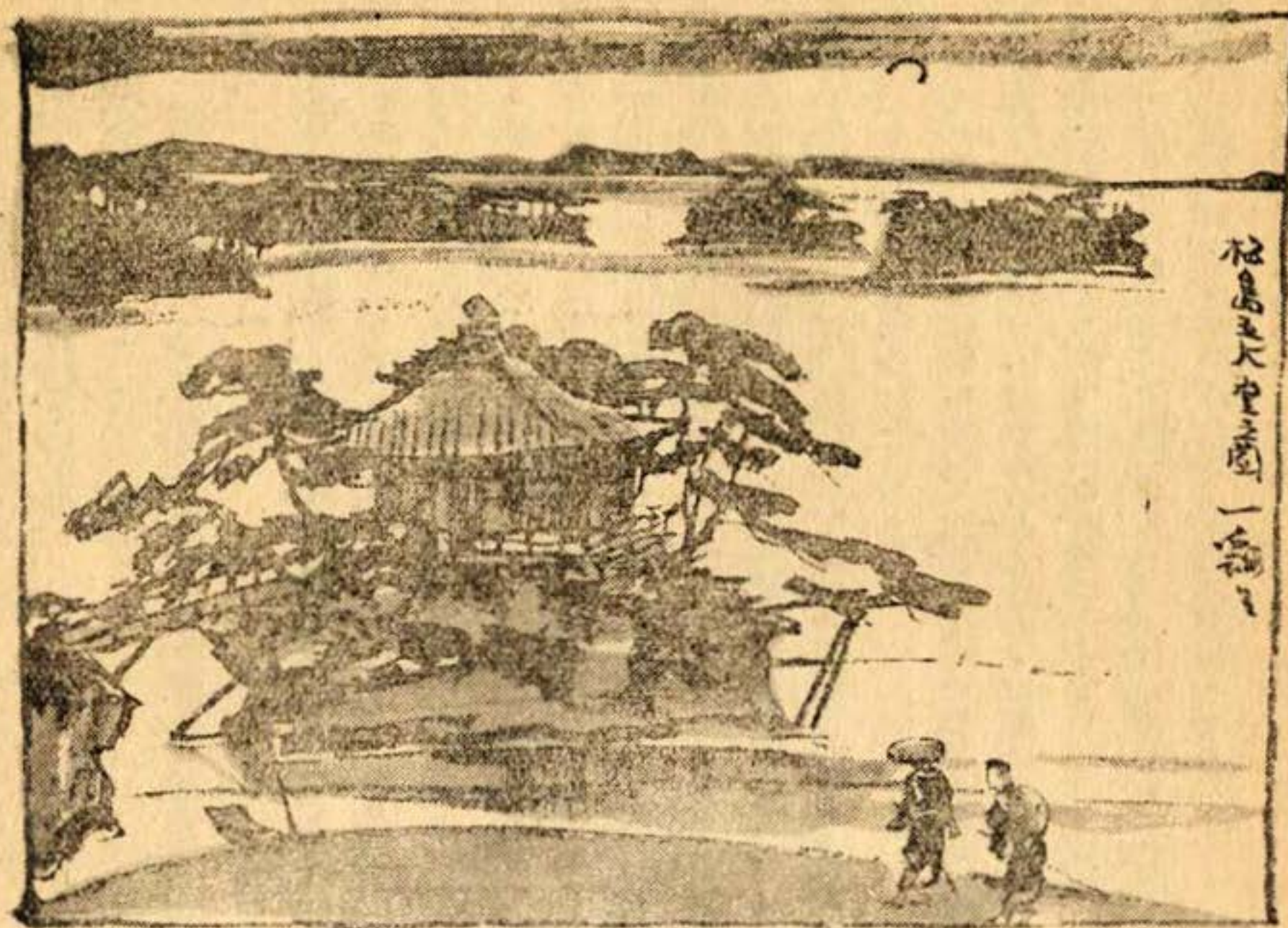
人は一度びは、己を空うして愛に生きることが出来る。然し、二度三度、絶えず流るゝ水の如く、遂に、その極致にまで昇りゆくことは困難である。それならば、何によつて、かく伸々と常に「愛」に生きてゆく事が出来るであらうか。その秘密は、また、宮の御傳記が語つております。

「宮は御幼少の頃から、常に御信仰に篤く、早くより、薙髮して御父上の菩提を弔はんと思召された位であります。千代田城に入つても、たえず菩提所増上寺の僧を迎へて、淨土の教を聴き念佛の行を修し給ふて倦むことがありませんでした」

まことの愛は、己を中心としてゐる者には現はれて來ない。己を中心としてゐる限り、その人の愛は必ず狭くかつ一時的である。博くかつ常に伸びてやまぬ眞の愛は、たゞ、己を空うして「崇きもの」に生くることに努める者にのみ現はれて來る。

己れを空うして「崇きもの」に生くる道とはすなわち「信仰」である。まことの愛は、たゞ信念あるところに現はれて來る。

宮の偉大なる愛の蔭に、尊き信仰の嚴として存してゐたことは誠に偶然ではなかつたのであります。



松島主人堂園一景

旅路の芭蕉

宇野浩二

小島一谿 畫

享貞元年の、東海道を経て、伊勢、伊賀、吉野、美濃、尾張を経て、再び伊賀に寄つた旅、その翌年の、これも東海道を経て、京都、奈良、大津、熱田を経て、木曾を廻つて江戸へ歸つた旅。これが等芭蕉に旅をする癖のついた始まりであつた。

「月日といふものは例へば長い長い旅路のやうなものであつて、年々歳々送り迎へる年といふものも例へば旅人のごときものである。舟人が舟の上で一生を送るのも、馬子が馬の轡を取つて老いてゆくのも、これも例へば毎日旅をつづけ、旅を己が住處としてゐるやうなものである。自分が敬慕する古人も旅中で死んだものが多い。」

芭蕉が、このやうに考へたのは、元禄二年の春であつた。

——彼は、吉野の花も見、奈良には何度か行き、琵琶湖の邊をも歩いた。京都、名古屋はいふ迄もなく、信州更科の月も見、鹿島湖來の月も見。和歌の浦から、須磨明石、鳴海に廻つて、深川の芭蕉庵に歸つて來たのは、去年の秋貞享五年改元して元禄元年の九月であつた、そこで、蜘蛛の巣を拂つたり、猫の額のやうな庭を掃除したりして、久振りで草庵に落着いて、絶えず訪ねて來る門人たちを相手に暮してゐるうちに、その年が暮れて、元禄二年と春となつた。——そろそろ暖くなつて來た。空に霞のかかつてゐるのを見ると、芭蕉はまだ行つたことのない奥州に行つてみたくて堪らなくなつた。

そこで、股引の破れをつづくつたり、笠の紐をつけかへたり、足が達者になるやうに三里の灸をすゑたりした。さういふ風にして、仕度がすっかり整ふと、早く出かけないと、肝腎の松島に着く時分に雨降り月になるかも知れない、といふやうな事まで氣にかかつた。そこで、自分の住居の草庵を人にゆづつて、門人の杉風の別宅に引越した。さうして、彼は、元禄二年三月二十七日、いよいよ江戸を立つことになつた。彼は今度も僧侶の風をした。これは、奥州路は東海道などよ

り關所を通るのがずつと困難であつたので、それには唯の見物の旅と見られるより信仰の旅と見られる方が、關所を通るのが樂だつたからである。そこで、今度の旅に芭蕉の供をする曾良も、剃髪して法衣を着、名も惣五郎を宗悟と改めた。この僧形の二人は夜明け頃に立つた。前の晩から門人たちは杉風の家泊りこんでゐて、彼等が深川から乗つた船に、一緒に乗りこんだ。船は夜明け頃の隅田川を溯つた。空には残月が浮かんでゐた。西の空に富士が微かに見え、上野や谷中の花も遠く眺められた。それを見ると、さすがに芭蕉のやうな人でも、「この花を再び見ることがあらうか、」と心細い氣がした。深川から千住までは一里ばかりであつたが、船は可なり流れの強い川を溯るので、千住に着いた頃は夜がほのぼのと明けはなれた。

千住から奥州街道が北へ北へとつづく。覺悟はしてゐるものの、船から上つてこの街道に立つた時、芭蕉は、彼が日頃愛誦する白樂天の『三千里外遠行人』といふ句を思ひ出して、今更ながら旅愁で胸の塞がる思ひをした。鮎など焼いて賣つてゐる小店の軒先に若草が萌えてゐる景色まで佗しかつた。

行春や鳥啼き魚の目は泪

これも、芭蕉が日頃愛誦する陶淵明の『羈鳴戀舊林池魚思故淵』を思ひ出したもので、如何に芭蕉が旅の別れの辛さ悲しさを肝に銘じたかが分る。送つて來た門人たちが、そこで別れの挨拶をする、が、彼等は、芭蕉と曾良が歩き出してからも、いつまでも立ち竝んでゐる、芭蕉等もなかなか足が進まない、見返つてはいけなと思ひながら見返ると、彼等はまだ一列に竝んでゐる、手を振る者もある、手を目に當ててゐる者もある。芭蕉と曾良は幾度か、振り向いて手を振つた。さうして彼等は別れた。

三月三十日の晩、彼等は、日光山の麓の今市で泊つた。その宿の主人が云ふのに、「わしは何一つ取得のない人間ぢやが、取得と云へば、まあ正直といふぐらゐのもので、名は五左衛門と申しますが、世間の人がみんな佛五左衛門と呼んで下さる。……どうぞ、何も持成は出来ませんが、ゆつくり、おくつろぎ下さい。」さういふ亭主の動作を見てゐると、なるほど、ただ無智で別に思慮といふものはないやうだ、これを、愚直と云ふのであらうが、これが論語の所謂『剛毅木訥近仁』と云ふのであらうか、と考へて、芭蕉は心を打たれた。

やがて、彼等は、日光の東照宮に参拜して、那須野にかかった。那須野の黒羽といふ所に知人があるので、那須野を通つた。見渡す限り果のない廣い野原で、茶店は勿論、道らしい道もない。そのうちに、雨が附り出し、日が暮れて來た。と、さいはひ、一軒の百姓家があつたので、その晩はそこで泊めてもらつたが、翌日は昨日よりもつと廣い野原を通らなければならなかつた。相變らず道のない道であつた。そのうちに、その道のない道に迷つてしまつた。と、放し飼ひにしてある馬がゐた。さいはひ、その傍に、一人の男が草を刈つてゐた。芭蕉が、その男に、黒羽まで行く道を聞くと、傍から、曾良が「この馬を貸してくれませんか」と云つた。と、男は「この馬は人を乗せる馬ではない。が、お斷りしたら、この廣い野原では、幾ら教へてあげても、不案内旅の方には、お分りにならないぢやらう。……さうだ、この馬に乗つておいでなさい。馬が止まる所で、馬を返して下さい。馬はひとりで歸つて來ますから」と云つた。

そこで、芭蕉はその馬に乗つた。馬はひとりで歩き出した。曾良は馬と並んで歩いた。曾良は、信濃國上諏訪の人で、高鳥藩の家臣であつたが、後に浪人して河合惣五郎と名

乗り、甲斐國で劍道の指南をし、後江戸に出て、吉川惟足に神道を學んだ、といふ程の人であるから、「氣魄不撓、物に驚かず、身を挺して難に當る勇」がある、と云ふので、この芭蕉の決死と云つてもよい旅に、特に選ばれて、供をしたのであつた。

芭蕉は、黒羽に暫く滞在して、また、那須野を歩きつづけた。やがて、白河の關を越えて、いよいよ奥の國に入つた。前に述べたやうに、東海道方面は、すゐぶん方々を廻り、或る所など二度も三度も行つた事があるほど、馴れてゐたが、奥の國は、東や西の國と比べると、氣候はいふ迄もなく、見る景色も、觸れる人情風俗も、食べる物も、悉く變つてゐた。一口に云ふと、荒々しく、寂しく、厳しかつた。委しく云ふと、家の造り方、人情風俗、言葉、みな、違ふのであつた。その爲めに、芭蕉のやうな旅慣れた人にも、この旅は何彼につけて心細かつた。須賀川、福島、二本松、仙臺、と、芭蕉は奥州街道を、北へ北へと進んだ。この旅で、芭蕉が困つたのは、氣候、人情、風俗、食物だけでなく、もつと困つたのは、東海道方面では餘り多過ぎて困るほど澤山の門人や弟子があつたが、奥州方面にはこの門人弟子といふ者が殆ど

ど一人もゐないことであつた。が適に、須賀川の町長の等躬とか、仙臺の畫工加右衛門などいふ人があつた。

芭蕉は、この加右衛門の家に四五日滞在した。芭蕉がその家を辭する時、加右衛門は、鹽釜から松島の道を得意の繪圖に描いて、芭蕉に贈つた。芭蕉は、非常に喜んで、この繪圖をたよりにして、鹽釜、松島を見物してから、平泉に行つた。

ところが、この繪圖が間違つてゐたので、石の卷へ行つてしまつた。が、かういふ事は彼には少しも苦にならなかつたらしい、彼の紀行文に一思ひもかけずかかる所に來れるものかな、と極めて吞氣らしく書いてゐるからである。その頃は、既に、彼等が江戸を立つてから、二月程たち、五月下旬になつてゐたので、さすがの北國も、すっかり夏景色になつてゐた。

芭蕉が、江戸を出る時から楽しみにしてゐた、平泉に着いたのは、この初夏の頃であつた。芭蕉はその時の事を次ぎのやうに書いてゐる。

「三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野に成りて、金雞山のみ形を残す。先づ、高館にのぼれば、北上川南部より流るる大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。康衡が舊跡

は、衣が關を隔てて、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偕も、義臣すぐつて、此城にこもり、功名一時の冀となる。國破れて山河あり。城春にして草青みたりと、笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもの夢の跡
卯の花に兼房みゆる白毛かな

芭蕉
曾良

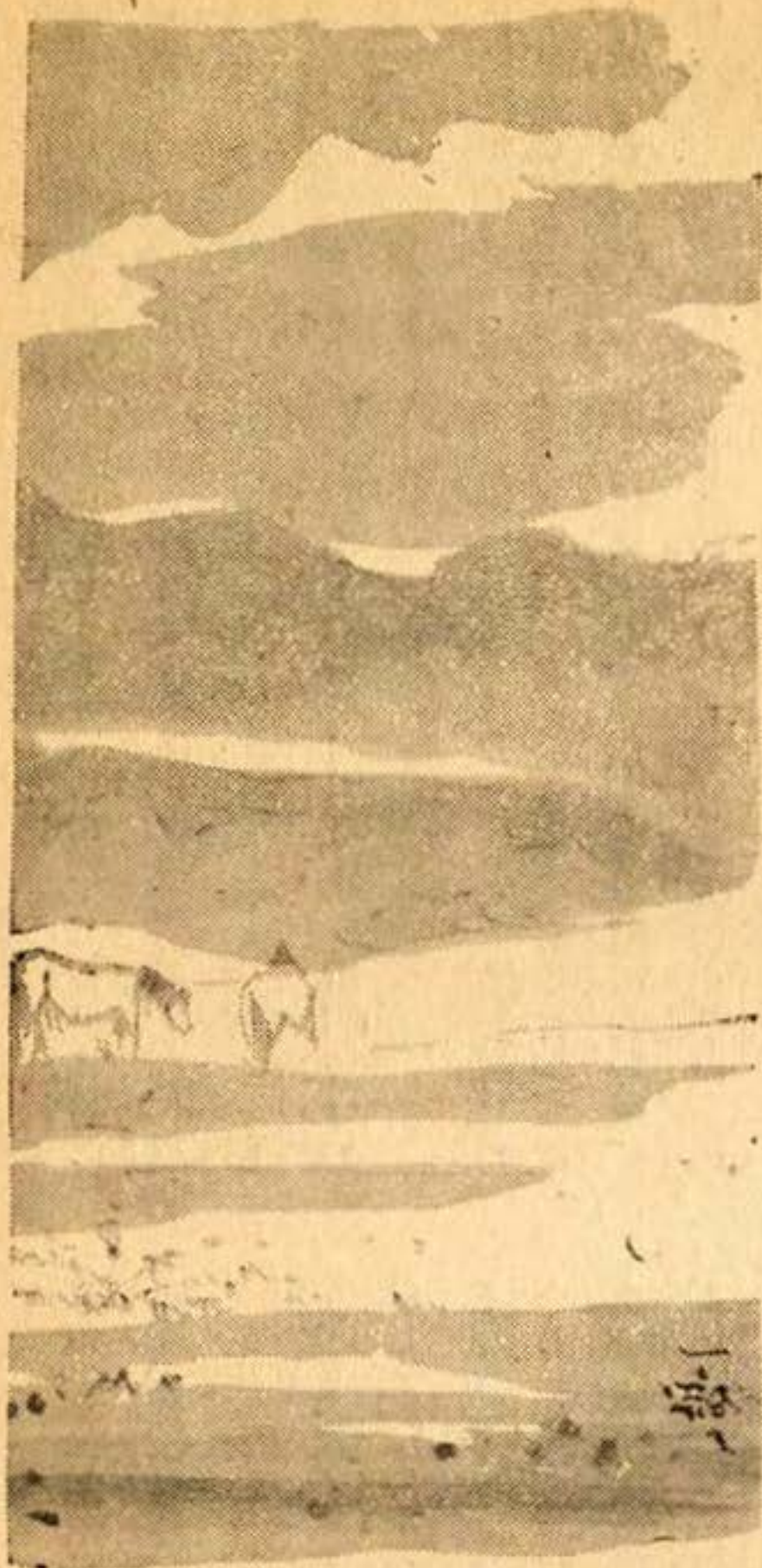
五月雨の降のこしてや光堂

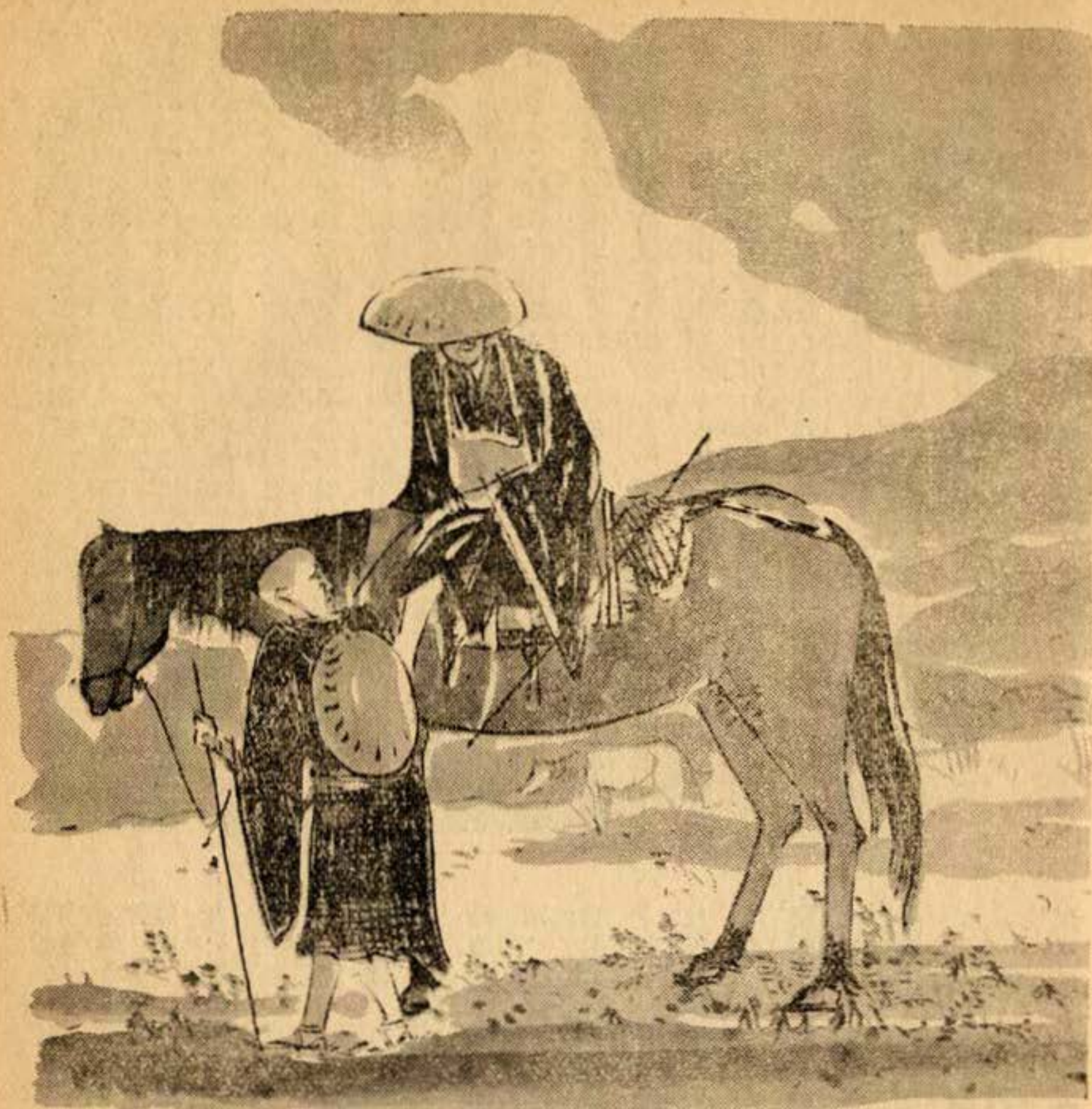
芭蕉

芭蕉は、この平泉の中尊寺を、この旅の一番北の端とし

て、そこから引返した。つまり、今までは表日本(太平洋側)を歩いたのを、今度は裏日本(日本海側)を歩かうと考へたのだつた。そこで、芭蕉は、南部へ通じる本街道を遙かに見やり、岩手山の方へ向つて、岩手の里で泊つた。さうして、芭蕉は、翌日、岩手の里を立ち、鍛冶谷澤の一部落、歌枕の小黒崎といふ名所、みつ小島などを過ぎて、鳴子温泉から尿前の關所にかかり、ここから陸羽の國境を越えようとした。ところが、その關所の役人に「近頃、僧侶の風を装うて、關所を破らうとする者があるので……」といふ理由で、しばらく調べられた。が、その嫌疑は直ぐ晴れて、關所は無事に通過

ことが出来たが、そのために時間が後れて、山の中で日が暮れてしまつたので、國境を守る番人の家に泊めてもらつた。その邊の家は、入口をはひると、一方が既になつてゐて、一方が板敷になつてゐる。芭蕉と曾良はその板敷の方に寝かされた。ところが、一晩ぐらゐなら、さういふ所でも辛抱できたが、生憎その晩から嵐になつた。がその嵐か三日もつづいた。芭蕉は、野宿の経験もあるし、旅の苦勞は大抵知つてゐ





たが、その宿では、蚤が多いばかりでなく、
虱も可なりゐたらしかつた、これには實に
困つた。第一、どうしても眠れなかつた。
おまけに、夜が深けて來ると、直ぐ枕元の
傍にある厩で馬が遠慮なく小便をするので
あつた。

蚤しらみ馬の尿する枕もと

やうやく三日目の朝、その宿を立つこと
が出来た。出しなに、主人が深切に云つて
くれた。「これから、出羽の國に出るには、
間に嶮しい山があります。道はあるにはあ
るが、滅多に人の通らない道で、それに、近
頃は追剥が出るといふ噂もありますから、
道案内を雇はれた方がよい。」芭蕉は心の中
で、かういふ國境の番人をしてゐるやうな
者にも、かういふ深切な人間がゐることを
感謝した。さう會良に云ふと、「これは、蚤
しらみと、馬の尿ぐらゐに變へられません
ね、」と會良が云つた。それには、めづらし

く、芭蕉も聲をあげて笑つた。

そこで、案内者を頼むと、見るから頼しい恰幅のいい若者を世話してくれた。道案内の若者は、鞘の反つた脇指を一本腰にさし、櫛の木で造つた頑丈な杖を持つて、芭蕉たちの先きに立つて、出立した。芭蕉は、その若者の後について歩きながら、これまでは先づ無事にやつて來たが、この山越えには何か災難が起りはしないか、といふやうな氣がした。が、先きに登つて行く屈竟な若者と、自分の後から、ときどき、後から押してくれたり、手を取つてくれたりする、これも年こそとつてゐるが道案内の若者に優るとも劣らない筋骨の逞しい曾良が、附いてくれることを考へては、不安な氣持を慰めた。なるほど、宿の主人の云つた通り、登るほど、木立は繁くなり、路は夜のやうに暗くなり、かと思ふと、膝頭まで隠れるやうな笹藪の中を分け入り、かと思ふと膝頭まで濡れるやうな溪川を渡らなければならなかつたり、或ひはごろごろした巖石の上を傳はねばならなかつたり、體中汗みどろになつたり、はツとして冷汗を流したりしなければならなかつた。が、やうやう無事に、最上庄に着くことが出來た。そこで、道案内の若者は云つた。

「この國越えの道は、大抵なにか起るものですが、今日は

無事にお送り申すことが出來て、ほツとしました。」

かういふ意味の事を、この道案内の若者から聞いた時、芭蕉の方が、一層ほツとしたが、それでも、今越した山路のことを思ひ出すと、なかなか胸騒ぎが止まらなかつた。――

芭蕉は、最上庄から新庄、新庄から尾花澤へ行つた。尾花澤では、紅花問屋の清風をたづねた。清風は、芭蕉の門下のうちでは富裕な一人であるが、さすがに風雅の道に親しんでゐるだけに、世間一般の金持のやうに卑劣なところがなかつた。彼は又しばしば江戸や京都へ旅したことがあるので、彼自身が旅の辛勞を経験してゐたので、芭蕉たちの旅の不自由を察し、彼等を、いろいろ深切に持成し、慰め、勞りして一日でも長く寛いで滞在するように進めた。新庄から尾花澤までの、既にすつかり夏の陽氣になつた、六七里の街道は、まだ四十五歳であつたが病身の芭蕉には、可なりこたへた。それだけ、彼は、清風の家、の廣い涼しい座敷に通された時は、眞に生き返つたやうな氣がした。

涼しさを我宿にしてねまるなり

かういふ居心地のよい家であつたのに、芭蕉は、この家に二三日滞在して、出立した。それには次ぎのやうな譯があつ

た。——尾花澤から七八里南へ行つたところに、山寺といふ名勝がある。芭蕉は、この名勝の話を人から聞いて、急にこの名勝が見たくなつたので、それを見るために、清風の家滞在を早く切り上げたのであつた。ところが、この山寺に行くには尾花澤から最上川を下るといふ豫定を延期して、尾花澤から反対の方へ七八里より道することになるのである。芭蕉も曾良も、それを承知で、この山寺を見物に出かけるほど熱心になつたのであつた。

この山寺といふのは、寺ではなく、一つの山の名で、今は東北耶馬溪などと云ふ名も附いてゐるが、私の知る限り耶馬溪などとは全く違ひ全く比較にならない、この方がずっと雄大である。といふのは、背景に奥羽山脈を控へ、近景に十數町にわたる山峽を持つてゐて、その山峽が四十八の瀑布を持つてゐる、といふやうな大きさを持つてゐるからである。ところで、山寺の本體といふのは、寶珠山と稱して、化學的に云ふと、全山第三紀の所謂綠色の凝灰岩から成立つてゐる山で、それが風化作用に依つて今見る如き全山奇岩怪石より成立つてゐるやうに見える山になつた譯で、而も老杉古松が全山を蔽うてゐるところ、私が耶馬溪などとは全く違ひ全く比較にならないといふ所以である。が、それが名勝になつてゐ

るのは山の形の怪異、眺望の雄大絶佳といふ事ばかりでなく、その間に古刹堂塔が點在してゐるところ、又一千年程前、天台宗第二祖慈覺大師が創建したところの、慈覺大師の最後の開基、掉尾の爲事と云はれてゐるところの、立石寺が中腹にあるところ等である。併し、これ等は私たちが今見る山寺で、芭蕉が、豫定のコースを延ばして、七八里も寄路して見たところの山寺は、全く、でなくとも、見方の點では可なり違ふと思ふから、その時の紀行文を寫して見る。——

「山形領に立石寺と云ふ山寺あり。慈覺大師の開基にして、殊に清閑の地也。一見すべきよし人のすすむるに依つて、尾花澤よりとつて返し其間七里ばかり也。日いまだ暮れず。麓の坊に宿かり置きて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑に、岩上の院々扉を閉ぢて、物の音きこえず。岸をめぐり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行くのみおぼみ。

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

これで見ると、芭蕉は、夏の日長の、日のまだ暮れないうちに、山の麓に着き、山麓の宿坊に一泊することを豫約しておいて、山を登つたらしい。

芭蕉は、立石寺から尾花澤へ戻つて、尾花澤の西南一里程の大石田で便船を待った。その間天候が定まるまで、大石田で滞在した。大石田は、最上川の主要な船着場であるが、町は餘り大きくない。ところで、昔は俳諧の可なり流行したところであるから、今も俳句を研究してゐる者が可なりゐる。以前、大石田で流行した俳諧といふのは、所謂、貞門風とか、談林風とか、いふ派で、芭蕉から見ると既に舊い俳句であつた。芭蕉が便船を待つ間大石田に滞在してゐた頃は、貞門風も、談林風も、江戸では、既に本當の勢力がなくなつて、芭蕉一派が全盛の時代であつた。併し、大石田のやうな片田舎では、殊に俳句を嗜む青年達には、新派の俳句がよいか、舊派の俳句がよいか、分らなかつた。一口に云ふと、彼等は迷つてゐた。併し、幾分片田舎とは云つても、俳句を嗜む連中には芭蕉といふ大きな名は聞えてゐた。そこで、誰いふとなしに、その芭蕉がこの町にゐる、といふ事が知れて來た。さうして、結局、芭蕉は、彼等から、意見、感想を求められた。その時、彼は、これといふ意見も感想も吐かないで、さういふ事を云ふのは嫌だつたので、書いたものを一つ残すことにした。それは次ぎのやうなものである。それを稍くはしく述べると、その町の一榮といふ人の家で俳句の會を開い

たのである。その時に、彼が書き残したもの。

さみだれをあつめてすすしもがみ川
岸にほたるを繋ぐ船杭
瓜ばたけいさよふ空に影まちて

里をむかひに桑のほそみち

以下三十二句略す

最上川のほとり一榮子宅において興行

芭蕉庵 桃青書

元祿二年仲夏末

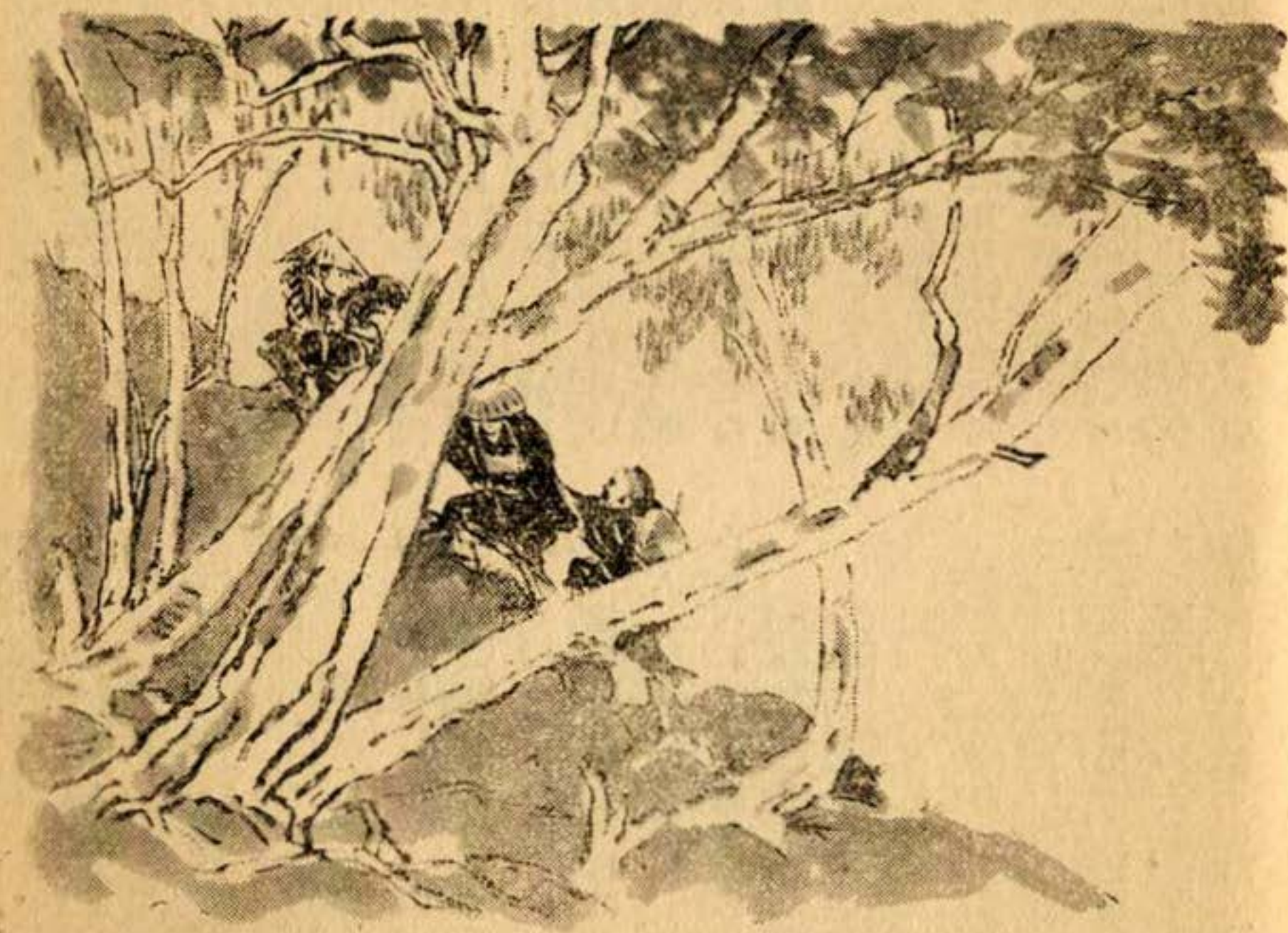
この事に就いて、芭蕉は、「新古ふた道にふみまよふといへども、みちしるべする人もしなればと、わりなき一卷を残しぬ。このたびの風流ここに至れり」と書いてゐる。これは、つまり、新派、舊派、いづれをとるべきかに迷つてゐたのは、この道の指南をする者がなかつたので、自分にたのんで來たので、止むを得ず、こんな田舎で自分の進んでゐる道をひろめようとは思はなかつた、といふ意味である。つまり、芭蕉は嬉しかつたのである。——
後に、芭蕉は右の俳句の中の「さみだれを」の俳句を次ぎのやうに改めた。——

五月雨をあつめて早し最上川

芭蕉
一榮
曾良
小水

これは芭蕉の傑作の一つである。

この時の芭蕉の旅の道順は實に氣まぐれであつた。尾花澤から七里も南の方へ寄路して山形領の山寺へ行つたかと思ふと、大石田で二三日滞在して最上川を下り、六月三日には羽黒山に登つてゐる。さうして、六月四日、羽黒山の頂上の若王寺で、一山及び諸國から修行に來てゐる風流人共集めて、俳諧興行をやつてゐる。「有難や雪をかほらす南谷」——それから、八日に、雲霧山氣の中を、氷雪を踏んで、八里の險阻を攀ち登つてゐる。さうして、全身が冷えて凍つてしまひさうな思ひを



して、やうく頂上に行き着いた頃、日は西の下界に沈み、月が東の天に上つた。その月を眺めながら、笹の葉を敷いて寢床にし、笹竹を重ねて枕にし、ごろ寝して夜の明けるのを待つた、といふやうな、壯者を凌ぐやうな冒険をやつてゐる。さうして、夜が明け、朝日が出、雪が消えたのを見はからつて、二里の路を下り、湯殿山に廻つてゐる。

涼しさやほのみか月の羽黒山
雲の峰いくつ崩れて月の
山
語られぬ湯殿にぬらす袂か
な

第一句は羽黒山の夜景である。第二句は月山の眺望であ

る。第三句は湯殿山の實情である。――

そこで、芭蕉は、羽黒にもどり、羽黒から又道をそれて鶴岡へ行き、直ぐ川舟で酒田の湊に下り、淵庵不玉といふ醫者の家で泊つた。

あつみ山や吹浦かけて夕涼み
暑き日を海に入れたり最上川

酒田で一泊した芭蕉は、「これで、大方この邊の世に聞えた川や山や海や陸の、景色のよい所は見つくした。これで、象潟さへ見ればもう思ひ残すことはない」と思つた。酒田から東北をさして、山を越え、磯を傳ひして、十里ぐらゐ歩いた。象潟に着いたのは日の傾く頃であつた。その頃から、急に風が出て来て、海の波が高くなり、今まで彼方に見えてゐた鳥海山が見る見るうちに雲に隠れてしまつた。そのうちに、象潟にも雨が附つて來たので、芭蕉は苦を葺いた小さな漁師の家に泊めてもらふことにした。幸ひ、翌朝はすつかり晴れたので、朝日の出た時分に、象潟の水に舟を浮べた。先づ能因法師が「世の中はかくても経けり象潟のあまの笹屋を我宿にして」と歌つたところの、三年人目を忍んで住んでゐたと云ふ島に舟を漕ぎ寄せた。西行法師を崇拜してゐる芭蕉は、「象潟の櫻は浪にうづもれて花の上潭ぐ蜚のつり舟」とい

ふ歌を思ひ出した。舟を着けた入江のほとりに、御陵があつたので、何帝かと聞くと、神功皇后の御陵だと云ふ。その御陵は干満珠寺と云つた。

この干満珠寺の方丈に坐つて、軒の簾を巻き上げると、象潟の全景が一と目に眺め盡された。象潟の南に鳥海山が屏風のやうに聳えてゐる。鳥海山の前山の深緑の山影が入江に寫つて波に揺れてゐる。西の方はむやむやの關のあつた一里かなたの笹谷峠で仕切られてゐる。東には荒浪を防ぐ堤がきづかれてゐる。その様子は、松島に似通つてゐながら、松島とは又違つた景觀を呈してゐる。その違ひを譬へると、松島は笑ふが如くで、象潟は、怨むが如くである、寂しさに悲しさを加へたやうな趣きである。

象潟や雨に西施が合觀の花
汐越や鶴脛ぬれて海涼し

芭蕉は、象潟から一度酒田に歸つて、酒田の伊藤不玉の家でしばらく滞在した。やがて、酒田に名残を惜しみながら、北陸道の旅に出た。酒田から、北陸道の旅はすゐぶん長かつた。酒田から加賀の金澤まで百三十里と聞くと、さすがの芭蕉も少しうんざりした。併し、歩かない譯にいかなかつた。

仕方なく、てくてく歩いた。やがて羽越の國境に當る鼠の關を通つた。その關所を越すと、いよいよ越後だ。道は南へ南へとつづく。海の彼方に佐渡が島が見える。大きな砂丘のつづいてゐる濱づたひの道は、眞夏の太陽に照りつけられて、火のやうに暑い。浪を照らす日光の反射はきらきらして目が晦むやうだ。毎日毎日、同じ、海と砂と雲と日光だ。芭蕉はその暑さにあたつた。

文月や六日も常の夜には似ず
荒海や佐渡に横たふ天の川

直江津の傍の今町といふ町を通りかかつた時、もう日が暮れかかつてゐたので、芭蕉は、幸ひ、その町の聴信寺といふ寺に、添書をもらつてゐたので、その寺を訪ねて住職に會つて、その添書を出した。ところが、住職は、長旅のために笠は破れ衣は垢だらけになつてゐる芭蕉と會良の姿を見て、乞食僧と思つたか、宿を斷つた。そこで、芭蕉は、あきらめて、本堂の佛前に禮拜してゐると、そのとき本堂にゐた伴僧が、芭蕉であることを知つて、短冊を出して來て芭蕉に俳句を書くことを所望した。芭蕉は、快くうなづいて、庭の石に腰かけて、三四枚書いてやつた。それを見た會良は、非常

に怒つて、芭蕉に「宿も貸してくれない所に、長居は無用だらうと思ひます。早く出ようぢやありませんか」と云つて、後は獨言のやうに「宿も貸さずに、先生に、短冊を書かすなんてひどい奴ぢや」と云つた。それを聞くと、芭蕉は、それに答へないで、靜かに寺の門を出て、しばらく行つたところで、歩きながら、靜かな落着いた聲で會良に云つた。

「今のやうな心掛では行脚は覺束ない。初め、旅に出ようとした時の覺悟は、何處の樹の下でも、何處の石の上でも、一夜を明かすと云ふのが行脚僧の心得だといふ事であつた。何事も因縁にまかせること、——かういふ時こそ、佛恩も尊まれ、娑婆の哀れも我が身に觸れて、俳諧の大道にも入れるといふものぢや。……それに、宿を貸さなかつた大住職の心と、俳句を所望した坊さんたちの心とは、心も人も別ぢや……」

會良は唯うなだれて芭蕉の言葉を聞きながら歩いた。

芭蕉たちは北陸道の旅をつづけた。やがて、親不知子不知の嶮を越え、越後と越中の境になる市振の關に來た。そこで彼等は泊つた。芭蕉は、音に聞く親不知子不知の難所も無事に通つた安心と疲勞とて、枕につくと直ぐ寢入つてしまつた。

と、一間おいて西の方の部屋あたりで、年若い女の聲が聞えて来た。同じやうな聲であるが、二人らしい。その二人の話聲に交つて、年寄の聲も聞える。夜が深けてゐるので、その話が、隣の部屋で話してゐるやうに、よく聞える。聞くとともになしに聞くと、女二人は越後の國の新潟の廓の遊女らしい。彼女等は、思ひ思つてゐた伊勢参りの思ひが叶つて、伊勢参りに行くところらしい。年寄は此處まで二人の女を送つて来たものらしい。さういふ三人が靜かに話し合つてゐるのであるが、今夜かぎりで明日は別れなければならぬ。それで故郷の新潟へ持つて歸つてもらふ手紙をその年寄にことづけ、手紙に書き切れない事を二人が交る交る年寄に口で云つてゐるといふ次第であつた。

彼女等が話すのを聞くとともになしに聞いてゐると、白浪の寄する汀のごとく、知らぬ客たちが通つて来る遊廓で、いつとなく淺ましい身上となつてしまひ、浪を相手にする漁師のごとく、情ない境涯になり下り、これと極つて約束する人もなく、何といふ因果な身上であらう、と互ひに託ち合ひ泣き合つてゐるのである。芭蕉は、さういふ話聲を聞くうちに、いつとなく眠り入つてしまつた。

ところが、その翌朝、昨夜の遊女が、芭蕉たちに向つて、

今までは送つて来てくれる人があつたが、今日からは行先知らない便りない旅の身、どう行つてよいか不安で不安で仕様がなない、見かけるところ、あなた方はお出家様、御一緒にとは申しませぬが、せめてあなた様方の跡から、お姿を見失はないように、附き慕つて参らせていただきたい、どうぞ、大慈悲のめぐみを垂れて、他生の縁を結んでいただきたい、と云つて涙を流すのであつた。

聞けば、誠に、お氣の毒な、不憫な、お身上であるが、我れ我れは、何處をどう行くといふ當のない旅であるから、折角ではあるが、お頼みを聞く譯にはいかぬ。……あなた方は、ただただ、人の行く通りに、行きなさるがよろしからう。あなた方のやうな人には、必ず神明の加護があるでせう、——と云ひ置いて、彼等は宿を出かけたが、出てからも、あの二人の女たちが不憫でならなかつた。そこで、芭蕉は詠んだ。

一つ家に遊女も寝たり萩と月

萩は遊女のこと——その遊女を照らす月も哀しからう。

……

(つづく)



雪の山のお正月

黒田米子

槍ヶ岳の印象

お正月といへば、何としても無く心新たまる想ひのふかいものながら、その、お正月の晴れがましさも、山の、白雪かやく山嶺に迎へた朝ほどの感激は、この世にあまりあるまいと思ふ。

雪の山に立つて旭日を浴びるのさへ、心うちふるふ晴れがましさを、折しも、ときは新年といふ、萬物に春たちかへる朝、ときめく心は、たとにたとに、張り切れるばかりに、云ひしれぬ随喜渴仰の念にいつぱいになる。

謂はずとも、雪の山には、神在ます想ひが深いのだ。そして新年の朝の光は、阿彌陀佛御來迎の圖の絢爛を、劈掃する……。

さう、ある新年を、私は、日本アルプスの盟主槍ヶ岳の雪に迎へた。まづ、夏は、縷々と人足が続いて、その槍の穂と云はれる鋭い岩峯へ登るのに、登りと降りのゴーストツブの整理が要るほど賑はふ槍ヶ岳も冬ともなりて、白雪あつく嶺々を埋め、氷結ぶ巖鋭く寒天を突くときは、幾重の山脈に圍まれた深い山奥の、三千メートルの山岳といふ、本来の面目で、厳かに立つ……と云ふは、すがたばかりかは、辿りつく途さへ、すつかり厳しくなつて、人をはどむのだ。

はるくと、東京から北陸の富山をまわり、神通川を遡つてきた汽

車に、飛驒の猪の谷といふ寒驛で訣れ、また
はる／＼と十數里、神通川の上流、高原川と
名も山里らしく呼ばれる谿せまい崖道を自動
車で走りつめてきた私達、同行二人の雪山の
巡禮は、飛驒の山家、栃尾の里に降ろされた。

こゝから、寒々と凍る道を行き、いつか雪
になつてゐるまゝに、負ふてきたスキーをつ
けて、蒲田、中尾と、最奥の部落に、例年上
高地で逢ふ山案内者の家をたづねなどしなが
ら辿る三里餘りに行き暮れて、中尾から上の
木深い山道は、すつかり夜になつてしまつた。
人も通らぬ道の新雪は、ところ／＼ぼこり
と陥し穴をもうけて、スキーの脚をうばひ、
何に揺れてか木々の雪を音もなく降らせて、
ハツと首すちに冷い驚ろきを與へる。

サツサツ、サツサツ、一行のスキーの雪を
擦る音が、闇の山の静けさにひびいて、空氣
をふるはせて傳はつてゆく感じが、私の神経
を針の尖よりも、もつと鋭く、細く細く磨き
澄ますのだ。

バサリ、寢鳥が灯に驚いて立つらしい音さ

へ、ハツと一瞬息がつまる……怖いといふの
ではなくて、何となく緊張をいつばいに持た
ねばならぬ心地するのが雪の山、まして夜の
神秘は私の心を湖の水の面よりももつとふ
るへ易いものにする。

かくて水の少い河原に出て、丸木三四本結
ぶ橋を、辛うじて越え、穂高温泉といふ一軒
家に辿り着いた私達は、その第一日のスキー
を脱いだ。

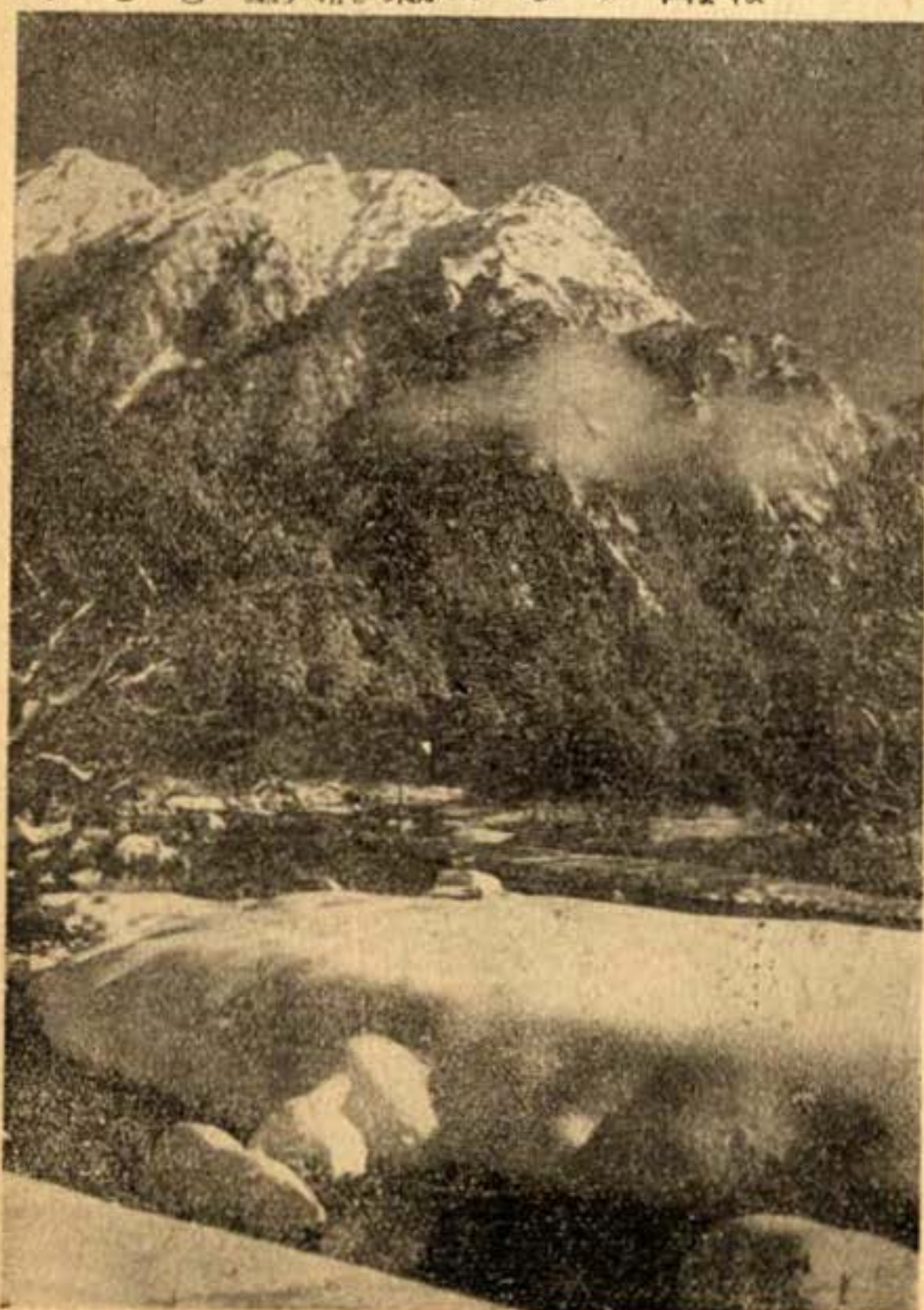
第二日は

すつかり山
支度、ルツ
クサツクの
荷も心して
詰め、山案
内者の足指
らへも嚴重
に、人棲む
處を後にし
て、サツサ

ツ、サツサツ、スキーの歩みを運んでゆく。
降り積んだ處女雪の深さは、林間ながら膝
をも没すのを、踏みしめて進む難行は、雪山
に汗の湯氣たてるほど激しい運動。

蒲田川添ひの林の道を、兎の足跡、立つ鳥
などに興じつゝ、たゞひたすらにスキーの歩
みを續けてゆく。

もう此處らは、山も架まつて、右手は峻嶒



穂高岳の飛騨側の山ふところ、左手は笠、鋤杖、拔戸と、槍ヶ岳の西鎌尾根に走る山の腰、時折、深間の林が打ち開いて仰がれるそれぞれの山嶺の日にかゞやく、神々しさのかぎり美しさのかぎりも、さることながら、穂高の山から落ちて来る澤を横ぎる度に、雪崩を案じ、やゝ曇つてきた空あひに吹雪をあやぶみなか／＼に心誠しめつゝ行かねばならぬ。

登山はみだりな冒険や、自然への闘ひとのみは思はぬ私だが、慎重に細心に、人事のか

ぎりを盡して、大自然の變化に應じてゆかねばならぬ氣くばりは、又、人一倍敏感に、女心の、かほそさで感じる……。

三里餘りといつても雪の山路のこと、早朝から吹雪きはじめた。三時頃までひたすら進つて、槍平の小舎といふ、樅や梅、樺の大樹に圍まれた槍ヶ岳の山ふところに靜もる小舎に着いたのだつた。

小舎はまづ、丈餘の雪を掘り起して、窓の扉を外してから、もぐりこまねばならぬのだ。

純正頭腦藥

最も進歩した

頭痛に



頭痛に一番
調順に無害

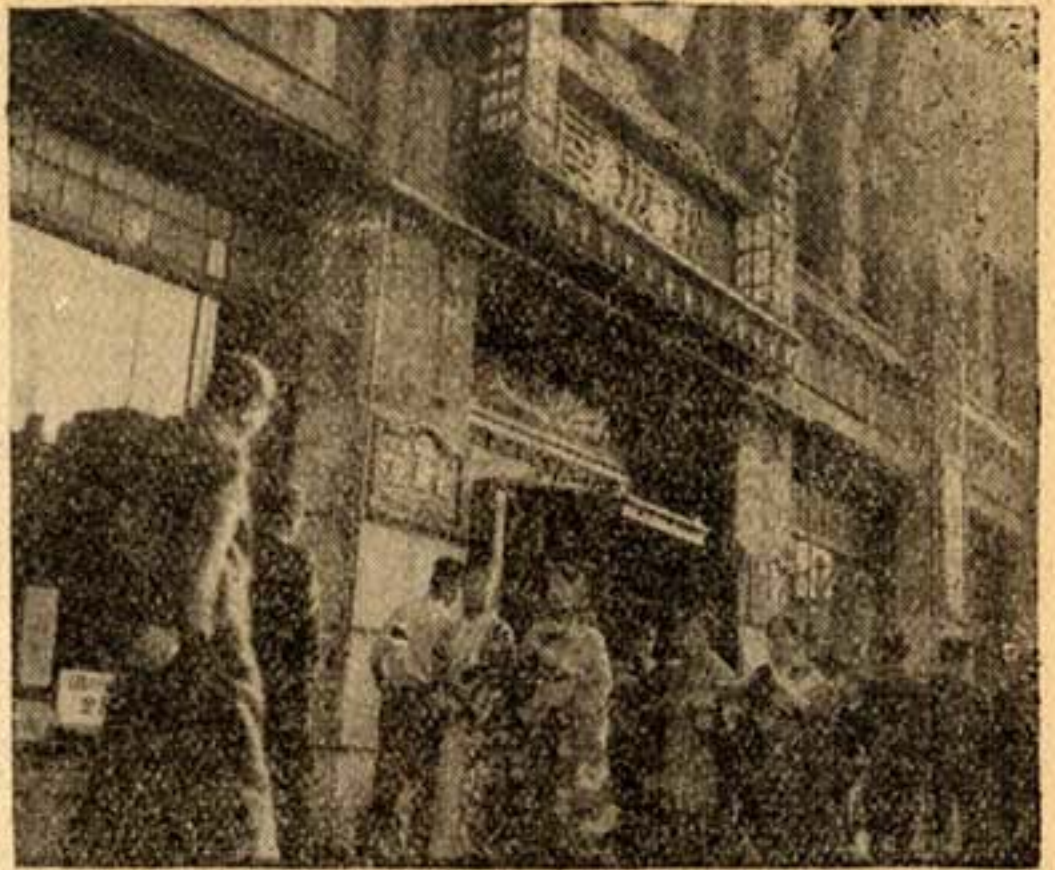
頭痛で頭がワレル程カンカンしたり、周囲の邊りが針で刺される様にチクリチクリと痛んだり、又頭痛と進行がなくとも、何となく頭が重くてボンヤリしたり、クシヤクシヤしたりイライラしたり、或は過度の讀書、執務、裁縫、徹夜映画、観劇後等で心身の疲勞を感じた時、スグに「ノーシン」を服用せられよう。今ノーシンをのんだ事さへも、思ひ出さない程キレイに痛みは消え失せて、それこそ瞬間から抜け出て来た様に頭はハツキリと明快になり、思ふ存分、愉快に、事務勉強、讀書、家事、裁縫等を續けることが出来る。論より證據スグ試みられよう。原價は三十圓、五十圓、一圓。全國の藥店やデパート、商品部にて販賣す。

町京區市屋古名 社會名合郎太長川荒 元造製

この最高き山ふところに、仙境の雪に埋む、さゝやかな小舎は、その外見の心細さに比して、一たん中に宿借りた人の心を、すつかり安らかに、あたゝかく抱いてくれる。板戸一枚、しみ／＼とこの小舎といふ屋根の下にある恵みが忝じけない。

早朝に、小舎を出てまた一里餘り、なほ深い新雪に苦勞しながら、やう／＼に第三日目に達したのが、槍ヶ岳の頂きである。はる／＼と來て、この雪白き山上の別天地に立つたに新たまる心地する、その折しも新年の朝日が輝く……といふ、世にも晴れがましい限りの、神々しい限りの日光界に、私は涙ぐんで立ち盡すのだつた。

神代のこともおもはるゝ……位ではなくて神代の人になつた心地で、私は重疊と起伏する山脈の雪白い通りを、見透かした。そして、いつして自由無碍の、天上人になつたやうな想ひになつて、この大宇宙を、わが裡に感じるのである……雪の山のうれしい一つの想ひ出だ……。



屋坂松トーパデ大的代近

「白蓮社」の集ひ

名古屋松坂屋の「白蓮社」の集ひを親しく見聞したい念願に驅られて、記者が名古屋驛に汽車を捨てたのは、秋雨のしよほ降る十月下旬の或日の夕暮れであつた。早速構内のタクシーを拾つて、けふの道場に當てられてゐる松坂屋別邸楊柳荘を郊外の閑寂な地に訪れた頃はもうすっかり夜の帳があたりを包んで

念佛信仰に
立つ店

ゐた。玄關で刺を通ずると、茶室風の應接室に請し入れられ、「暫くお待ちを。」と云ふ。もてなしのうす茶を前に、記者が今更のやうな無風流の自己をかこつてゐると、奥の佛間と覺しき方から、静かな波のやうな念佛の聲が後からあとからひろがり押寄せ寄せて来るのに氣づいた。「やつてゐるな。」と思ふ。しかし翻つて、あの念佛の聲が現在まで百年近くの傳統を、しかも在家間にあつて、たゞの一回の怠りもなく守り通されて來たものだと思へると、その嚴然とした信仰の事實におのづから頭が下るのだつた。

その夜の座談會の和かな安心しきつた空氣はまたこの上もないものであつた。初對面の記者を迎へて、主人を併せて僅かに十人足ら

ずの念佛者の集ひであつたが、誰一人心をひろげて語りかけない者はなかつた。眞の信仰人の間にのみ交換されうる何らの飾り氣ない素直な言葉が、意見が、部屋中にうごき流れてゐた。商談、旅行の話、ゴルフの話、およそ一般のかうした座談會に咲く教義方面の話とは似もつかぬ日常の雑談がされるのである。人がほんたうに入信のゆるぎない生を歩んでゐるとき、彼にとつてこの日常の平凡な事柄こそが心の道場となるのではなからうか。さうした事實を眼のまへにはつきり認め得たと思つた瞬間、記者はさつきの「いゝなあ。」を再び繰返したのであつた。……

現在行はれてゐる「白蓮社」の集ひは、三代前の松坂屋伊藤次郎左衛門、法名祐良居士の發願にかゝるものである。——居士は淨土宗の篤信者であつて、その生涯の間に「白蓮社」發願のほか、「勅修御傳」の製作「大般若經」の寫經等の奇特な發願を成就してゐる。「勅修御傳」製作に當つては遍く全國に一文勸進を行つた。そのときの勸進帳は松坂屋に

現存してゐるが、主人の徳に打たれてか素晴らしい成功を修めた。製作が成つてからも續々勸進の應募がなされて來るので、その製作品の軸を水晶に改めたり、總本山智恩院の満譽大僧正に回向一會を頼みに、名古屋から京都へ行列のおのほりを行ったりしたほどであつた。また居士は家にあつて前述の寫經をつづけること十九歳の頃から二回、その遺言に、「寫經五十年、末期只申し十念」と云はれた。そして「このもとの假寝はさめてふるさとに花の錦を着てやかへらん」といふ辭世を詠まれたのであつた。

白蓮社の發願は、居士二十歳のとき、弘化二年十二月にはじまる。記者の訪れた日はその第四千五百六十八回目の集ひに當つてゐた。——これは無量壽經阿彌陀如來の四十八願に準じ、一ヶ月四回、一ヶ年四十八回の念佛會の實行を云ふのである。現在はその道場に集ふ者、松坂屋伊藤家主人を中心に名古屋市の有力者合せて八人、道場は各自宅に廻り持ち、大煮香一本絶える間中念佛を相續する。

その道場の佛前には一尺ほどの小さな塔婆が建てられてあつて、四十八願のうちの一つが順次に書かれることになつてゐる。各家先祖代々の追善、また家運隆盛の祈願が念佛によつて嚴修されるのは勿論である。そしてその集ひ毎に計帳が行はれてゐるが、その仕方をこゝに掲げてみれば次の通りである。

一、第何番の願　一、導師　誰師
一、大衆　誰々氏　一、午後五時參集、薄茶呈上　一、午後七時開白、九時退散
連綿九十一年の念佛門の法燈が、何によつて強ひられることもなくて、純眞な信仰人のたゞひたすらな精進によつて、かうして中京名古屋の在家間に守られて來てゐるのである

以前は松坂屋に於て店員採用項目の中に、店員はすべて淨土宗信徒であらねばならぬ一條があつた。現在でも毎年二月二十五日（月おくれ）の御忌日、及び四月十四日（同）の善導忌日には店主を始め全員擧つて門中十二箇寺の參詣を實行し、御忌の法事讀、善導忌の三部經嚴修をつづけてゐる。伊藤家先代の法事のある日には、主だつた店員達は本家に集まり、理事長の數取り、主任連の珠取りで百萬遍をとり行ふなど、つねに店内の信仰培養に努力してゐる。松坂屋一年の豫算編成にまつ先きに掲げられるものは佛事費である。その費用の主なものゝを以て毎年一寺づつ門中十二箇寺の修復に充當せしめてゐる。

信仰の光につつまれてゐる店！ 名古屋をはじめ、東京、大阪、静岡と我國中樞の地に進出して隆盛を誇るデパート松坂屋。その現在の松坂屋を今日の繁榮に導いて力のあつた主人は、先年隱居された現店主の父伊藤治郎左衛門翁であつた。翁は青年時代に商店界研究のため渡米されたが、彼地を見學して深く期するところがあり、歸朝後その決斷の聲明となつたのが松坂屋のデパート組織であつた。翁が周圍の雲霞のやうな反對を押し切つて遂に成就させた今日見る松坂屋！ 翁にその決斷の心を與へたもの、それこそ翁を幼時から育くんで來た念佛信仰の力であつた。



人間をつくる教育

東京女子高等
師範學校長

下 村 壽 一

輝かしき皇紀二五九六年を迎ふるに當りまして、ぜひ皆様にお聴き願ひたいことがあります。

今日、我が國は國際的に見ましても、未曾有の大難關に遭遇してゐるのでありますが、一方、國內的に考へましても、その精神的方面につきましては、特に盡大なる注意を拂はねばならぬ大切な時局に當面してゐるのであります。

就中、明治維新以來、僅か七十年たらずの間に於ける物質文明の異常なる進歩發達は、一面我が國固有の精神的美德を、やゝもすれば置き去りにせんとする傾向をもつてゐましたため、近時、しきりに此の方面の問題が考究され、特に兒童の情操教育につきまして、色々と眞面目に考へられる方が多くなつて來ましたこ

とは、寔に慶ばしいことと思ふのであります。

そこで私は、茲に私自身の幼年時代からのお話を申し上げて、精神力の鍛鍊は、特にその幼少期に於て必要であることを述べて見たいのであります。

これは私がまた四五才位の時の記憶であります、元來、私の家は淨土宗に歸依してゐましたので、毎月「お念佛講」といふものを致して居りました。

その「お念佛講」の時には、床の間に法然上人の『月影の御影』といふ繪像をかけ、お餅とか、お菓子とか又果物など、いろ／＼の御供物をして、その一方に燭臺を置き、香煙くゆるうちにお念佛を唱へるのであります。

そんな時、私は子供心にも、つねにこんなことを思



つてゐたのでありました。今から考へると、自分ながら變なことを考へてゐたものだと思ふのですが、そこが子供ですから實に眞面目に考へてゐたものです。

——と云ふのは、その「お念佛講」の時、

床の間の法然上人の御影の前におく燭臺は、いつでも私達先祖のお祀りしてある佛壇にあつたもので、龜の上に鶴が乗つて、その嘴の先で燈をさゝげるやうになつてゐました。その燭臺は眞鍮で出来てゐましたから、日頃はその表面に錆がでゝ、うすぐろい色をして居ましたが、「お念佛講」とか或は先祖の「佛事」などのあります場合は、それを灰でこすつて磨いたものでしたからぴかぴかとつやが出て大變きれいになつて居



りました。その磨かれた燭臺を法然上人の御影の前におかざりしたも

のです。そこで私は、「いつも家の佛壇にあげてある燭臺を、今日は法然上人に貸してあげるのだ。ご先祖のものを法然上人にお貸しするのだ」と、かう云ふ風に思つたものです。子供のことですから、それを實に眞面目に考へてゐたものです。

その上、當時の私にとつて非常に好奇心をそゝつたものは、俗に云ふあの法然頭です。この法然頭といふ言葉が、法然上人の頭の恰好から出たものであるかどうか、それは存じませんが、とにかく、私の親父の頭の恰好は、實によく法然上人の頭の恰好に似てゐたものです。

「どうして、こんなによく似てゐるんだらう？」

私はいつもさう思つたものです。これには何かのつながりがあるのぢやないかしら？ 法然上人と私の親父、その間に何かしら或る關係があるやうに思へてならなかつたものです。

話が少しとびますが、親父はその後、昭和八年に八十四才で逝きました。そこで、美術家に頼んでその胸像を作つてもらふことにしました。顔の正面の方は寫眞によつて作れますが、横顔とか、後頭の方は寫眞で



は駄目ですから、その美術家の作製してゐる處へ行つて、私が自分で直して作らせたのであります。この時、私は自分の親父の胸像を作つてゐるのに、どうもさうとは思へない。何だか床の間に掛けてあつた上人が繪から抜け出して來て、それをモデルに法然上人のお像を作つてゐるやうな氣がしてならなかつたのです。それほど、上人の頭と親父の頭との恰好がよく似てゐました。この胸像は私の郷里にもありますが、現に私の宅にも安置してあります。

こんな具合に幼年時代の私には、頭の恰好について法然上人と私の親父、燭臺については法然上人と私の先祖とが、何かしら或るつながりをもつてゐるやうに思へてならなかつたものです。

その後、段々とものごゝろがつくやうになりましたからは、「もろこし我朝に……」といふ文句から初まつてゐる、あの法然上人の『一枚起請文』も讀むやうになりました。勿論、十二三才の私にその意味が解らう筈はありませんでしたが、私のお祖父さんも、そして親父も實母も、大の篤信者でしたゝめに、その人達の讀むのに合はせて、いつとはなしに覺へたものです。とにかく、幼年時代から小年時代にかけて、私はか

うした環境に育てられましたので、その當時の印象は今だに忘れることの出來ぬものとなつて居ります。

そして、今では自ら正しく、しかも深く佛教に歸依してゐると思つてゐます。又佛教徒たることを標榜して、或一種の誇りすらもつてゐますが、勿論私は完全なる人格者だとも思つてゐませんし、又さうした自惚れた考は毛頭もつてゐません。たゞ、大いなる力に抱かれて、私に與へられたる人間的使命を、より強く、より正しく、しかも、より明るい氣持で、十分に爲し遂げさしていたゞきたいと、そののみ日々念願して居るのであります。これは佛教的感化のうちに育てられた私の信念であり、私の信仰であります。

かうした小さい時から體驗をもつて、皆様に卒直にお願いしたいことは、我が子の將來を過らせないためには、どうしても子供の時代から宗教と云ふものに關心をもたして置いて頂きたいものだと思ふことです。勿論、私は、子供に向つて宗教を強制すると云ふことは面白くないと考へてゐますが、かと云つて、これが誘導を怠つてもいけないことだと思つてゐます。子供には子供の世界があるので、宗教について自然その芽生へをもつてゐるわけです。この芽生へ



が大切なのです。この大事な芽生へを、どこまでも子供思ひの心で、親切に培つてやらねばなりません。

今日、青年子女の思想が悪化したと申しますが、それは一面に於ては宗教をもたない結果だと云へませう。随つて今日の青年子女にとつて、最も缺けてゐるもの、しかも、最も必要であり大切なものはこの宗教的修養であります。

これに對する非難的にあがつてゐるのが、私どもの學校教育であります。國民に物質偏重の精神を授けたのは學校の道德教育が徹底しないからだと云ふのであります。勿論その責の一半は學校教育にもありませう。文部省は特にこの點に留意しまして、全國の學校に對してその宗教を育に關する通牒を發しました。

これは非常に結構なことでありますが、しかし、世人の言ふやうに其の責任の全部が學校にあるとしていろいろと學校教育だけを非難されるのは、誠に片手落の云ひ分だと思ふのであります。大切な人間の教育は學校だけで十分に出來うるものではないのです。

殊に宗教的情操教育は強制すべきものでない性質上學校としては一概にやりにくい點がありますから、この點につきましては特に家庭の皆様に御助力願ひたい

と思ふのであります。學校よりも寧ろ家庭に於ける宗教を育、この方が遙に重要なことです。

就中、家庭の中心は母にあるのでありますから、特にお母様が眞先に立つて、子女の宗教的情操の涵養に力を盡されんことを希望する次第であります。子供の宗教的訓練といふものは、お母様さへその氣になつて頂けば、わけないことと思ひます。

身體を丈夫に育て、やり、それ相當の知識を授けてやりまして、人間としてこの大切な宗教的信念を與へてやらなかつたならば、龍を畫いて晴を忘れ、佛造つて魂を入れないのと同じであります。

非常時を打開し、國家を發展させるには、その根本に正しい宗教的精神力がなければなりません。我が國體に立脚せる正しき宗教によつて培養せられたる、太陽の如き熱と力とに満ち／＼た國民の不拔なる精神力、これさへ備はれば、非常國難必すしも恐れるに足りません。どうか一般家庭の皆様がこの點に深く留意されまして、一家族は勿論、特に青年子女の宗教的訓育について十分な理解をもたれんことを希望してやまない次第であります。(完)

冬ぞら

川路柳虹

東京の初冬はいつも私にとって好きな季節である。私はつくづく日本が「雨の國」であるのを感じる。日記といふものを精細に記さないからわからないが凡そ一年の三分の二は雨であるらしい。のこり三分の一が曇天、あとが晴天とおもへば間違ひはないらしい。しかも梅雨や秋霖の頃の雨は陰鬱と濕氣によつて惱まされること夥しい。それが初冬に限つて好晴の日がつくと、空氣が乾燥してくるので氣が輕くなる。朝夕の冷氣は、これも日本の如く島國で中央に山脈地帯をもち四周に海を回らすところでは勢ひ水蒸氣の量が多くなり、それが寒冷な空氣に當るので身を切るやうな冷たさ、水をぶっかけられたやうな冷つこさを感じるのだが、それが初冬の頃になると却つて樂に感じられる。大陸では——滿洲でもさうだらうが——室内でストーヴを焚きつめても、東京で見ると窓硝子にボタ／＼と水滴が垂れるやうなことはない。たゞボーツと白く硝子が霞む程度である。これは空氣の

濕度のせいだと思ふ。

私は濕氣といふものがどうもいやである。その濕氣が失くなる初冬は見るからに氣もちがいゝ。

先づ初冬の空に八ツ手の白い花がひらくのを見る。あの八ツ手の花の純な高い氣品は他に見られない、この八ツ手といふものを日本では日蔭に植ゑるべき灌木であり、且つあの花は冬の季節になつてゐるが、伯林の植物園で、この八ツ手が竹と共に熱帶植物の部類に入れられて植つてゐるのを見て一寸不思議に思つた。吾々の國は熱帶に近いにはちがひないが八ツ手まで熱帶植物園のものとは一寸考へられない。これも氣候のせいであらう。伯林の植物園の熱帶植物の植はつてゐる日本の庭園の一部にある松を見ても梅を見ても實に貧弱で、松などもせいぜい三メートル位しか伸びてゐない。梅もかぢがんだ老婆のやうに瘦せてゐる。竹も葉が細く、八ツ手もその葉が小さい苗木ほどにしか發育してゐない。夏時は日本と同じやうな暑さの日もあるのだが全體に濕度が低く、殊に嚴寒は酷い寒さが襲ふので發育しないのであらう。もしこんな植物を見て、日本の俳句などを考へたらへんなものに違ひない。松にしろ、竹にしろ、梅にしろ、日本人の感じるやうな美感はどこにもないのだから。

かういふ氣候の差違といふものが、ものごとを考へる上にも異常な逕庭を來すのは自然であらう。寒さのひどい國では冬の自然の美といふやうなものは感じられない。むしろさういふ自然の脅威から自分を防衛しようとする。爐邊のたのしさが冬の詩となつても、寒風や積雪は歌ひ讚美する氣にはなれまい。だがその半面にこの寒氣に耐へて身體を健康にするためのウインタースポーツは盛んになる、しかしこれとて吹雪のひどい時などやはり駄目である。が何にしても冬といふものを大して恐れず楽しみ觀察することの出来る吾々は先づ幸福といへる。日本でも北國人は多少北歐人と氣質も似てゐるが、東京人が時たま降る雪を喜ぶやうな氣もちは持ち合はさないにちがひない。

好晴の日のつゞく十二月から一月の東京は日向など六〇度以上の氣溫に上ることすらある。私はよくこんな日向で裸體もしくは浴衣一まいとなつて日光浴をすることがあるが、風が吹かない限り皮膚に感じる日向の快さは又格別である。こんな日は遠く郊外の野原へ出ても愉快である。たゞだんだん霜がふかくなるにつけ容易に路が乾かず、泥濘が方々に出來るのだけはちよつと感心しない。

初冬の食べ物も中々豊かになる。吾々の食膳には野のもの

も海のものも新しい匂ひを放つ。先づ野菜である。大根がうまい。大根のナマな甘さといふものも不思議ない、味である。それから白菜の味である。東京人は菜の食べ方をわづかしか知らぬらしいが、あれは香の物などにするよりも、したしにするよりも煮て食ふのが實にうまい。しかも調味料を少くして菜そのものの味を出すやうに煮出すのである。京都の飄亭などでうまい菜の煮たのを出す。あれである。

魚にしてもいろいろのチリがうまい。ふぐのチリも寒い時熱燗でやるとよい。鱒などのうまくなるのも今だが、寒鰯のうまさにはまた格別である。先年自分は秋田の田舎で八郎潟でとれる寒鰯の刺身を食べたが實に珍味であつた。鰯をドロくさいなどいふのはかういふ清新な候魚を食べないもの、言ひ草だと思つた。ハタハタといふ魚も北海の名物で秋田人の賞味するものだがあの淡泊な味はデリケートすぎる點もある。冬ぞらが曇つて重々しい灰色になる北海もたまにゆけば充分親しまれる。毎日毎日雪にとち込められるとイヤになるだらうが、二三日の旅なら北國らしい暗さも又いゝものだ。人間は勝手な動物で身を利害關係の少い地位に置かされゝば何だつて相當たのしく、良く感じられるものである。私は初冬を愛する。

以來、寂滅のその日に至るまで、たとへ今日の貧村寺院の住持の如き財政上の不如意はなめ玉はなかつたらうとはいへ、始終一生涯を通じて位もなく、扶持恩給もなき一黒衣の僧でしかなかつた。この寡慾清貧に堪えられた上人であつたればこそ、よく一般庶民のうれひを察知し、彼らを善導化益することが出来た。さうやかながらも寺域をかまへ、衣食は信施に保たるゝわたし達にどうして懺悔慚愧のおもひなきをえやうか。たゞたゞはづべしと思ふのみである。せめてこの懺悔の泥中に咲く一唱の白蓮華こそ、わたし達のいつはりなき現實生活ではありますまいか。

法然の末徒よ、上人を鑽仰したまはん大方の大徳信者よ、野におり立つべし。田にたがやすひとを知るべし。煤烟にかほくすぶれる職工の手をとるべし。生活者とたたかつて、おのれの弱さ、地上のけはしさをほとほとに知つたときにこそ念佛の道はひらかれる。法然上人は「いひ甲斐もなき邊土」の庶民であり、「烏帽もきざる男」であつた。上人の末徒たる淨土の一門がみんな上人の御影前に平等一味の黒衣にかへつたときこそ、上人は鑽仰せられてゐる。ことばではない。その行持によつてのみ上人は鑽仰せられうる。野におり立つて、上人の頭陀行をわが身に一分なりとも味ひうるるとき、それが念佛のすがたなのである。「上人一期のあひだ、精舎一字の建立もなかりけり」との垂示を口にくりかへしつゝ、靜かに目をあげてその末流の現状をおもふとき、ほとほとに上人の偉大をしのぶことである。淨土の一門がいまの沈滞をかなぐりすてゝ、本當の佛教徒を一人づゝ佛祖に供養し回向してゆくことこそが、わたし達の本願だと氣づいてきたとき、上人はきつとほゝえんでゐられるにちがひない。はづかしいことである。

素直に悪人の心を讀む者が一人でもあるか。彼の母親一人位のものだらう。どんな悪人でも、眞に一人の同情者を持つたら、直ちに善人になる。

無駄な物を買つて来る、無駄な時間を費す。無駄がどんなに生活を朗かにしてゐるかわからぬ。そんな時は餘裕があるからだ。それが出来なくなつた時は、或る意味に於て窮して來たからだ。

行詰ると本氣になる。
行詰らなくては救はれぬのだ。

妙に學問をケナス者ほど、自分に學問が無い。

食はず嫌ひと云ふ事を云ふが、食つた事が無いから嫌ひにきめて居れるのだ。本當に食つた事が一度でもあるなら、嫌ひはなくなる。(終)

上人はほへえむ

友 松 圓 諦

世間に大きい仕事をしはてし、晩年を安樂に送つてゐる人々を見ると何となくうらやましい氣がする。ひろい庭をもつたその別荘に靜閑な讀書生活をしてゐるのを見ると、因果應報といふやうな氣がする。この人だけは今の幸福にふさはしいやうな氣がする。然しわたしは、こんなときいつも釋尊の御生涯を思ひいだす。釋尊は最後の施食を名もなき一鍛冶師の供養としてうけられてゐられる。波婆の町には世尊を歡待饗應しうる王侯貴族もゐたらうに、八十の老軀をもつても昔ながらの次第乞食の清規を忘れ玉はなかつた。晩年にいたるまで下坐托鉢、經行人間をおこたり玉はなかつた世尊の行履こそ、むしろ、わたし達佛敎徒の頭陀行ではあるまいか。たとへ、國家的大事業をなしとげた人といへども榮譽と恩給とをしりぞけて、淋しい餘生をおくりうるひとが果して何人あらうか。ましてや、さしたることもしえぬわたし達がどうしてこの生活の安逸をひとりほしいまゝにしうるであらうか。こゝに佛徒の反省と精進とがある。わたしは法然上人をこの意味できはまりなくなつかしむ。法然上人は黒谷隱棲

甘酒進上

中野 尅子

□ ウソを嘘と知りつゝ嘘を云ふ。嘘を嘘と知りつゝ嘘を聞く。ウソの裡に何々と笑つて眞實をやり取りす。嘘もココまで來ると眞實以上に働く。

□ 怒るのは、怒る奴も小チツボケだが、怒られる奴も小チツボケだ。

□ 刑務所へ行けば、何遍も刑務所へ來た奴が幅が利き、女郎屋へ行けば、何度も女郎屋へ揚つた奴が幅が利く。良い悪いはヨソから云ふ事で、ソコへ行けばソコでの道徳の標準、偉さの標準がある。

□ 小人は、人を罵つて自分を慰めてゐる。



流離盛を疎んじて謂はゞ「日蔭者」にさせて仕舞つた。維盛たるもの内心穩かならぬものがあつたに相違ない。だからこそ源平争鬭の立者にもならず常に端役しかやらなかつたのである。平家の亡びたと云ふのも決して公達が弱かつたのでなく、かうした内面的な葛藤があつて「人の和」がなかつたからだと云はれても居る。随て私達は淨瑠璃にあるやうな藍屋の彌助のやうな維盛を想像しては全く以て相済まぬ譯である。敢て故人維盛の爲に一言辨明して置く。

元暦元年の春である。

紀伊の國は那智の御山、あの有名な天地に轟く津瀬の附近。

其の昔、寛和の頃、花山法皇の御修行し給ふたと云ふ御庵室の跡。

其跡も今は早や打ちしぶく霧雨に朽ち果て、其礎の跡さへ見えない。其處ら一面には草がおひ茂り、葛蔓が這ひまといつて見る影もないが、唯だ一つ老木の櫻が當時の名残りを止めて、時を得顔に咲き盛つて居るばかりである。

其の老木の下蔭に一人の藤たけた氣高い青年僧が物思ひに沈んで居た。傍には同じ様な若い入道姿の人が三人程うづくまつて居た。

此人達は誰あらう、平家の公達權亮三位中將維盛卿の成れの果てと其従者達とであ

吾々は佛の子だから皆が市長、家長になつたつもりで町と家を淨土化せしめ様。

心にある佛を露天掘にしやう。憎むな、呪ふな、平静なれ。

なさねばならぬ事は動機を忘れて親切にせよ。

時と所を超越せよ。

どんな場合でも心は其の時のホントを示す、たとへ嘘を云つて

る時でも嘘と云ふホントの心を示すものだ。

佛の子だと認識する人に於て、心は周圍を生かす鍵となる。

天上天下唯佛獨尊。

佛に私心なし。

佛の子の自覺よりの靈示に依る吾が動作。

頼まるる信を大きく生かせ。

善惡なし、本來佛性のみ。

佛子と覺る事が萬物の靈長の因である。



那智の櫻の下蔭

小松殿の嫡流平維盛郷の御事

中村 辨康
井上正春 畫

前書き

法然上人を廻る人々の中に平維盛を入れる事は適當でないかも知れない。それは源平盛衰記に顯はれて居る丈で、各種の上人傳に其關係が書かれて居ないからである。源平盛衰記は平家物語の異本とも云はれるが、現在流布本の平家物語には法然上人との關係が記さるゝて居ない。然し維盛入水の條下を見ると、念佛の信仰に依て居た事が分るから丸で關係がなかつたとも思はれない。ことに平家物語は琵琶の流派に依て色々の異略があつたさうだから、重衡戒文の條下の法然上人との物語と、殆ど同じであると云ふ理由で省略されたのかも判らない。また山田孝雄氏は平家物語の維盛の記述を評して「是れ一に當時天下に瀾りたりし往生思想を維盛に托して云ひ、小松殿に對する同情の餘波より、維盛の恩愛斷ち難き妻子をも見ずして斷然として死地に赴きし勇猛心を叙したるもの」と云つて居るが、之等から見ても重衡に次いで關係があつたと思像せられないでもない。俗間では維盛を柔弱者の如く誤解して居る。然し其地位を考へて見ると、清盛の嫡子が重盛、重盛の嫡子が維盛だから、本來ならば總本家として平家の全權を掌握して居なければならぬのに、清水坂の傘屋の取替へ子宗盛が重盛の弟たる故を以て専横の限りをつくし、嫡

浄土華

山崎長三郎

苦は打解の警鐘である。
出しや張るな、知つた振りをするな、と云つて遠慮するな。

環境は島だ、心は其の誦だ。
便所に入つたら雑念を捨てて祈れ。

人々よ、たとへ軽い程度にせよ
人の弱點や落ち目を喜ぶ心を捨てよ。

苦るしい時以上に無事平穩な
時に祈れ、其れがホントの信である。

吾々が重要なものを郵送する
時書留を止めにする境地になり
度い。御互ひに紛失を恐れたり局
員を怪しむ心を亡くしたい。

吾々は佛の子だから年を考へ
には要れ度くない。

つた。

ありし昔、安元二年の春、後白河法皇五十の御賀の時、平家藤原家の月卿雲客が各々玉の冠を並べ、錦の袂を連ねて、其の今を時めく花の宴、法皇御賀の祝に、盃を傾けつゝ舞樂に酔ふて居たが、維盛、其頃はまだ四位の少將であつたが、選まれて青海波と云ふ曲を舞つたが、露に媚たる花の姿、風に翻へる舞の袖が恰かも地を照し天をも輝やかすやうであつたので、女院からは御衣を賜り、内裏の女房達からは「深山木の中の楊梅とこそ覺ゆれ」と賞められ、多くの殿上人からは「大臣大將をぞ待掛けさせ給はん」と期待されて、簾中簾外をさんざめかした程の人であつたのに、夢の世の果敢なくも、今は墨染の衣を露に濡らし檜の笠に雨を厭ふて面やつれに變りも變つた修行者の有様、誠に見る眼も痛はしい限りであつた。

それもさうであらう。

蹴くれ立つた荒山伏でさへ熊野三社の大峯修行は並大抵の事ではないのに、山東から峻しい岩間を登り、古家の宿、稚兒の宿、大禪師、小禪師、屏風のそば道、釋迦が嶽、負摺、行者歸などの難

路に目を重ねて熊野本宮に詣で、更に備崎から舟で海を渡り新宮での祈誓も終へて、今日漸く那智の山は飛瀧權現の社頭に到着したのである。

旅にやつれたも決して無理ではない。

其の維盛入道が今ま物思ひにふけつて居るのである。

「花山の聖主すら猶ほ憂き世を厭ひ捨て給ふ。

況して我は是れ凡下愚痴の臣、今更ら何を思ひ何を戀ふべきぞ。思へば不思議なる人の一生

よ。先づ頃、都になつかしの妻子を留め、一門

の人々と西國に志し、が、一の谷の戦に敗

れて、弟師盛を始め、通盛、經正、忠度、經

俊、國盛、知章、業盛、敦盛、盛俊など數多討

死しける中を、兎にも角にも、資盛、清經、有

盛、忠房の四人の弟達と共に屋島にのがれ、

日と共に亡び行く一門の幸薄きをなげき、明日

の命の消ゆも悲しくて、徒らにあくがる、都の

空も妻待つらん、子や慕ふらんと戀ひしく、密

かに陣を抜け出で、紀伊路を指して舟を操り、

由良の港に上りて上洛せんと思ひしところ、圖

らずも本三位中將重衡卿の虜れて、京田舎に

佛人合一。

一秒一生。

環境は自分が作る。だから自

分のだ。

善も惡も無い、佛性其のもの。

清い心。明るい家庭。

讀經研心。

逝くは生く。

物を買つた時釣り錢を調べぬ雅量と境地になり度い。

願ふ心は楽しむ心である。

見る者は見られねばならぬ。

世の中は皆反力作用のあらわれである。

兩掌の置き方と、しぐさにて

其の人其の時の心が解る。

自分の心は周囲のすべてに働

らいたり働らきかけたりしてゐる。

極りて袖に涙のかゝる時人の

心の奥ぞ知らるる。

いつでも南無阿彌陀佛の境地に

あれ。

生恥を曝し給ふ由を風聞に聞きて都の旅を思ひ止まり、泣く泣く高野に居るてふ時頼入道を尋ねて、出家ともなりて身をのがれんと思ひ、序を以て今は亡き父重盛公の書置き給へる打札のあるを想ひ浮べるまゝに、粉河の寺に立寄りしこそいとも奇しき御佛の御導きなりしか。思ひも寄らず法然上人に逢ひ奉り、始めて如來選擇本願の妙旨を承り、ひたすらに彌陀を念する身の、今は心にかゝる雲もなく、既に高野にて出家の望みさへ遂げ得たる上に、かくも亦た人々の情に助けられつゝ、多年の宿願なりし熊野三所權現の順禮を恙なく終らんとするは、實に塞翁が馬の故事も思はれて、人の世の何を苦しと見、何を樂しと見んことの覺束なさ。誠に歎かしきは人の世よ。……」

と、思ひ出づる儘、今に昔を偲び、小さき聲に念佛唱へつゝも唯だ唯だ思ひにふけるのみである。然しやがて日も暮やうとするので、今宵は社殿に參籠と、三五群れ居る柿色の山伏達の間交つて一夜を過ごすことになつた。

夜は段々更けて行つた。

維盛は旅の勞れの爲めか知らず／＼ウトウトとして居た。

不圖揺り起す人があるので驚き眼を覺ましてあたりを見た。

今ま自分達の居る處は權現の社殿ではなく何うやら見た事のあるやうな御寺の本堂である。

起して呉れた人が云つた。

「旅の修行者よ。方々は日も暮れんとするに何時迄も眠にふけり給ふぞ。今日は吉水の聖法然房の參られてかなたの客殿にて「念佛入門」の談義のありしを知り給はざりしか。聽聞の人々は既に歸られ、法然房の聖は奥の間に休息して居ますなり。方々もとく歸り給はずや」

維盛は驚いて「やゝ此寺に法然の御坊在し給ふか。やゝ重景よ。態とも都に登り吉水の禪室に詣でて、尊き御法を聽聞し今世後世を助けられ參らせばやと、日頃より思ひしに、今まゆくりなく、此處に參り合せたる事の有難さよ。されど我は道狭き身の、人にも憚りあれば如何にせん。偶々寶の山に入り乍ら寶を得もせで過ぎなんことの悲しさよ」

觀念は運を招く。

自分は環境を作つて環境に生きる。

満腹なれど眼が喰ひ度いと云ふ心。

病むとは常の心が止むから起きる。

因果觀念は人間にのみ與へられた特典でもあるが、場合に依つては淺ましい事でもある。

スキがあつたらやり込めてやらうとする人は其れだけスキがあるわけだ。

悲觀は後悔を生み、感謝は感激を生む、心は是れすべての王。

宗教報國は宗教の中の第一位にして、報國の中の第一位に屬するものである。

私の云ふ事なす事、書く事に對して、淨土の名に於いて少くも間違ひない事と信ずる、むしろ益するときへ思つて居る。

傍に居た重景はそれに答へて、

「何の憚り給ふことのあるべき。法然上人こそ

は生身の佛よと人々皆な敬ふところなり。唯

今の我君の御身、世を憚ると雖も

後の世の幸には更へ難し。

御座聞の爲に譬ひ災

に遇はせ給ふとも、

合戦の場に御命を失はんずるよりも

増ること天地の距りなり。痛み思召すことある

べからず。急ぎ善知識を頼み奉り給ふべし」

「さらば重景よ、汝行きて上人に申し入れ

られよ」

重景は「唯」と答へて立ちかけやうとした。

すると隣りに聲があつて、

「いや此方より参るべし」

とて、少し前こゝみの眼黄色に光つて墨染の

尊き姿に微笑を含んだ法然上人が、無難作にこの

御堂の下陣に出て來られた。そして靜かに御會釋

せられるのであつた。

「御方は小松殿の御嫡子維盛の朝臣ならずや。

計らざりし見参にて有難くこそ覺ゆれ。方々



都を用
で給ひ

人々よ先立つものは金の念を捨て
先立つものは佛性の念を心と
せよ。

病も自然現象の一つである。

人々よ病氣は氣からの念を捨て、

すべては氣からに替へよ。

急ぐのは良いが、あせつてはな

らぬ。

弱氣になるな、強氣になれ。

病氣は天地自然の異變の一つ

であるから一つの調和でもある。

世の中の人々はたつた一日でも

雨が降ると夕方頃には必らず「良

く降りますね」と云つて困り顔を

する。私は何時も斯う云ふ時の雨

に同情をして南無阿彌陀佛を唱

える。

世の中に恐ろしいと云ふものは

ない、恐ろしいと云ふのは其の思

念に負けるからである。だから勝

たねばならぬ。
死を恐れるな、と云つて望むな。

て後、此處彼處にて亡び給ふと承るに就きても、御身如何なり給ひぬらんと心苦しく思ひ煩しが、誠に御一門の光り影暗く、さしもの世の亂れの中を、遙々と高野參詣の御志、また目出度くも思召し立ち給ひけるよ」

經盛は唯だ畏まつて、

「家門の榮花既に極りて一族悉く西海に落ち下り、或は討死し或は生捕られ、適々討殘されし者は、ある空も覺えず、開心もなく安き時もなし。此身も遂に遁るまじきと思ふものから、高野は結界の地ときけば、兎も角も出家して其後如何にもならんと存じ、屋島を出でて是れまでさ迷ひ來り、計らずも上人を見奉るこそ嬉しき限りなれ。何卒、此上は戒をも授け奉り出離の要門確と承はり聽かせられて今世後世を導き給へかし」

「此の寺にて説戒のある間、御聽聞も望ましけれど、御急ぎと見奉れば直ちに戒を授け参らすべし」

と、上人高座に登つて圓頓菩薩の三聚淨戒を授け終り、更に彌陀大悲の本願、專修念佛の妙旨をこ

まごまと懇ろに説き聽かせられるのであつた。

經盛餘りの有難さに思はず「オ、」と聲を上げて泣かうとした時、之れは有りし日の粉河寺での法然上人への見参を再びまざくと繰り返へし見た南柯の一夢で、覺えず放つた歡喜の聲に自ら眼が醒めたのである。

經盛は尙更らに信仰の心を固めて心も明るく氣もはれんとするのであつた。

かくて夜も明け渡つたので、出家の師たる高野の聖の元と父重盛卿の侍だつた三條齋藤灌口入道時頼、并に平治の亂に二條堀川で重盛卿を助けて鎌田兵衛正清と組み、惡源太義平に切られた與三左衛門尉景康が子の與三兵衛重景入道戒實、同じく召仕ひの童であつた、之も經盛卿并に重景と共に出家剃髮して戒圓と名のる石童丸の三人を召し連れられ、濱宮の王子の御前から舟に乗るべくまたもや草鞋の紐を締め直すのであつた。

因に云ふ。經盛は舟に乗り那智の浦から山鳴島の沖で入水したとも云ひ、入水を助かつて、のがれ住んだとも云ひ、相州箱根の湯元の宿で入寂したとも云ひ傳へられて、其終る處が明かでないが、兎に角念佛の信者として其最後を人知れず安らかに飾つたこと丈は確かである(終)

吾は佛の子なれば佛とは知己である。

良き念は肉となり血となる。

私は毎朝夕淨土宗の御經を

妻と共に誦んで居るが、身體にと

ても良い。大きな聲で經文を讀ん

だり御經を唱えたりすると肩の

荷が軽くなる思ひがする。心と言

葉と實行の三位一體の賜である

同信相樂しむ。

大少使、おでき、病氣の出るの

はすべてあつてはならぬものを出

ず神の攝理で、一口に云へばあら

ゆる意味で出す事は一つの整頓で

ある。

佛よりありがたいものはないと

知れ。

私でなくては出来ないものを

するために私が生れて來たのだ。

人の範となる記念塔を作れ。

恩 誓 開 化 仁 義

山岡 莊八
中島 松二



誤 解

『なあ榮五、俺らお前に済まねえことが一つあるんだ……』

晝の戦ひで受けた太股の槍創を、晒木綿でキツチリと巻いて貰ひながら、銀次は、ボツリと云つて月を見上げた。

明治元年の八月十三日、滴るやうな月夜だった。

冷え／＼とした山氣の中で、斷崖の底から魚野川の岩を噛む音が湧き上つて来る。

あたりには鈴蟲の音が降るやうだった。

『俺らお前を欺してゐたことがあるんだ。みんなお芳のためだ。俺あ、お芳のことゝなるとまるで氣狂ひだった。本田傳八を叩つ斬り、江戸に居られなくなつたのもお芳のためなら、兄弟分のお前に、たつた一つ嘘を吐いて欺したのもお芳のため……』

榮五郎はしかし、黙々と傷口を巻いてやつてゐる。

『なあ榮五、俺らお前の親切が良心へこたへるの



だ。俺ら、あやまらずには居られなくなつたんだ。榮五、俺ら白
狀する……」

「止しねえー」

榮五郎は語氣だけ強く、だが、銀次を見上げた顔には明るい微笑
を漂はしてゐた。

「榮五、まあ聞いて呉れ……」

「止しねえつたら、アツハツハ、俺はお芳を残しちや江戸が捨てら
れなかつた——それで道づれにしたと云ひてえこたあ知つてゐる
ぜ。尤も、俺も確にお芳にや惚れてゐたからなあ。お天道さまも悪

戯が好きさ。だが、そのお芳も、何うやらお前の
ものと決つた江戸、實あ、この俺らも江戸が嫌に
なつてゐたんだ。アツハツハツハ。」

「さうか……」

銀次はついに黙り込んだ。

頭の上で梟が鳴きはじめた。

北越、浦佐郷の山中である。

女のことから、旗本崩れの本田傳八を斬捨て
、江戸を賣らねばなくなつた博徒の銀次
と黙つて銀次について江戸を捨てた榮五郎。そ
の二人が、長州藩の募兵に應じて自暴半分に長刀
を振廻すやうになつてから、直ぐに送られて來たのがこの戦ひだつ
た。

この日は長岡藩の風雲児、傷ついた蒼龍窟河合繼之助が、浦佐郷
を敗走して、嚙澤村迄落ち延びた日である。

本陣の、總督西園寺公望のもとへ、その報せが入つたのは、黄昏
が、谷を、森を、埋めつくさうとする頃だつた。

山峽の落日は、瞬く間に夜へ移る。まだあたりの森や林の懷へ
は、傷ついた敵の落武者が忍んでゐよう。

銀次と榮五郎は、明月の光りを浴びながら、魚野川に望んだ絶壁

の上で歩哨に配置されてゐたのである。

『さうか……お前は俺らの氣持を知つてゐて、黙つて一緒に江戸を捨てたのか……』

銀次は、呟いて、また黙つた。木の根に腰を降ろし鐵砲の銃口へのせた銀次の顔は、彫の深い面のやうに、くつきりと影を作つてゐる。負傷のせいもあるであらうが、痛ましい影だつた。

榮五郎は、そつと銀次に脊を向けた。見てゐると自分まで涙ぐみさうな氣のする榮五郎だつた。

『なあ榮五、お前はもう一度江戸へ歸りてえとは思はねえか……』
又、銀次は、思ひ出したやうにボツリと云ふ。その言葉の裏に、お芳への思慕をはつきりと讀みとると、榮五郎はことさら聲を立てゝ笑つて見せた。

『ハツハツハ、俺らお芳は三年前から綺麗さつぱりと忘れてゐらあ！ 他に身よりたよりが有るぢやなし、近頃あお江戸の夢も見やしねえや。』

さう云つた後で、榮五郎は激しく首を振つてゐた。嘘だ！ みんな嘘だ！ お芳が銀次と出来たと知ると、お芳の顔さへ眞正面に見られなかつた。それだけではない、銀次の居なくなつた江戸へ、自分とお芳が居るんだ——さう思ふことさへ怖ろしかつたのだ。——若しも銀次の留守に……さう思つただけで『兄弟は裏切れねえ！』

と、銀次と一緒に江戸を捨てたのだ。

二人は暫く、脊を向け合つて、お互ひに一人の女の幻を追つてゐた。

と——

不意に蟲の音がバタツと止んだ。

二人は、本格的に立上つてゐた。

『おう！』『おう！』

同時に二人は敵を見出したのだ。

『榮五！ ヨボくの傷負らしいぜ！』

銀次はさつと刀を抜いた。眼の前數歩のところ、月光の中へ幽鬼のやうに踰躍き立つ武士がある。銀次はその敵にちり／＼と刀をつけて行つた。

だが、榮五郎の見付けた敵は別だつた。榮五郎がすつと立つた時、五六間離れた老杉の幹へ、サツと隠れた黒い影があつたのだ。

『出ろ！』

くつきりと大地へ影を落した老杉の樹下闇、榮五郎は闇へ呼びかけ、ぐつと刀を振りかぶつた。

『詰らぬ雑兵に見つかつたか……』

闇の奥から鐵枯れた舌打の聲。續いて、槍の穂先がチカツと月の光りに映えた。

（しまつた！）榮五郎は、心に叫んだ。相手の姿が見えないのだ。

自分だけは、眞晝のやうな月の光りに照し出されてゐると云ふのに……。

(早く位置を變へないと……)

だが、闇の中からびたつとつけられた相手の槍は、死んだやうに微動もしない。ひつそりと光を吸つた穂先だけが、生物のやうに、冷たく胸板を覗つてゐる……身動きの出来ない無氣味な槍、榮五郎の呼吸は亂れ始めた。

と、その時背後で、激しい刃ぜりの音が起り、

『呀っ！』と、人の斬られた叫びだ。

『斬つたか銀次ッ！』

びくりと體が波打ち、榮五郎の聲が思はず浮く。と、その間隙を覘つて、電光のやうに相手の槍が伸びる！ 榮五郎は危く躲し、

『何うした銀次！』と、鋭く叫んだ。

『不可ねえ……や、やられた！ 額をやられた……』

『何にッ！ やられたッ！』

だが、榮五郎は、振返へることも出来ない。

『榮五ッ、來……來て呉れ、血が、血が眼へ……つて、眼が……眼が……』

銀次は、必死になつて逃げ廻つてゐるらしい。足音が、激しく草の葉を鳴らしてゐる。

榮五郎の太刀尖があせつて、微かに震えだした。だが相手の槍

は、一分の隙もなく、ぐつと胸元で動かぬのだ。

『榮五ッ！ 俺あ斬られるッ、あつ、足が利かねえ、榮五ッ！ 何故來ねえッ 何故助けねえんだ……』

『銀次！ 落付け！』

『落付けねえ！ 斬られる！ 榮五ッ！ お前黙つて見てゐるのかッ、黙つて……あつ、またやられたッ！ 榮五ッ！ 手前……手前

さるか……考へたなッ！』

『なにッ！』

『さうか……分つたぞ榮五！ それに違ひねえ、手前が……手前が承知で旅へ出たのあ、斯うした機を待つてゐたんだ！ やいッ榮五ッ！ 手前、俺を……俺を殺して、一人で江戸へ歸るつもりだな！ 畜生！ 呀っ！』

『銀次！』

呼び掛けた榮五郎の額には、描いたやうな疳筋が、くつきりと膏汗に光り、刀の鏢ががたく鳴つた。

『やい銀次ッ！』

だが、銀次の答へはもうなかつた。

『銀次ッ！』

その聲と同時に！ 榮五郎は槍の手元へ無茶苦茶に刀を振り下した。

『うわッ！』

刀の下で擧がる叫び！ と、次の刹那、榮五郎はバツと身を蹴し、蹠蹴く武士に隼のやうな双手突だつた。

銀次を斬つた傷負の武士は、聲も立てずにバサツと草の上へ倒れた。

『銀次ッ！』

だがあたりに銀次の姿はない。

榮五郎は、慌て、崖のはづれに駆け寄り、倒れた草に手をあてた。

先刻まで、きらめく露を宿してゐた草の葉に、べつとりと黒い血のりがついてゐた。

『落ちやがつたか……銀次ッ！』

もう一度覗き込んで呼びたてたが、屹立つた斷崖の遙か下では、魚野川の急流が、白銀いろのしぶきをあげて濤々と流れてゐるだけだつた。

お芳の危急

星屑を映した隅田川の水面に、深夜の風が颯々と鳴つてゐる。師



松二重

走も押し詰つた或る日。

もう程なく九つ刻。ご遷都の噂に幾分活氣ついてゐるとは云ひ、まだ百鬼夜行の深夜の東京は、犬の仔一匹通らぬ寂れ方だつた。

『お芳、これが見えぬか！』

材木河岸に近いお芳の住居。寢静まつた露地内へ、こゝからだけは微かに灯りが零れてゐる。

『小道具や竹光とは譯が違ふぞ！』

武士とも無職ともつかぬ男の手から、ブツと疊へ突き立てられた冷たい拔身だつた。

その足元に、お芳は、散落ちた花のやうに、しどけない姿で泣き濡れてゐる。

四十がらみの苦味走つたその男は、懐手のまゝお芳を見降ろして、

『明日の米もなかつたお前の暮しが、何故近頃樂になつた。近所の拂ひを何うして済ませたと聞いてゐるのだ。』

『そ……それは……』

『ふゝゝ、亭主の銀次が歸つてゐると云ふことは、本田傳三、確かな筋で聞き知つたぞ。』

『それは何かの間違ひです。若し、若し江戸へ歸つてゐるとしましても、妾は本當に遭つては居りません。』

お芳の顔は紙のやうに蒼ざめてゐた。幾分やつれては居るが、長い睫毛の下で、じつとりとるんだ瞳、まだ仄に初々しさの残つた二重顎、絹糸をたらしただやうな後れ毛の間から、くつきりと浮いて見える白い頸、本田傳三は眼を細めた

『ふゝゝゝ、お前にとつては可愛い男でも、銀次は、弟傳八の仇敵、隱家を言はぬとなれば、縁に連るお前の首を斬るまでだ……』
『ご無體、ご無體でいます！』

『何が無體だ！では、近頃のお前の暮し……』

『その事は、先程から繰返し、繰返し……』

『まだ云ふか！如何にお前が評判の小町娘であらうとも、この世智辛い師走の月に、黙つて窓から金を抛り込んで……ふゝゝゝ、とんだ子供欺しの鼠小僧だ。お芳ッ！』

と、呼びかけて、傳三は膝を折り、顎の下からぬつと手を伸して、お芳の顔を暴々しく自分へ向けた。

『それ程銀次が大切かッ！』

『許して下さりませ。許して……』

事實、銀次は、傳三の弟、傳八を斬つて江戸を捨て、以來なしの譯だつた。

だが、お芳にも不思議に思はれるのは、銀次が旅へ出ると間もなく、踊りの師匠だつた母を失ひ、賣り食ひの種につきたこの師走になつて、拂ひの出来ぬ四苦八苦の或る朝、起き出して見ると窓の下へ抛りこまれてゐた金が十兩あつたことだつた。その金を、或ひは銀次が江戸へ歸つてゐて——と、考へて、すつかり費つて了つた矢先、始終お芳の家の近くをうろついてゐた傳三が、然も眞夜中、風のやうに訪れて来てこの難題だつた。

この分ならば、あの金も謀みのある傳三が……と思ひつくと、お芳はもう身も世もなかつた。
『許して……許して……』



松二
お

傳三の手を擲ひ退ける力もなく、お芳は、白刃の前でうつろに唇を開いて顫えてゐる。白い八重齒が美しかった。

「その可愛い唇で、銀次と戀を語つたか、ふふふ、さあ、斬るぞ！」

仔鼠をからかふ猫のやうに傳三は、何處迄も颯々たる氣だつた。或ひは、傳三の目的は、始めからお芳の美しい體にあつたのかも知れない。

傳三は立上つた。そして、疊から刀を抜くと、今度は、刀の平をびたりとお芳の頬へあて、ニタリと笑ひを洩すのだ。

と、その時だつた。

どんと傳三の腰を蹴つて、臺所口から部屋の中へ、すつと立つた人の影がある。

「誰れだッ！」と、二三步泳ぐ傳三へ、

「愕くねえ、たゞの人間さまよ！」

手拭で顔にかくした遊び人風だつた。

「貴様、銀次だなッ！」

突嗟に斬りつけた刃の下で、男の聲は落付き拂つてゐた。

「お芳さん、銀次あ死んだが話はあとだ！斬られた野郎の死態なんぞあ、今のお前の身體に毒、灯を消してお呉んなせえ。」

お芳はハツとした。銀次さへ知らずに行つた自分の胎を、この男はちやんと知つてゐる。誰だらう？

『早く消して！』

『はい。』

お芳は、ふツと行燈を吹き消した。と、同時に、塗りこめられた闇の中でバツと赤い火華が散り、

『わあッ！』

と、云ふ叫びだつた。

お芳は兩袖で顔を覆つた。

だが、たつた一瞬だけ、後は又、しんとした闇に返つて、暴い呼吸は確に一人だけだ。

『お芳さん！』

呼びかけたのは遊び人風の男の聲だつた。

『行燈は點けねえで、暗闇のまんま、あつしの話をお吳んなせえ。』

『……』

『銀次あ死にました。』

『あ、榮五郎さん！』

『ハハハ、思ひ出してお吳んなすつたか……』

『では、では、この間のお金も……』

『悲しい報せを持つて來た榮五郎の手土産でさあ。あつしや、お芳さんの普通ぢやねえ身體を知り、死んだと聞いた時の嘆きが見たくねえばつかりに、逢はずに歸つてしまひやした……』

『待つて下さい。待つて下さい。今灯りを點けますから……』

『お芳さん、それだけは勘辨してお吳んなせえ、俺ら・お前さんの泣く顔も見たくねえ、俺らの泣く顔も見せたくねえ……』

話は杜絶れ、二人の鼻を吸る音がしばらくつゞいた。

『出來た事は仕方がムンせん。こんな五月蠅え奴を斬つたんぢや、何うせこの近くには居られねえ。お芳さん、お阿母さんの位牌だけしつかり持つて、俺しについて來てお吳んなせえ。身二つまで、及ばずながら榮五郎が世話させて貰ひやせう……』

『はい。』

戸外はまだ寒々とした風だつた。風を縫つて、一番鶏のときが聞える。

恩 誓 の 枷

文明開化の波に乗つて、江戸時代の古い夢を振り捨てながら、あれから十歳あまりの月日が流れた。

五月雨が、鐵道馬車の轆をしとくと濡らしてゐる或る日の昏方だつた。

開化思想の發祥地、三田通りの近くに出來た「牛を喰ふ店」の小座敷へすつと通つた、妙な、二人連れの客があつた。

一人は官員風の白縮緬の兵兒帶をしめ金鎖を光らした三十がらみの紳士。だが、連れの男は、勞働者風のふた眼と見られぬ物凄しい傷

娘の持主だつた。

年齢の見當さへもつかぬその男は、

『旦那！』

と、紳士に呼び掛けた。

『ちや旦那もあの相州屋に重なる怨みがある、それで毎日、相州屋の圍りを覗つてゐたと仰云るんですかい？』

『さうぢや、あの相州屋の主人には、忘れられない遺恨がある。遺恨のある者同志が、斯うして二人出逢ふと云ふのも相州屋の悪運が盡きた證據ぢや！ 愈々今夜、二人であの家を襲ふとなれば、先づ何よりも腹拵へぢや、それで、わしの方から君を誘つたのだが、この牛の肉を食べると力が出る、さ、うんと喰ひ給へ。』

『へえ……これを食べると力が出る。ぢや、四足を喰ふなあ始めてだが、思ひきつて頂きやせう。』

傷の男は、氣味悪さうに牛肉を掴みあげて、口へ運んだ。

『ハハハ、空氣を燃やすガスのランプの出來た世の中ぢや、たかゞ牛肉ぐらゐ、不味さうな喰ひ方をする男だ、ところで先刻も云つた通り、わしは戸外で見張りをする、君は中へ斬りこんで……可いかな、その代り約束の高飛び代は渡して置く。』

紳士は、紙入から拾圓紙幣を二枚抜き出して、傷の男の手へ握らせ、急に聲を秘めて。それから暫くは、聞きとり難い相談が、ヒソ／＼と續けられて行くのだつた。

『人を叩き斬るんぢや、いくら腕に覺えがありやす。さ、それぢや、もう一杯頂いて、そろ／＼出掛けると致しやせうか。』

『まだ宵ぢや、さう急くこともあるまい。何うぢや、こゝまで話すすんで了へば、お互に身分をかくすこともあるまい、相州屋を怨んでゐる君の理由から聞かうぢやないか。』

『へえ……』傷の男はべこりと頭を下げ、

『あつしが、こんな化物見てえな面になつて、恥を晒して生きてゐるなあ、云はゞ相州屋の一家を呪ふ復讐の心からだけでさあ！』云ひかけて、急に男の眼は、蛇のやうな呪咀のいろに變つて來た。

『恰度今から十年前の八月に、あつしや相州屋と一緒にご一新の戦に出た……ところが、あ奴があつしを戦場へ連れだしたなあ、あつしの言ひ交した女を奪るのが目的だつた……あ奴あ人間ぢやねえ！そこであつしや、ご覺の通り、二眼と見られねえ片輪にされて、五十尺もある崖から落ちてしまつた……』

傷の男は、浦佐郷の山中で、死んだ筈の銀次だつた。鐙の中で、は、牛肉が、ジツツと音を立て、焦げついてゐる。

『ところであつしや、あ奴の注文通りにや死ななかつた。崖の中途の樹の枝に、宙吊りになつて氣を失つてゐたんでさあ、それを百姓家に助けられて、何うやら歩けるやうになつたのが翌年の正月、急いで江戸へ出て見たが、その時にや、野郎、あつしの女と一緒にず

ちかつた一月後、それからあつしやこの顔で、鐵道馬車の工事人足をやりながら、今日まで、あ奴の行衛を探してゐた、探し當て、見りやご承知の通り、あ奴あ、あつしの女と一緒に住んで、今ぢやご大それた相州屋の日那氣取り、お負けに可愛い餓鬼まである……」

さうか！ だが、その相州屋も今夜限りの生命ぢや、實はわしも、相州屋に伯父と父を討たれた遺恨がある……」

さう云つて、紳士もちつと腕を組んだ。

「相州屋は、今では榮五郎と名乗つてゐるが、父からわしの聞いてゐる名は、確か銀次と云つた筈……」

「銀次……」

「さうぢや、わしは本田文一と云ふ十族ぢやが、あ奴に討たれた叔父は傳八、その叔父の恨みを晴らさうとして、父の傳三もあ奴に討たれた……」

銀次の顔いろは、見る／＼うちに蒼ざめて行つた。だが紳士は、軒端の雨だれの音にじつと耳を傾けながら語りついだ。

「父の討たれたのは銀次の情婦の家、今一緒に暮らしてゐる確かお芳と云つた、すると、その女が君の女であつた筈ぢや……」

「へ……へえ……」

銀次は紳士の容貌から、自分が斬つた本田傳八の斷末魔の苦悶を連想して、因縁の怖ろしさに思はず舌がもつれてゐた。

「……だが、仇討禁止のお布令が出てしまつた明治の世では、残念



『あらッ小父ちゃん、あたしのお家へ来てゐたの……』

母屋からの細い廊下をバタ／＼と駆けて来て、お銀は、甘へた聲で直ぐに榮五郎の肩へまつわりついた。

『ね、小父さん、小父さんあたしのお父さんになつて呉れるでせう。ね、先生にさう云つてもいいわね。』

榮五郎とお芳は、無言のまゝ、思はず顔を見合はした。

『もう小父さんとお店の方へ歸さないから、ねえ母ちゃん、今日からお父さんにしちまふの。』

銀次が、あゝした誤解のまゝ死んだのでなかつたら——さう思ふと榮五郎の心も苦しかった。

と、その時である。ガタ／＼と雨戸に物の倒る音、續いて庭で、漣しく罵しり合ふ聲だつた。ギョツとして五人は顔を見合した。

榮五郎の手で、窓が開けられ、その時はもう元の静寂に返つた庭先だつた。そこからこぼれた光の中へ、ぼんやりと照し出されたのは銀次だつた。銀次は、雨に打たれ、しよんばりと項垂れてゐるのである。

『誰だッ！』

窓からは、重なるやうにして榮五郎の顔が、見え、懐しいお芳の顔が……そして始めて見る吾が兒の顔が……

『へえ……お騒がせ致しやして済んません……』

銀次は、雨と涙をふり切るやうにガツクリと頭を下げた。

『誰でもねえ、泥棒なんでムんす。お情でムんす。何にも仰有らずにこのまゝ自首させてお呉んなせえ。』

『自首？』

『へえ、實あ、あつしや今、この庭先で、人間一匹殺しやした。なアに、合棒でさあ、今夜二人で、ご當家へ忍びこんで大仕事をする筈でムんした。だが盗らねえ先から飛んだ分け前の争ひで、お恥しうムんす。ですが旦那、あつしにも親は無え、親の味を知らねえもんでムんすから、實は、今のお三人のお話あ、しんみり伺つて居りやした。』

銀次はもう三人の顔が見えなかつた。

『へえ、泥棒づれにも人の情は分りまさあ、親の無え兒は氣の毒だ。旦那！ 父親になつてお上げなせえやし、若し銀……なあに、何かの義理があつたとしても、お銀さん……とやらの父親も、きつとそれを喜びやせう。さ、窓をお締めんなつてお呉んなせえやし、泥棒にも、顔を見られりや恥しいこゝろもある。へへへ、お嬢さん、小父さんを、何うでもお父さんになせえやしよ。』

銀次は、闇の中へ歩きだした。

(これで、相州屋を覗ふ奴もねえ……)

さう思ふと、銀次の足どりは輕かつた。

窓からは、三人の顔が、まだ、銀次の後姿をちつと見送つてゐるのだつた。(完)

なからうかつに手は下せぬ。」

『だ……旦那！』

不意に叫んで、不意に叫んで銀次はすつと立ち上つた。

(榮五郎さへ叩つ斬りや、この誤解も闇から闇だ！)

『さ、出掛けやせう！ あつしや……あつしや、もう我慢が出来ねえんです！』銀次の聲は怪しく喉元にからんでゐる。

恰度その頃、相州屋の離家では、榮五郎とお芳が向ひ合つて坐つてゐた。

堅氣にならうと決心し、あれから生れ變つたやうに働きたした甲斐あつて、榮五郎は、今では三田通りでも屈指の海産物問屋、雇人も三十人近く使ふ身分になつてゐた。

『お銀はまだお店で遊んでゐるな。』

お芳の立てゝ出した茶を啜りながら、榮五郎は、柔和な微笑で、訊ねるのだつた。

『何うだ、學校を嫌がる様子はないか。』

お銀——それが、あれから間もなくお芳の産んだ銀次の子、お銀の名も、榮五郎が義理を忘れぬ銀次への志だつた。

『はい、學校は面白がつてゐますが……』

云ひかけて、お芳は眼を伏せた。

三十二の年よりは、四ツ五ツも若く見えよう、お芳の姿は、眩し

いほどの妍かさを加えてゐる。

『學校は面白いとは云つてゐますが、今日、先生が、お父さんの名を聞いたとかで、歸つて來てからむづかつて困りました……』

『……』

『私にだけお父さんがない、お父さんは何處へ行つたと訊くのです。』

黙つてゐる榮五郎をちらと見上げて、お芳はまた、遺瀟なさに疊へ視線を落した。

『何彼とご不自由もムいませうし、奥さんをお貰ひになつて、お銀をあなたの子供にして頂けないものでせうか……』

『お芳さん、またそのことが、その事なら、何時も云つてゐる通り、それだけがわしの我儘で……』

『いゝえ！』お芳は激しく頭を振つて、

『貴方の氣持を考へますと、私は勿體なくて勿體なくて……』

『それ、また始まつた、ハハハハ、わしの獨身暮しはわしの道樂とその我儘だけは許して呉れと、あれほど頼んでゐるぢやないか。』

『でも……お銀に、父親を持たしてやりたくありません……』

呟くやうにお芳は云つて、そつと眼頭へ袖をあてる。

榮五郎は、お芳から眼をそらすと、出かゝつた溜息を、お茶と一緒に狼狽て胸へ呑みこんだ。

庭木にあたる雨脚が、だん／＼激しくなつて行くやうだつた。

信 仰 相 談

ナムアミダブツは？

(問) 南無阿彌陀佛の佛名は印度語の直譯ですか、印度を始め諸外國にてもやはりナムアミダブツと發音するのですか。(岐阜 井川讓)

(答) 南無阿彌陀佛は南無と阿彌陀と佛の三つの梵語の音を漢字にあて讀めたものだと言ふことです。だから直譯では無く音寫と云ふ可きものでせう。だから南無引阿彌陀引佛陀引耶と書いてあるのもあります。引とは音尾を引くと云ふ記號です。

南無引はナモーで、ナムとアスとの連續ナマス(歸命)が、次の語の「ア」などの弱音に接續する時、ナモーとなるのです。

阿彌陀引はアとミターとの合成で無量ノと譯すべき言葉で、それに、アーユスを付けると無量壽となり、アーブハを付けると無量光と譯され

るのです。

佛陀引耶はブツドハーヤで、ブツドハ(覺メタルモノ)にアヤを付けてブツドハーヤとなるのです。

だから梵語ではナモーアミターブツドハーヤとなるのを、漢字に寫して南無引阿彌陀引佛陀引耶と書いたのが略されて南無阿彌陀佛となり、それが日本へ來てナムアミダブツになり佛をブツとも云ふやうになつたのでせう。日本の禪宗などでは唐音でナムオミトボヤーとか、ナムオミトーフと云つて居ます。現在支那ではナムオミトーフと云ひ、朝鮮ではナムアミターフルと云ふさうです。

直譯すると「歸命は無量の覺者に」とか「歸命は無量壽に覺者に」とか「歸命は無量光に覺者に」とかなるのです。

いづれにせよ。私達は「限りなき壽と光との佛に歸命し奉る」と云ふナムアミダブツとかナムアミダブツとか云へばよいと思ひます。

(中村辨康)

同名のお方が二體

(問) 佛說阿彌陀經諸佛稱讚の中で、大焰肩佛と云ふ同名のお方が二體ありますが、これはどうした譯でせうか。(井川生)

(答) 仰せの通り阿彌陀經の南方と上方との二個所に大焰肩佛が出て居ります。其上北方の焰肩佛も、梵本では同じで三個所ともマールチスカンドハとなつて居るとの事です。から、都合三つ同じ名の佛が表現されて居る譯です。何う云ふ意味の佛様なのか、私には判りませんので、ハッキリした事は申し上げ兼ねますが、唐譯では大光蘊佛と譯して居りますから、焰肩光、肩光、同じ意味だとすれば、身體全體か光であると云ふ事を表はして居るとも見えます。光とは人格の光です。して見れば「最大なる人格の光を有する佛」と云ふ事になるので、同じ名の佛か幾人あられども差支へないと思ひます。

そればかりではありません。東方には須彌光、南方には、日月燈、須彌燈、名聞光、西方に

信 仰 相 談

は大光、大明、淨光、北方には網明、下方には名光上方には香光など云ふ名が擧げられて、光に關係した佛名が澤山出て居り、それが殆んど同じ意味に解せられるのですから、一一そんな穿索をして居たら大變でせう。何れも立派な人格者、正しき覺を得られたる大覺醒者として尊んで居たらよいと思ひます。(中村辨康)

信仰と理窟

(問) 人は信仰すれば死をも恐れざる勇氣を與へられますが、理窟に依つてはなぜ得られぬでせうか。信仰と理窟との異ひが分らぬのです。

(佐賀 中溝文次)

(答) 淨土宗の信仰が「仰信」であることは本誌に連載された中村辨康師「一枚起請文講義」で先頃御承知のはずと思ひます。「仰信」とは「仰ぎて信ず」です。阿彌陀一佛を

仰いで念佛申すことによつて自身が救はれると信ずる状態を指します。佛たすけ給へ、即ち、南無阿彌陀佛と唱へれば自身が佛の大慈悲に救はれるのです。念佛するだけなら誰だつて出来る。それでいいのです。淨土宗の信仰は念佛を申すほかに何の煩瑣な條件とてないものであります。

「死をも恐れざる勇氣」とあなたはお訊ねになります。「死」とはこの人生に於て何人によつても打消し難い嚴然たる事實です。死の前にはどんな偉人でも無力なわけです。しかも「死を恐れざる勇氣」を以て事を爲し遂げた偉人は古今數多く存在してゐます。このことは何を語るものでせうか。——どんな學德兼備のすぐれた人間でも、理窟でどうせうもない死の事實を怖れないはずはないのです。まして我々に於ては尙更のことです。

人間は理性の動物であると申します。けれどもその理性も死を動かすわけにはまゐりません。然し、翻つて考へてみますと、人間にはさうした理窟の世界と違つた情意の世界がある筈です。死の存在に無力を知るのは人間

の理窟の世界です。しかし知つた無力をそのままであられない心の動きを起すとき、人間の情意の世界がひらかれます。よく名のある實業家などで「死のあとなんか構ふものか」と云ふ人があります。然し死後がどうでもいゝ、自分一人生きてゐる間だけ樂に暮せば、といふ考へなら何の事業だつて出来ないはずです。太く短く惡事を働いた方が得です。ところが人間は一個だけではない、小さければ小さいなりの家族を控へてゐます。自分が眞面目に働くのは、自分の亡きあとで家族を困らせないやうにと思ふからです。「安心して死ねる」境地が一番「力強い生き方」です。だが我々凡夫にはなかなかその境地が得られない。理窟ではどうせうもない、自分の無力を誰かの力に頼りついて救はれたと思ふ境地、そこに信仰の世界のよろこびがあるのです。「死を怖れざる勇氣」の理窟でない理由はこのにあります。(佐賀)

▲お断り。本誌五月號本欄佐藤良智氏解答文中「明照大師」の明の振假名を「みやう」としたのは「めい」の誤植です。(係)



投稿を歓迎します。

四百字詰原稿用紙
五枚以内、信仰體
験談」と表に朱書
し、當編輯部宛御
送附下さい。

空巢犯人の夫と……

信仰に入る

佛子 みね

私が結婚いたしましたのは、一昨年私が二十一歳の春でした。女学校の三年頃までは、どうやら人並に生活してをられた私の家も、父の事業の失敗で破産の悲境に陥入り、私は三年生で途中退學して、生計の苦しさから或る工場の女工となりました。兄は兄で大學を半途で止して、やはり工場へ住込み、父母は

封筒貼の内職をする身となつてしまひました。

ところが二年後、私は其の工場に時々遊びに来る或る會社の事務員だといふ廿七八歳の青年と戀におち、遂に兩親の許しを得て結婚いたしました。

夫は、眞面目に朝七時になると、出勤し、夕方になると歸つてまゐりました。月給は何んでも八十圓貰つてゐるやうに申してをりましたが、

『今日は貯金を下げて來たから、指輪を買つて來てやつた——』とか、
『少しお前には、はでだけれど、いゝ柄だから買つて來た——』など、申しては、指輪だ

の衣服等を私にくれるのでした。

『ねえ、あなた。かうして私を喜ばせるために買つて來て下さるお心持は、感謝しますけれど、あゝして私の父母の面倒までも見て戴いてゐるのですから、あなたにすみませんから、どうか、私の品なんか氣になさらないでね』と、その度に私は夫に申しました。

當時、市内の諸所に白晝にも不拘ず、人の不在を見すましては家に忍び入つて、衣類や貴金屬品など盗み歩く犯人が横行するといふ報道が、新聞に毎日のやうに出てゐましたが、何も知らない私は、夕餉の後、夫と新聞を見てはその噂をし合つたりいたしました。

『お前も、よく氣をつけて、留守にしないやうにしないでね』と、夫はいつも出勤際に、私に注意しては出て行きました。

……それですのに、あゝ……なんといふお恥かしいことでございませう。私は何もかも包まず偽りなく申上げます。實は、私の夫は、恐ろしい空巢ねらひだったのでございます。會社の事務員などとは、眞赤な嘘でした。

私に氣付かれないうちに、毎日眞面目に出勤する風を装つてゐるのです。とうとう悪運盡きて、結婚後間もなく夫は、現行犯を捕へられ、私も其筋からいろ／＼とお取調べを受けましたが、露ほども知らなかつた私は、何のお咎めもなく許されて歸りました。夫は遂に十ヶ月の刑に處せられたのでした。

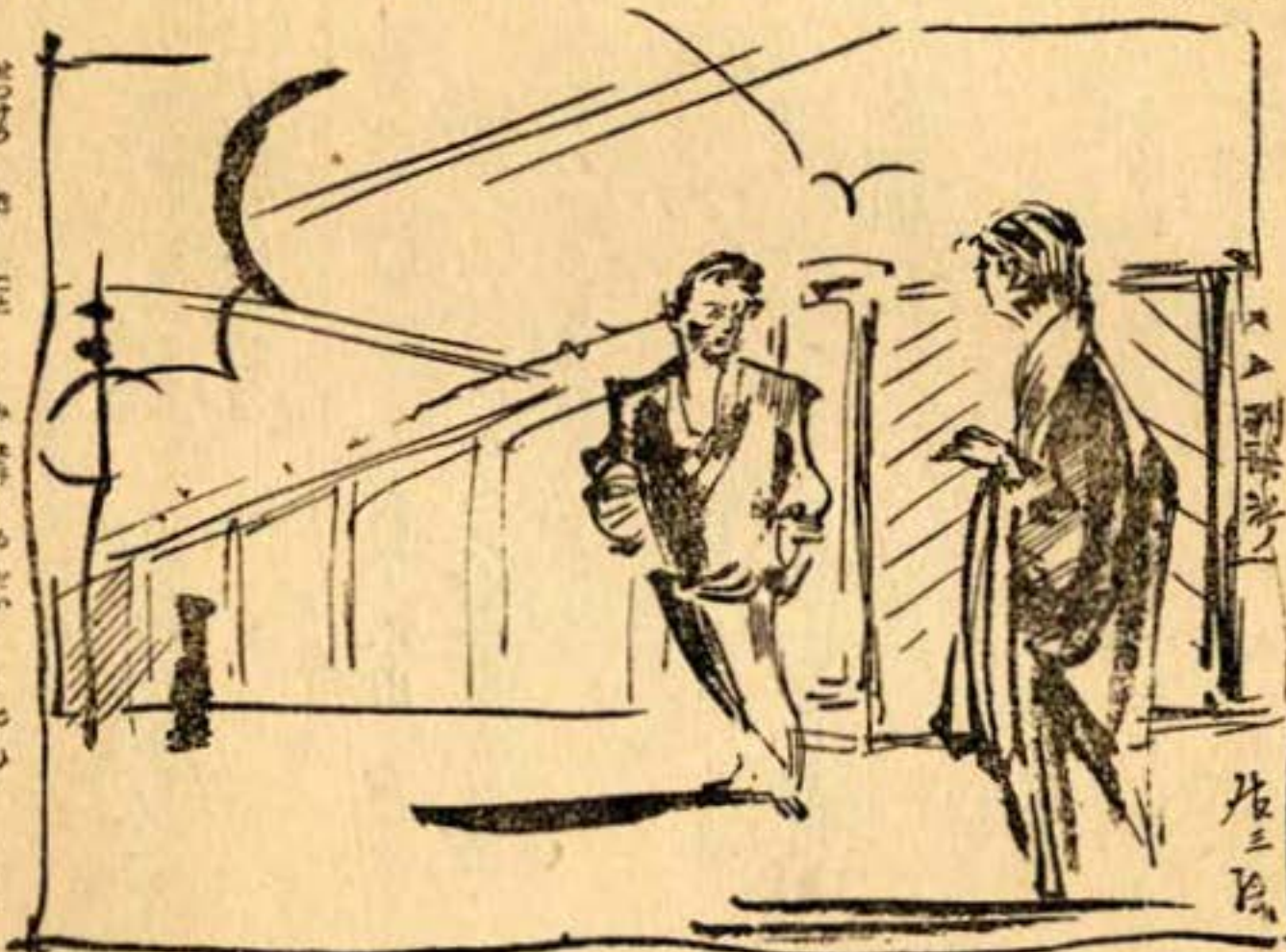
私は犯罪者の妻となりました。世間の人々に對して、申譯ない日蔭者とその妻。

私は夫の出所を待つて、命にかけても夫を改心させねばならぬと決心いたしました。

親戚からは出入を禁ぜられ、父母や兄からも同様の悲しみを受け、お友達からも遠ざけられてしまひました。只頼りとするは夫のみでした。その頼りとする夫は服役の身です。

私は、さうして皆んなから遠ざけられてしまつた上、只もう御佛のお力をおかりして、一日も早く夫を改心させたい氣持で一杯でした。私は髪を切り落して、お寺の境内のお掃除に雇はれて行きました。頂いたお金の一部分を不幸な方々へお贈りすることによつて、

せめても夫の罪亡ぼしと考へてをりました。私は、朝に夕に御堂に坐つて、夫の改悟を乞ひ願ふべく御佛に合掌しました。数々のお



説教を聴く毎に、御佛の偉大なお慈悲にすがつて御加護を願ふ心で一杯でした。さうして過してゐるうちに、夫はやうやく許されて出

所いたしました。私は夫を出迎へにまゐりました。すると夫は私の出迎ひを意外なものゝやうに驚いたらしく、互ひに無言のまゝ歸宅しました。夫は、私の變り果てた身装を見て打驚きました。が、私が黒髪を落して、御寺の掃除夫に雇はれつゝ御佛を信仰して、一途に夫の改心を祈つてゐることを話しますと、夫は男泣きに其場に泣き伏しました。

「俺は、もうあきらめてゐたのだ。何も知らないお前を欺いて結婚した上、恐ろしい罪を重ねて來た俺だ。きつと、お前は俺を見捨てゝしまつたであらうと思つてゐたが、さうまでして、この俺をまだ夫だと思つて待ち侘びて居てくれたのか。俺は嬉しい。夢がさめたお前の信仰心が、いや阿彌陀様がお救ひ下さつたのだ。これから眞人間になつて、一生懸命に働いて、被害者の方々へ詫びる——」
夫は、私の手を固く握りしめて誓つてくれました。その後私達夫婦は、朝に夕に南無阿彌陀佛をとなへ、各寺の有難い御佛の道のお説を聴くを楽しみに働きつゞけてをります。

土 淨

短 歌

與謝野
晶子選

(本欄投稿は官制はがきに三首以内、和歌又は俳句應募と表に朱書すること)

初めて選を
したる後に

與謝野晶子

歌はどんな風にして作るか、こんな風にして作るべきであると云ふやうな議論から出發して佳い作は出来るものではありません。併しながら自分の作つて居るものは眞實の文學になつて居るか居ぬかはお考へにならねばならぬことです。歌は物を描寫するのではなく、外に在る物から促されて心に生じた感激を材料とするものであつて、散文や會話とは違つたものであることを知つて頂くだけのことは

○ 静岡 一向 山人
本堂の廣き障子に紅々と元朝の陽の輝
きそめぬ

初春の富士の雪をば山寺の軒端に子等
と仰ぎけるかな

○ 大阪 小山 文二
待みつる友がいらへの本意なさに雄
こころ湧くを喜びとせん

○ 滋賀 本間 秀道
天地の美光によつて成り立てり光の下
に物皆さかゆ

○ 兵庫 谷口 正名
今ははやむくろとなりし父なれど手も
てさぐれば温か味あり

○ 岩手 藤原貞二郎
良き縁あり二十にて華ごろも着けし娘

を見るうれしこよ

○ 長野 田中 廣司
古年の希望感さへ新しきものに變りぬ
新玉の春

○ 東京 官 澤 勇
白菊はさもあらばあれ輪臺も溢るゝば
かり法の華咲く

○ 福島 佐藤未太郎
眞實の愛のありかを知らぬ我風の音の
み身にしむと聞く

○ 東京 興樂寺正信
はゝそはの母の尊さかぎりなしたつき
のひも書を讀みたまふ

○ 釜山 初田タケヨ
いつしかと時雨になれば繰る珠數の指
につめたき十夜會の宵

是非とも必要です。自分が作つて讀むためのものではありません、自分の感じた所をそのまま言葉に投げ出して宜いかと云ひますと、それでは自己の満足する所とはなりません。自分が錯雜して感じてゐるものを撰り分けて純一にし、それを統一のある音楽的な言葉で書き現すのでなければ自己の満足は得られない筈です。皆さんのお歌に唯だことの多いのはまだ歌と散文の區別がお附きにならないからだと私は思ひます。詩になる、つまり歌になる感情、詩にせねばならぬ感情、かう云ふ大切な感情がなければ、唯ごとを歌はれた三十一字は讀者に取つて何も得る所がありません。一つの藝術を作るためには大切な感情を擔ふに足る言葉の運び方、つづけ方、更に一旦出來たものの推敲が大切です。今後の皆さんの作を私は楽しんで拜見して行く積りで

土 淨

俳 句

納屋口や雪まだらなる飾白

宮崎 信之

桐の實を鳴らす子守や日向ぼこ

月 甫

寒行の鉦に牙ゆるや峰の月

藤原 耕人

はら／＼と冷たき秋の時雨かな

小松 貞夫

咳出でて眠れぬ夜半や霜の鐘

市橋 義一

松の内寺に遊ぶや塵の外

宮崎 信之

窓近く松籟のして夜學かな

頂くや熱き情の十夜粥

小松 貞夫

年始め日本人のほまれかな

茶をいれて話もたのし福壽草

吉原 元明

一叫び百舌の猛りや梢高し

花澤 勇

落葉焚く煙もあはし霜の朝

吉澄 貞雄

春風や微笑顔にさむげ顔

久保田 穠

たぎる湯に帛紗捌きや赤椿

坂本 恭山

綱凍て雪をゆるがす曉の鐘

坂本 一雄

茄子の木の枯々濡るゝ時雨哉

天明福三郎

はじき獨樂落葉を刺して廻りけり

宮澤 勇

菊の香や親の忌日を偲ばるゝ

天明福三郎

爽かにラジオが告げつ御誕生

小山 文二



破産の養家を再興した……

信 仰 の 一 念

一向専修 念佛者 阪根 彌兵衛翁(一)

増上寺法主 大 島 徹 水

明治十五六年の頃、京都居住の在家篤信家の中にあつて特に有名な念佛者が二人あつた。北に大橋、南に阪根と噂さがひろまつてゐたほどに、この二人の一向専修の生活態度は、一般の僧侶達も遙かに及ばぬ精進振りであつた。

その一人である阪根彌兵衛翁と私は、ふとした機縁から親交を結ぶやうになり、翁

の生涯の間二人は絶えず往來してゐた。前に語つたが、京都家政女學校も翁の隠れた力によつて成立したのであつた。翁は青年時代に志を立て、淨土宗の念佛行者として家を興したのであつたが、淨土宗寺院關係に力を注いだ翁の功績だけでも不朽の足跡を遺してゐる——明治二十年前後の總本山知恩院の衰退時代に於て、その復興に努力した前衛に翁の姿が認められる。現存してゐる華頂講はその當時翁等の残した記念のものである。鹿ヶ谷法然院の衰微回復に

も翁の力が大いに働いた。泉谷の廢寺西壽寺の復興、山下現有上人時代の轉法輪寺の移轉改築の發起、その他翁が世話人として各寺の興立に盡力すること數十を算してゐる……

ではなぜ翁がこのやうな奇特の念佛者として世にあらはれたか、私はいま思ひだすままに翁の人となりを振り返つてみようと思ふ。

借財金八千兩也

少年彌兵衛が阪根家の養子となつたのは、所謂風雲急な幕末の頃であつた。後年翁が少年時代の唯一の思ひ出として私によく話されたが、それによると翁の實父も貧しいながら洵に清廉潔白の人であつたらしい。愈々阪根家に養子にやられる日、父は子を呼んで、

「おまへはこの父の實の子であるには違ひないが、今日阪根の子となるからには、今から自家を忘れてしまはなければならぬ。これから阪根の父を唯一の父として敬ひ、私をけつして父だと思つてはならぬ。もしおまへが今後いかなる事情にもせよ、うちに戻るやうな場合を出来しても、私はおまへを子として認めぬ。」

さう懇々と訓したのであつた。従つて阪根家を繼いでからの翁は、その實父の戒めを始終身につけて影日向なく實直に養家の家業にいそしんだ。翁がやつと二十になつた頃、養父が病没した。ところがいざ翁が

養家の身代を受繼ぐ段になつてみると、何と翁に遺されたものは八千兩といふ借財の山積であつたのだ。そのうへ家には教育の義務ある義弟が数人あつた。また不運は重なるもので、丁度維新の「鐵砲焼け」にかゝつて家は焼け落ちる始末。かうなると人情の常で、數ある阪根家の親族達も、落目の家には寄りつかうとしない。商賣を立直さうにも資本の工面のしやうがなかつた。普通の者だつたら大抵はかうした艱難に際會すると、とどのつまり自分一人で實家に逃げ戻るぐらゐが落ちてあらうが、若い彌兵衛は流石にちがつてゐた。彼は養家に來たとき訓された實父の言を思ひ出し、自分の苦勞など未だ未だ小さいものだと思ひ、心にきめて、更生の途を計つたのであつた。

運を佛に任せて

翁の第一にしなければならぬことは、八千兩の借財の返済であつた。その時代の

八千兩は翁のやうな若者が生涯かゝつて努力しても、如何とも見込みの立たぬ大金であつた。しかもその大金は誰からも相手にされぬ翁ひとりの兩肩に負はされてゐるものなのだ。餅の食へぬ正月を迎へて、我と我身の無力さをしみじみと噛み締めたとき、豁然として翁の悟つたのは、佛の力を頼むといふことであつた。——自分の力では到底出來ない、が、然しいまはその切實な云つてゐられない場合である。その切迫した状態に、生々とした進路を翁に投げ與へたものは、念佛信仰の光であつた。翁は早起き、水垢離をはじめた。そして知恩院、清水寺、その他二三の佛閣に願がけに出かける。近隣の早起きの人々が眼を覚ます頃には、もうそれらの朝詣りをすませて家に戻つてゐる。そして翁のはじめた商賣はもとでのかゝらぬ古金賣買であつた。

翁の血の出るやうな苦闘はかうして開始された。佛に頼んだ生活中は、勿論願成就

まで普通人の生活を眞似てはならぬと心に誓つて實行した。酒席に臨むことはもとより、些かの贅澤品をも警戒した。また商賣廻りをしてゐるときは、晝飯に家に戻つても必ず草鞋穿きのまま縁に腰をおろしてしたゝめる。夜は睡眠を極度に詰めて商賣の方針立てに力を注いだ。

翁はかうして着々生活に精進し、ひたむきに商賣を勵んで行つたのであるが、常に自己の難儀を先祖のための修行とし、衣食住を節して徳を積む——その生活の有様の一端を覗いただけでも、私などは頭の下る思ひがするのであつた。食事の質素は云ふまでもないが、たとへば漬物などは家人の捨てるしつぽの方を翁がたべ、好い方の部分を他に與へた。また自分の着衣は耐へうるだけ身に纏ひ、その後は貧民にほどこすのをつねとしてゐた。

これも翁の苦闘時代の挿話であるが、至誠な人間に垂れた佛力の加護の例として爰

に傳へて置かう。——商賣の目鼻が多少ついて來てから、どうしても或程度の資金の必要に迫られた。然し京都の親戚間では相手にしてくれないので、翁が名古屋の岡谷家(岡谷家)については機會を見て語りたいに赴いて用談を纏めて來たことがあつた。

その歸途、鈴鹿峠に差掛ると賊らしい一團が焚火をしながら自分の行手を塞いでゐた。はつとして立ち縮み、ひとり思案にくれてゐると、ちやうど自分ののぼつて來た道を後ろから歩んで來る一人の武士がある。翁はその武士に縋つて同行し、難を免れたのであつた。もう一つは、或時翁が大阪の知人の許に相談に行き、その戻りに淀川の川船に乗り合せたところ、不幸難船して數多の人命が失はれたが、翁ひとりだけ身に怪我也蒙らずに助かつたといふことであつた。翁はかうした體驗を味ふたびに、念佛者の有難さを一層感じ、自己の信仰を増長させて行つた。

證文を墓前で焼く

後年、翁は當時を回顧して、「どうしてやりおふせたか、自分でも分らない。」と語つてゐたが、兎に角たつた八年間の努力で、翁は八千兩の尨大な借財をきれいに返済してしまつたのであつた。その折、翁の手に戻つて來た借用證文は風呂敷包みに一抱へになつたほどである。さうしてその包みを翁は菩提寺である下京の大雲院に持ち寄り大施餓鬼會を嚴修した。終つて更にその包みを阪根家先祖代々の墓前に備へると、「これでやつと阪根の家も潰さずにすみました。これもひとへに御先祖様のお力添へのお蔭と思ひますので、たゞいまお禮にまゐつた次第でございます。」

さう翁は先祖への涙ながらの言上をしたあと、深く澄んだおのづからなる念佛の聲のうちに、靜かにその證文の束を墓前で焼きたのであつた。……(つづく)

(本文)

舍利弗、衆生聞者、應當發願願生彼國、所以者何、得與如是諸上善人、俱會一處、(發願)舍利弗、不可以小善根福德因緣、得生彼國(小善根を簡ぶ)(字解)善根||善き行爲のこと。福德||福は善行、徳はその結果。因緣||因は原因、縁はそれを助ける條件。

淨土獲得の方法

佛說阿彌陀經講義其三 || ||

中 村 辨 康

(七) 一切の善行爲は畢竟小善根の福德のみ

極樂は理想の世界である。一切が躍動して居る世界である。すべてが活きて働いて居るのである。無駄なものはない。だから自分達もさうした好い世界に生きたいものと念願したくなる。

今迄のホンの略説したに過ぎない極樂淨土の組織も、それが一部分であるだけに、誰でも夫れよりもよいと云ふことが想像され、そしてそれを獲得したいと望まれるのである。

其上極樂に居る人々は皆な立派な善い人ばかりである。

そんな人達丈の世界なら、何んなか住みよいであらうと想像される。

振り返つて私達の生活を見るに、何とまあ、浅間しい環境ではないか。丸で御話にならない雑駁なものである。

毎朝毎夕の新聞には、ヤレ銀行ギヤングの、ヤレ離婚訴訟の鉢合せの、ヤレ人殺しの、ヤレ科學的犯罪の、ヤレ親子心中の、ヤレ收賄疑獄の、ヤレ強盜の竊盜のと、讀むのにくたびれる位

な嫌やな事件ばかりが満載されて居る。よくかう毎日毎日盡きずに醜い事が續くものかと呆れて仕舞ふ程である。

イヤそれは決して人事ではない。私達の身の廻りにも随分ある。こつちは誠心誠意でやつて居るのに、やりもしない事を捏造して悪口云つたり僻んだり怨んだりして居るものもあるのだから、とてもやり切れはしない。さればと云つて一一辯明して居たら何も出来はしない事になる

イヤ外の事ばかりではない。自分の心の中にさへ縁でもない悪魔が、何時の間にか巢喰つて居て、場合に依つては随分醜いことや恐ろしいことをやり兼ねはしないのである。世間體とか自分の良心とかが夫れを押へて居るから、具合よく調節されて行くものの、若し野方圖にさせて置いたら、何んな事になるかも知れない。考へて見れば實にあぶない橋渡りである。

然も無反省の人は案外平氣で「俺は善人だ」と自惚れて居るのだから恐ろしい。それは畢竟掃溜のやうな中に居るから「臭いもの身知らず」で、何も判らないのである。恰度蛆虫が汚いものを知らないやうに、他の人もやつて居るのだから「是れ位は何でもない」と反省しやうともしないのである。

第一私達は私達の時間が自分の命だと云ふことさへ知らない。だからサボれる丈はサボつて居たのである。第二に私達は全く横着者である。努力すればする程自分の腕が磨かれ、頭も利好になるのに、出来る丈横着をして勢力を始末したのである。勢力の儉約なぞは人間が墮落する根本なのに、自分の勢力を儉約して人格を下落させて大損の上塗りをして居るのだが、それにはチツトも御氣が付かないのである。其上「仕事は大勢でやれ、甘い物は小勢で喰へ」など云ふ冗談を恰も格言の如くに信奉して居るのだから、随分下らない者だと云へるのである。舉句の果には喰ひ過ぎて腹下しを

照鑑 || 照らし鑑が
みられる。

願生 || 淨土に生き
んと願ふこと

して、醫者にかゝるのを惜しんだ爲に慢性腸カタルなんかになつて、遂には一生を棒に振つたなどと云ふ事になつては全く以て御話にならないお話である。

見え坊で強がりで弱虫でいじけ屋で丸で矛盾ばかりであるのに「修養などは他人のすること、自分分は完全無缺だ」と考へて居るのだから、まづ體裁のよい鼻つたらしでしかない。

本當に自分をよくしたいのなら、本氣で反省しなければ嘘である。

反省も單に道德的な反省ならまだ本當ではない。ホンの一時的な永續きのしないものである。其上深刻な反省ではないから、何か大きなシクジリでもしない限り唯だ上つ面を撫でる丈である。

然るに宗教的な反省が起ると、自分の心の中核を突き破られる。かうして本當の悔い改めが出来れば社會惡の一つ一つが皆な私自身の中にある「惡」の現はれと痛感し、自分の努力の足らない結果と懺悔されて、一層自分の修養にいそしむと共に、一層社會の教化に身命を捧げんものと、出来ない乍らも、覺悟の臍を固めるに至るのである。何しろ如來照鑑の下に生活して居るのだから、朝な朝な佛と共に起き夕な夕な佛と共に眠つて、永遠に反省が續き永遠に修養が積まれ倦きることを知らないことにもなる。

今ま此阿彌陀經に於ては、釋尊が私達に宗教的に憧憬を起さしめ、道德的な反省をして宗教的反省へと飛躍せしめん爲めに、私達に理想世界なる阿彌陀佛の淨土を願望せんことを慫慂し、願生の心を起せと奨められて居るのである。然しそれは小善根の福德では到底其目的を貫徹することは出来ない

と斷つて居られるのである。然らば其小善根とは何であるか。別に其名を擧げては居ないが、其次ぎに念佛に依つてのみ可能だ

三十七道品、四念處、四正勤、四如意足、五力、七覺支、八正道を云ふ。
 四念處、身、受、心、法、の四念、心、苦、空、無常、無我を觀念すること。
 四正勤、惡を止め善をなすこと。
 四如意足、四種の禪定、五根、五力、七覺支、八正道の第二講の註を見よ。
 六波羅密、六度と云ふ。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六種の行。
 四攝法、布施、愛語、利行、同事の四種の善行。
 戒定慧三學、戒學（惡を止めること）、定學（心を澄ましめること）、慧學（眞理を達觀して惑を斷ずること）。
 正覺、三菩提とも云ふ。眞實の覺智のこと。
 涅槃、ニルバー

と云ふことを云つて居るところから推察すれば、念佛以外の一切の宗教的行爲并に一切の道德的行爲は凡て「小善根」と云はれる内に入つて居る事になる。

一般佛教の上では三十七道品とか六波羅密とか四攝法とか色々な宗教的並に道德的な行爲が規定され、大體戒定慧の三學に依て、煩惱を斷盡し又は調伏して、正覺を成じ涅槃を證すべきであると教へて居るのに、此經ではそれら一切を小善根として排除し去つて居る。隨分思ひ切つた革命的な言葉だと言はざるを得ない。

即ち一般佛教の通念を打破した革命教として此阿彌陀經は實に驚天動地の宣言であると云ふべきである。

餘程の確信、餘程の自覺なくしては、こんな大膽な宣言は云へない。

つまり聖道門の教は、結局人間の理想生活を云つたもので目的論に過ぎなく、阿彌陀經の説く念佛こそは佛教の目指す其目的を端的に獲得すべき最勝の實踐法であることを、一代説法の最後の結經として斷言せられたものである。

さればこそ「我れ是利を見るが故に此言を説く」と此經に云つて居られるのである。

かくの如く淨土獲得の直接的行爲としては、念佛以外の他の一切の善行爲は物の役にも立たないと、ハツキリ言ひ切つたのは、畢竟、凡ての道德的行爲及び宗教的行爲が、淨土獲得の信仰生活の上に自然に素直に現はれて來るからに外ならないのである。

信仰なき者の道德行爲は、要するに他律的のものである。私達の良心と云ふものは畢竟社會的環境に支配されて居る。だから佛教に説く道德規範は「戒」と名付けられるものだが、其戒の實踐は「戒

ナ、不生、寂滅、無爲、安樂、滅度の譯あり、不生とは永遠の生命のことなり。

結經——結論的な經典。

戒——五戒、八戒、十戒、二百五十戒、五百戒三聚淨戒等の別あり。

因果法——科學的推理。

因緣法——變遷し行く辨證法。

體」を獲得しなければ本當でないと一つの核心を得なければならぬと教へて居る。戒體とは一つのハツキリした決心に外ならない。そして此決心は「自己改造」の爲めに望まれるものであり、之の「自己改造」は淨土獲得の爲の結論として考へられた事であるから、二段三段と推理して決心されるものである。然し之れよりも、端的に淨土を懷れ、阿彌陀を欣慕し行く念佛行爲の方が餘程手取早いのである。

成程、淨土への憧憬は感情であり、成佛への戒行爲は意志であるから、如何にも感情の方が弱いやうにも想像せられやう。然し感情も亦た直に意志を呼び起すものである。其上理智から導かれた決定意志よりも、感情と結び付いた決定意志の方が事實上根強いものでもある。例へば憎いと可愛いと云ふ感情が、怨恨とか戀とかを呼び起して、或は夫婦となり、或は敵同志になつて、其人達の一生をまで支配するに至るやうに、感情こそは非常な強力な意志の決定を形成する力を有つて居る。

随つて理論から導かれた修養法よりも、感情を先行とする修養法の方が簡單であり乍ら、事實は非常に強固なものである譯である。

此處に聖道門の理論よりも淨土門の信仰の方に力強いものである。

此力強さこそ大善根福德の因縁と云はるゝものがある。

普通の道德律は因果法が根抵となつて居る。一に一を加へれば二になり、二に二を加へれば四になるといふ行き方である。

然るに信仰は因緣法に依つて居るから、一に一を加へると十になるか百になるか千になるか、其時の縁の強さで色々に變化するから確然としては居ないが、少くとも二以上無限大にまでなるものである。

本願力 阿彌陀佛の誓願完成の上に現はるゝ力。

(本文)

舍利弗、若有善男子善女人、聞說阿彌陀佛、執持名號、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不亂、其人臨命終時、阿彌陀佛、與諸聖衆、現在其前、是人終時、心不顛倒、即得往生、阿彌陀佛、極樂國土、舍利弗、我見是利故說此言、若有衆生、聞是說者、應當發願、生彼國土、(念佛、來迎、往生)

(字解) 一心不亂 一心に

なりて散らざる

諸聖衆 觀音勢至

等の菩薩を云

現在其前 來迎の

増上緣力 現象を

現象せしむる最

も大なる條件。

六度萬行 六度は

る。例へば一粒の麥が芽を出して成育すれば數多の麥粒を收める事が出来るやうなものである。

天地全體に滿ち充ちて居る如來の本願力と——それは凡ての生物が分擔し把持しつつある向上意志の根元であり、且つ綜合でもあるが。——こちらの向上心とが向合ふ時生ずる強力な牽引力即ち大増上緣力の引く力は他の何ものも之に匹敵することは出来ない。恰度感情と感情と結び合つた戀愛が親の力や兄弟の力や社會の力などでは到底之を引き離すことが出来ないのと同じ理である。

誠に念佛は如來に直面する直接的行爲である。如來の全體を知らうとするのでなく、如來の御心の眞中に飛び込んで行く單刀直入の行爲である。

だからこそ他の一切の善行爲で到り得ない世界を獲得することが出来るのである。

深草の少將が小野小町の所へ、九十九夜も通ひ、あらゆる術策を用ゐて、其關心を求めやうとしたけれども、悉く失敗に歸したと云ふ話があるが、之れは六度萬行などの自力的善行爲が、淨土を獲得し得ないのと同じ筆法だからである。

かうした常識でも判るやうに淨土を獲得する方法は念佛より外にはない。即ち阿彌陀經に説く「執持名號」が最勝の方法なのである。

(八) 佛教の全要求が籠められた念佛

阿彌陀佛の御名を呼びかける念佛。

御名に執着して行く念佛。

御名をしつかり握つて離さない念佛。

六波羅密のこと
 (前に出づ) 萬
 行は六度に依る
 一切の行。六度
 萬行を完全た修
 行する時佛とな
 ると云ふ。
 久遠 數へられざ
 る昔のこと

之れが「執持名號」である。

磯の鮑の片思ひのやうな戀心ではない。久遠の昔から深い約束が結ばれて居るものである。戀心と云ふよりも母親を慕ふ心に似た氣持である。戀慕ではなく欣慕の心である。至誠を以て願ひ求める赤子の如き絶對求愛である。其處には自力的な術策が許されて居ない。母親の懷にシツかり抱きついて一心に呼ぶ聲に、一一「おゝよ。おゝよ」と赤子の全要求を受け入れて呉れることが信じられて居る全幅の信服のみがあるのである。

それは一度だつてもよい。一日だつてもよい。七日だつてもよい。乃至は一生涯だつてもよい。一聲一聲が如來に抱かれて行くのであるからである。

遅く氣付いたものは一聲か二聲かしか呼び得ないかも知れないが、それだつてよいのである。けれども命のあらん限り、それが續けられて行くのが人情である。佛の方から云へば一度氣が付いて呉れたらこれで満足かも知れぬが、こちらからすれば慕はしく懷かしく離れともないのである。だから一度丈でよささうなものだと云ふやうな薄情な氣持は本當のものではない。

また此經で殊に面白いと思ふのは、大無量壽經には三十五の願に「轉女成男の願」と云ふのが云はれてあつて「婦人は信仰に依つて男になる」と説かれて居るが、此阿彌陀經では、さうした二段構へは用ゐられず、男も女も何等の區別が考へられて居ない事である。「善男子善女人」の均しき人間として御名を呼ぶ信仰心が規定されて居る丈で、男女の間には何の區別もない。唯だ念佛し得る程の信仰人は何んな悪人でも皆な「上善人」なのである。況して男女の區別なぞはない。即ち普通道德の範疇をさへ超えて、皆な悉く「最上の善人」なのである。阿波介のやうな變態心理所有者も、天野四郎の

龍女リウニョ龍族リウシュと稱する民族ミンシュの女のすること。
 薊アヲ記キ保證ホシメされること。

鎌倉カマクラ街道カイドウ鎌倉幕府カマクラバクフが優勢ウエウシなりし頃キタマ、鎌倉カマクラへの通路ツミチはあらゆる階級カクキの者が通行ツウギョウし何ナニでも通スること故ユヘを譬ヒョウへて云イハふ。
 聖道セイダウ門モン聖者セイシャとなるべきための教キョウ。

四智シチ佛ブツの四智シチ、大圓鏡智ダイエンキョウチ、平等性智トウジョウジョウチ、妙觀察智ミョウカクサチ、成所作智ジョウサクジョウチの四。

三身サンシン法身ホフシン、報身ホウシン、應身オウシン。

十力ジュリキ一切イツキツの事に通達ツウタツする十種の力リキ。

四無畏シムバイ一切イツキツに於て畏オソれるところなき四種の力リキ。
 十八不共法ジュハツフコフホフ佛ブツに限カギる十八種の功コウ徳トク。
 持戒チケイ、布施フセ、忍辱ニンジュク、禪定ゼンテイは六度ロクダツ修行シュウギョウ。

正覺ジョウガク涅槃ネパナ二轉ニテンの妙果ミョウクとも云イハふ。

やうな兇惡無慙キョウアクムズンな強盜キヤウダウも、朝アサに潮汲シホグミむ高砂タカサの浦ウラの海女ウミメも、夕ユフに情ナラシの切賣キゲウをする室むろの津つの遊女ユウメも、悉ことごとくおしなべて「諸上善人しよじやうぜんじん」なのである。特別な八歳はつさいの龍女リウニョが成佛ブツポウの記薊アヲを受けたと云イハふ法華經ホフケキヤウの記述キシツを、鬼おにの首くびでも取とつたやうに懸かぎ立てなくとも、此阿彌陀經このあみだきやうでは平然へいぜんとして普通ふつたう事ことの如ごとくに、唯ただだ「善男子ぜんなんし善女人ぜんにょじんよ」と何なんの顧慮こりよもなく呼びかけて居ゐるのを知しつて置く可べきである。それは畢竟阿彌陀佛ひつぎやうあみだぶつの中なかには一切いっさいが籠こめられて居ゐるから「鎌倉街道かまクラカイドウ」の如ごとく誰たれでも通行ツウギョウが出来できるのである。

其上そのうへ、聖道門系せいだうもんけいの諸宗派しよしゆはいの目的もくてきたる正覺ジョウガクと涅槃ネパナとは、特別とくべつに無量光アミタイキヨウ、無量壽アミタイスの二ふたつが阿彌陀佛あみだぶつの別名なとして、私達わたしの耳みみにタコが出来できる程ほど云いはれて居ゐる通り、阿彌陀あみだを獲得くわくとくすれば、結局無量光けつぎよくわうきやうたる正覺ジョウガクと、無量壽むりやうじゆたる涅槃ねはんとが獲えられるので、「諸佛しよぶつは念彌陀三昧ねんみださんまいに依よつて成佛ぶつぽうした」と般舟三昧經はんしゆさんまいきやうにも云いつて居ゐるのである則すなはち阿彌陀佛あみだぶつの中なかには、四智しち、三身さんしん、十力じゆりき、四無畏しむばい、十八不共法じふはふふこふほふ等の佛敎ぶつぎやうの要求ようきうする凡またてが籠こめられて居ゐるのだから、何なんも敢あへて持戒ちけいも布施ふせも忍辱にんじやくも禪定ぜんテイも要いらないのである。寧ろ手取早むじてとくさばやく阿彌陀あみだの中なかに飛込とひこんで行く「執持名號しゆぢぢなみごう」の方が、何なんんなに超スビードなのか分わらない。

つまり死しない壽じゆを發見はつけんする事は阿彌陀あみだを發見はつけんすることではしかなない。それが涅槃ねはんである。

そして凡またてに明あるく明あかにする事は阿彌陀あみだの中なかにのみ得えられる事ことで、それが正覺ジョウガクである。

して見みれば「阿彌陀あみだを執持しゆぢ」することこそ本當ほんたうの全佛敎ぜんぶつぎやうの要求ようきうする實踐法じつぎやうぽうだと云いふ事が出来できる。

また何なんんなに悟さとつて居ゐる人ひとでも、人間にんげんの感情かんじやうがある限り、死しに直面ちうめんした時には、生いきる爲ためにいくらか愛着あいしやくして居ゐた一切いっさいのものに「へい左様さやうなら」をするのだから、多少たうしやうなりとも心の動搖どうぎやうを感じかんぜずには居ゐられないであらう。すつかり枯かれ切きつて仕舞しまつて居ゐる枯木こぼくのやうな人ひとなら格別かくべつ、まだ成なすべき仕事しごとも残のこつて居ゐり、整理せいりしなければならぬものも澤山たくさんある有爲いうゐの人ひとならば「生死せいし」を思おもひ切きつて居ゐると

顛倒——常樂我淨の
四顛倒心。
絶対依憑——たより
切ること。
刹那——瞬間の
こと。
大増上縁——一切に
打勝つ力。

云つても、幾らか心の曳かれるものがある筈である。誰が「俺は最後に臨んでも心は決して顛倒しない」と云ひ切れるであらう。

然るに念佛は「阿彌陀佛に執持することであるから、一心不亂に無量壽無量光を執持して居る人である限り、其時に臨んでも何の顛倒が起り得やう。これは眞剣な信仰の事實である。本當の一心亂れざる南無阿彌陀佛の絶対依憑の中には何の動搖もあり得ない。だから此經には「即得往生阿彌陀佛國」と云つて居る。むしろ束縛の無くなつた刹那に於てこそ本當に阿彌陀佛の中に入り込めるからである。則ち「即得」と云ふ字が其間の妙味を物語つて居るのである。即ち念佛の念の極まる所、それが「阿彌陀佛現在其前」である。つまり其處に大増上縁が働くからである。(つゞく)

圓乗寺
住職

市原廣界師著

〔特價一圓二十錢
送料六錢〕

建墓と墓相の研究

附録 墓相小言

◆初めて佛教家が著はした研究書◆

神官や學者の著書ではない。佛教徒たる著者が三十年の體驗と、文献の研鑽から成つた唯一の参考指導書です。附録の「墓相小言」は、江戸期の名著で、墓相研究家のタネ本と稱せられる秘書です。——〔四六版和裝本〕——

東京豊島區巢鴨二丁目四十二

内容目次送呈

古今稀書刊行會

振替東京六五二九一番

佐藤春夫著 小杉放庵畫並に裝訂

掬水譚 (法然上人別傳) 〔定價三圓五十錢〕

現代文壇の巨匠であり、信行ともに淨土門の歸依者たる著者にして、始めてものし得る法然上人傳である。小杉放庵畫伯が意匠をこらした豪華版。コロタイプ挿畫六十四枚。

國寶 右京權大夫藤原隆信筆

法然上人御影

堅一尺四寸・横八寸
絹本寫眞プロセス版
精巧典雅十數度刷

精巧無比！ 神々しき上人の御影は實に眞に迫るものあり。上人の人格を景仰し、念佛生活にいそしまれる方は、是非朝夕座右にかゝげて恭敬せられんことをすゝむ。〔定價壹圓〕

編輯後記

◆明けましてお目出度うございませう。本誌も第二年度の春を迎へることになりました。ひとへに讀者諸賢の御援助を感謝いたします。派手ではないが、一歩々々着實の歩みをつづけて来た本誌の生長の道を、本年は更に新しい勇氣をもつてガツチリ踏みしめてゆきたいと思つてゐます。歴史の正しい認識はつねに光ある將來への進路を示唆します。法然上人のもとに——この標識から引き出して来る財は限りなく豊富です。私達はその寶の山に分け入つて、汲めども盡きない生命の泉を少しづつ持ち運んで来たいと思つてゐます。

◆今年度からもつと、面白い雑誌にしやうと同人一同随分骨を折りました。まだもの足らぬ處は

澤山ありますが、本誌が絶えず讀者のため忠實ならんとしてゐる努力は、充分に認めて戴けると思ひます。

◆思想昏迷、國をあげて、これが對策を講じつゝある時、東京女高師の校長下村壽一先生と學界の巨匠小野玄妙博士がともに御自分の體驗を引合に、この問題に關する御高見を發表して下さいましたことは、本誌新年號をかざるにふさはしい名篇です。

◆それに友松圓諦先生の「上人は微笑む」も、必ず讀者に感銘を與へずにはおかれないものと思ひます。

◆宇野先生の「旅路の芭蕉」は號を追つて面白く、佳境に入つたかたち、讀者諸氏より激勵の言葉を聞きたびに力み立つ。われ／＼も芭蕉と共に寂しい、又清らかな旅路を共にしてゐる感が深い。斯う云ふ旅の姿も立派な人間修業の一つの輝き、周囲の日常性をか

へりみる時、何等かの教へを讀者は持つと自負してゐる。編輯子の大きな喜びである。一人の旅より二人の旅、その渦のひろがつて行くところは大きい！

◆山中峯太郎先生は嘗て「法然上人」をものされたことのある方で、上人鑽仰者のお一人です。本號より續いてその信仰を御發表願ふことにしました。御期待下さい。

◆目次のカット並に扉の繪は美術界にその名高き森田沙夷畫伯の筆で、是も得難いものゝ一つです。

◆讀者から募集した和歌、俳句は意外の多數にのぼり、編輯部もその反響の大きいのに今更乍ら驚いた次第です。和歌は與謝野先生にお願ひして今回は佳作だけを載せ、俳句は松根先生とは未だ交渉とゝのはないので一時雪中庵系八朶園派の氷黒井或角先生にお願ひして、これも佳作を撰りました。

淨土 一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年三月三十日印刷納本
昭和十年二月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 眞野 正順

東京市本所區千歲町二ノ一八
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二ノ三
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人鑽仰會
東京市芝區芝公園明照會館内

振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料一錢)

一ヶ年 金一圓
(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「淨土」及び月刊新聞「法然鑽仰」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 三十錢 (送料 二錢)

法然上人の辿り給ひし信仰の
道こそわれらがしるべなり！

信仰を求め宗教に憧れるのは人間本來の姿である。古來宗教界の巨人と仰がれる聖者は悉くこの人間の本當の姿を最も輝かしく明瞭に現はした人間の精神の鏡であり、また萬人の中に潜む信仰心の萌芽に開花の時を與へた慈雨でもある。故に若しそれ等巨人生活の内부를覗ふことが出来るなら、我々は日常無意識に捨て、省みなかつた生活の瓦礫の中に、突如燦然として輝く向上の珠玉を見出し、貪しく思はれた己れの生活が豊富な内容に充たされてゐるのを再發見して驚嘆するのは當然である。

法然上人の巨大にして無双な求道生活、信仰生活の迹を慕ひ、その法悦にひたらんとするも時に現代生活の汚濁を洗ひ清め清淨なる人間本來の姿に立返らんがために外ならぬ。

著者の言葉——精魂をつか

つらしめて求めに求めた三十年の求道生活とその當時のあらゆる階級の人達を魅し盡した四十年の信仰生活とが何んなに近代人の胸を突くかを振りかへて見たいと思ふ。

法然上人

大正大學教授 大野法道著 四六判 七〇頁 拾五錢 (送料 二錢)

法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その嫺々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかない！

◆ 發行所 法然上人鑽仰會 ◆

冬の肌のまもり
國産のメンソール

ボア

特 效

肌のあれ 日やけ 痔 霜やけ 赤ざれ
きず一切 頭痛 目まひ 靴ずれ
歯いた 鼻つまり 外耳炎 化粧下
乳房ざれ かみそり、ひげそり後の消毒、お白粉おとし。のど、胸等の濕布用によろし。

目 品 賣 發

青年輪胎救急
男子用 梅木地製 金拾錢
婦人用 同製 金拾錢
小木魚フトン付
金壹圓五拾錢
金貳圓
○此外大小各種あり、價格表御一報次第送呈。



定 價
ポケット用（美罐入）金拾錢
家族用（三罐入）金貳拾錢
家庭用（中オンス入）金參拾錢
同徳川（一オンス入）金五拾錢
同常備用（三オンス入）金壹圓
當分の内、右定價の二割引にて提供。
御注文はすべて前金のこと。送料は弊社にて負擔。御送金は振替が便利ですが郵券代用にて可。

試藥進呈
本誌讀者に限り、頒布所へハガキでお申込次第、見本を無代進呈します

中 寺 光 西 町 幡 八 縣 賀 滋

社 字 卍

振替電話 大阪近江八幡 三五二八番
番 八二三四七

（頒）
（布）
（所）

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十年十二月廿日印刷納本 昭和十一年一月一日發行

淨 土 第二卷 第一號 定價金十錢（送料一錢）